

県道高松善通寺線道路改修事業 及び
県道西植田高松線道路改良事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

田村遺跡Ⅱ
川島本町遺跡
川島本町南遺跡

2007. 1

香川県教育委員会

県道高松善通寺線道路改修事業 及び
県道西植田高松線道路改良事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

田村遺跡Ⅱ
川島本町遺跡
川島本町南遺跡

2007. 1

香川県教育委員会

序 文

丸亀市田村町に所在する田村遺跡は、県道高松善通寺線の道路改修事業に伴い香川県土木部道路建設課からの依頼で、香川県埋蔵文化財センターが平成17年4月から6月までの3ヶ月間で発掘調査を実施しました。田村遺跡は古代の田村廃寺（白鳳時代～平安時代）の北に広がる、古墳時代末～平安時代（7～12世紀）頃の集落跡です。平成11年に行った、（財）香川県埋蔵文化財調査センターの発掘調査では、平安時代頃の田村廃寺で使われた釣鐘を鋳造したと考えられる、全国的に珍しい梵鐘鋳造遺構が見つかっています。

今回の発掘調査では、古墳時代末～奈良時代頃の掘立柱建物跡の柱穴跡が多数見つかりました。その組合せから10棟程度の建物跡の存在を推定することができ、田村廃寺の周辺に広がる集落跡の実態を探る上で、大変重要な成果になりました。

高松市川島本町及び高松市池田町に所在する川島本町遺跡、川島本町南遺跡は、県道西植田高松線の道路改良事業に伴い香川県土木部道路建設課からの依頼で、香川県埋蔵文化財センターが平成17年7月から10月までの4ヶ月間で発掘調査を実施しました。

今回の発掘調査では、縄文時代～江戸時代頃の遺構・遺物が見つかりました。中でも縄文時代後期頃の遺物は、高松平野でも出土例が少なく重要な資料になりました。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理、報告書の刊行に至るまでの間、香川県土木部道路建設課、地元関係者各位に多大な御協力と御指導をいただきました。ここに深く感謝いたしますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成19年1月

香川県埋蔵文化財センター

所長 渡部 明夫

例　　言

1. 本報告書は、県道高松普通寺線道路改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査事業で調査した、香川県丸亀市田村町に所在する田村遺跡（たむらいせき）及び、県道西植田高松線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査事業で調査した、香川県高松市川島本町に所在する川島本町遺跡（かわしまほんまちいせき）、高松市池田町に所在する川島本町南遺跡（かわしまほんまちみなみいせき）の報告を収録した。
2. 発掘調査は、香川県土木部道路建設課から依頼を受けて、香川県教育委員会が調査主体となり、現地調査は香川県埋蔵文化財センターが担当した。
3. 発掘調査の期間及び担当は以下のとおりである。

（田村遺跡）	（川島本町遺跡、川島本町南遺跡）
期間 平成17年4月1日～6月30日	期間 平成17年7月1日～10月31日
担当 西村尊文、古野徳久、中里伸明	担当 西村尊文、古野徳久、中里伸明

4. 調査にあたっては、下記の関係機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）
香川県土木部道路建設課、香川県中讃土木事務所、香川県高松土木事務所、丸亀市教育委員会、地元自治会、地元水利組合、株式会社百十四銀行城西支店
5. 本報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。
本報告書の執筆は西村、中里が担当した。執筆の分担としては、田村遺跡の第Ⅰ章、川島本町遺跡、川島本町南遺跡の第Ⅰ章、第Ⅱ章第1節及び、第Ⅲ章の石器に関する記述を西村が、それ以外の主要な部分を中里が担当した。なお、編集は西村が担当した。
6. 本報告書で用いる方位の北は、旧国土座標系第IV系（日本測地系）の北であり、標高は東京湾平均海面（T.P.）を基準としている。
7. 本書で用いている遺構記号は次のとおりである。
SB：据立柱建物跡 SA：権列跡 SP：柱穴跡 SE：井戸跡 SK：土坑跡 SD：溝跡
SX：性格不明遺構
8. 採図の一部に国土交通省国土地理院作成の1/25,000地形図を使用した。
9. 遺物観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準色帖1997年度版』による。
10. 写真図版（添付CD-ROM）のビューアーは、株式会社トリワークス（<http://www.kuraemon.com/>）の「蔵衛門2005professional」を使用した。

本文目次

田村遺跡

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過 1

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境 2

第2節 歴史的環境 2

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 概要 7

第2節 基本層序 7

第3節 検出遺構・出土遺物

　掘立柱建物跡・櫛列跡 7

　柱穴 20

　溝跡 23

　包含層出土遺物 23

第4節 III-3・4区の調査 27

第Ⅳ章 調査成果の分析

第1節 調査成果について

　(1) 掘立柱建物跡・櫛列跡の変遷 28

　(2) 出土遺物について 31

第2節 既往の調査との比較検討

　(1) 各遺構群の比較 31

　(2) 寺院関連遺構・遺物の有無から見た比較 32

第3節 周辺の地割との比較検討

　(1) 検出された建物跡群を規制する地割の抽出 35

　(2) 田村北型地割の成立背景 37

第Ⅴ章 まとめ 38

川島本町遺跡、川島本町南遺跡	
第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	43
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	
第1節 地理的環境	45
第2節 歴史的環境	47
第Ⅲ章 川島本町遺跡の調査成果	
第1節 概要	49
第2節 基本層序	49
第3節 検出遺構・出土遺物	
柱穴	49
土坑	55
井戸跡	56
溝跡	56
性格不明遺構	68
包含層出土遺物	77
第Ⅳ章 川島本町南遺跡の調査成果	
第1節 概要	82
第2節 基本層序	82
第3節 検出遺構・出土遺物	
柵列跡	85
柱穴	85
溝跡	87
包含層出土遺物	87
第Ⅴ章 調査成果の分析	
(1) 弥生時代後期～古墳時代前期の土器の色調・胎土について	88
(2) 今回検出した井戸跡および土坑について	89
第VI章 まとめ	91

挿 図 目 次

田村遺跡

第1図 田村遺跡位置図 ······	1
第2図 田村遺跡周辺遺跡分布図 ······	3
第3図 田村遺跡調査区割図 ······	8
第4図 東壁土層断面図① ······	9
第5図 東壁土層断面図② ······	10
第6図 各調査区西壁・北壁土層断面図 ······	11
第7図 SB001-002, SA001平面図・断面図 ······	12
第8図 SB001出土遺物実測図 ······	13
第9図 SB003平面図・断面図及び出土遺物実測図 ······	14
第10図 SB004平面図・断面図 ······	15
第11図 SB005-006平面図・断面図 ······	16
第12図 SB007-008平面図・断面図及び出土遺物実測図 ······	18
川島本町遺跡・川島本町南遺跡	
第26図 川島本町遺跡・川島本町南遺跡位置図	
第27図 調査地より由良山を望む ······	43
第28図 川島本町遺跡・川島本町南遺跡調査位置及び区割図 ······	44
第29図 微地形分類図 ······	46
第30図 川島本町遺跡・川島本町南遺跡周辺遺跡分布図 ······	48
第31図 I区西壁・II区中央トレンチ土層断面図 ······	50
第32図 I区北壁・I区東壁土層断面図 ······	51
第33図 II区東壁・I区南壁土層断面図 ······	52
第34図 II区西壁土層断面図 ······	53
第35図 柱穴・土坑平面図・断面図 ······	54
第36図 柱穴・土坑出土遺物実測図 ······	55
第37図 SE101平面図・断面図及び出土遺物実測図 ······	56
第38図 SD101-102-104-106平面図 ······	57
第39図 SD101-102-104-106断面図及びSD102出土遺物実測図①···	58
第13図 SB009-010平面図・断面図 ······	19
第14図 SB010出土遺物実測図 ······	20
第15図 柱穴平面図・断面図① ······	21
第16図 柱穴平面図・断面図② ······	22
第17図 柱穴出土遺物実測図 ······	23
第18図 溝平面図・断面図 ······	24
第19図 包含層出土遺物実測図 ······	24
第20図 田村遺跡遺構配置図 ······	25・26
第21図 SK303平面図・断面図及び出土遺物実測図 ······	27
第22図 田村遺跡主要遺構変遷図① ······	29
第23図 田村遺跡主要遺構変遷図② ······	30
第24図 田村遺跡遺構配置図 ······	34
第25図 田村遺跡に関連する地割ライン ······	36
第40図 SD102出土遺物実測図②及びSD101出土石器実測図 ······	59
第41図 SD103-105-107-108平面図・断面図及びSD107出土遺物実測図 ······	60
第42図 SD201~203-205~207平面図・断面図及び出土遺物実測図 ······	62
第43図 SD208~210平面図・断面図 ······	63
第44図 SD208~210出土遺物実測図 ······	64
第45図 SD109-110平面図・断面図及び出土遺物実測図 ······	65
第46図 SD110-204-212平面図・断面図及び出土遺物実測図① ······	66
第47図 SD110-204-212出土遺物実測図② ······	67
第48図 SD213~SD217平面図・断面図及びSD213出土遺物実測図 ······	68
第49図 SX201平面図・断面図 ······	69
第50図 SX202平面図・断面図及び出土遺物実測図 ······	69

第51図 SX202出土剥片 長・幅比率	70
第52図 SX202出土楔形石器 長・幅比率	70
第53図 SX202出土楔形石器の削片 長・幅比率	70
第54図 SX202出土石器実測図①	71
第55図 SX202出土石器実測図②	72
第56図 SX202出土石器実測図③	73
第57図 SX203・204平面図・断面図及びSX 203出土遺物実測図	74
第58図 川島本町遺跡遺構配置図	75・76
第59図 縄文土器群出土位置図	78
第60図 縄文土器群出土遺物実測図①	79
第61図 縄文土器群出土遺物実測図②	80
第62図 包含層出土遺物実測図	81
第63図 川島本町南遺跡遺構配置図	82
第64図 西壁土層断面図	83
第65図 東南壁土層断面図	84
第66図 SA01平面図・断面図	85
第67図 SP27・31平面図・断面図	85
第68図 SD03～07平面図・断面図	86
第69図 川島本町南遺跡出土遺物実測図	87
第70図 石器計測基準図	94

表 目 次

田村遺跡

第1表 田村遺跡周辺遺跡一覧	4
第2表 据立柱建物跡・柵列跡の大別	28
第3表 須恵器種の焼成の大別	31

川島本町遺跡・川島本町南遺跡

第7表 川島本町遺跡・川島本町南遺跡周辺 遺跡一覧	47
第8表 SX202出土サヌカイト製石器類組成表	70
第9表 弥生時代後期～古墳時代前期における 各器種の色調及び胎土	88

第4表 田村遺跡出土土器観察表	41
第5表 田村遺跡出土瓦観察表	42
第6表 田村遺跡出土石器観察表	42

第10表 川島本町遺跡出土土器観察表	95
第11表 川島本町遺跡出土瓦観察表	99
第12表 川島本町遺跡出土石器観察表	100
第13表 川島本町南遺跡出土土器観察表	102
第14表 川島本町南遺跡出土石器観察表	102

図 版 目 次

田村遺跡

図版1 (1)I-2区全景 (北から)
(2)II-1区全景 (北から)
(3)II-2区全景 (南から)
(4)SP106完掘 (西から)
(5)SB002-SP133土層断面 (北から)
(6)SB009-SP250土層断面 (東から)
(7)II-1区東壁土層断面 (西から)
(8)SB003-SP138-12

図版2 (9)包含層出土土器	33
(10)SK303出土土器	40

川島本町遺跡・川島本町南遺跡

(1)I区全景 (北から)	
(2)II区下層遺構面全景 (北から)	
(3)II区上層遺構面全景 (北から)	
(4)SE101周辺 (北から)	
(5)SE101全景 (西から)	
(6)SD102遺物出土状況 (北から)	
図版3 (7)SD208-209全景 (南北から)	
(8)SK103遺物出土状況 (南から)	
(9)SX202検出状況 (南から)	
(10)SX202サヌカイト碎片・剥片類出土状況 (南から)	
(11)II区包含層出土縄文土器群 (西から)	
(12)SE101出土土器	9

◎ SE101出土土器	10	◎ 包含層出土土器	168・170
◎ SD102出土土器	28	◎ SX202出土石器	94～113
図版4 ◎ SX203出土土器	146	◎ SX202出土石器	114～118
◎ 包含層出土土器	148～152	◎ 全景（北から）	
◎ 包含層出土土器	157～161	◎ SD03出土勾玉	10

C D 収録図版目次

田村遺跡 遺構・遺物

Page 1	I - 1 区全景（南から）	SB009 (SP250) 土層断面（東から）
	I - 2 区全景（北から）	Page 5 II - 2 区包含層須恵器出土状況（西から）
	II - 1 区全景（南から）	SB003 (SP138) 12
Page 2	II - 1 区全景（北から）	包含層(1)外面 32
	II - 1 区東壁土層断面（西から）	包含層(1)内面 32
	II - 2 区全景（南から）	包含層(1) 32
Page 3	III - 1 区全景（南から）	包含層(2) 33
	III - 2 区全景（北から）	Page 7 包含層(3)凹面 37
	SP106完掘（西から）	SK303 40
Page 4	SP137土層断面（西から）	SB001・003, SP115・226
	SB002 (SP133) 土層断面（北から）	1・2・4・8・10・11・22・29

川島本町遺跡 遺構

Page 1	I 区全景 1（南から）	SD205～207全景（南西から）
	I 区全景 2（南から）	Page 7 SD208・209全景（南西から）
	I 区全景 3（北から）	SD208・209土層断面（東から）
Page 2	SE101周辺（北から）	SD209土層断面（東から）
	II 区下層造構面全景（北から）	Page 8 SD110土層断面（南から）
	II 区上層造構面全景（北から）	SK101土層断面（東から）
Page 3	SP109全景（西から）	SK103遺物出土状況（南から）
	SP117全景（西から）	Page 9 SK103土層断面（南から）
	SP117土層断面（西から）	SX201全景（北から）
Page 4	SE101全景（西から）	SX201土層断面（北から）
	SE101土層断面（東から）	Page 10 SX202土層断面（北から）
	SD102遺物出土状況（北から）	SX202土層断面（南から）
Page 5	SD102土層断面（南から）	SX202サヌカイト破片・剥片類出土
	SD107・108・110全景（北東から）	状況（南から）
	SD107土層断面（西から）	Page 11 SX203全景（北から）
Page 6	SD108土層断面（南から）	SX203遺物出土状況（東から）
	SD109土層断面（西から）	II 区包含層出土縄文土器群1（北から）

Page12	II区包含層出土縄文土器群2（西から） II区西壁側溝縄文土器出土状況（東から） II区東壁北半部土層断面（南西から）	II区下層確認トレーンチ西壁土層断面 (南東から) II区西壁中央部（SD208・209周辺）土層 断面（南東から）
Page13	II区東壁中央部（SD209周辺）土層断面 (西から)	

川島本町遺跡 遺物

Page 1	SK101 4 SK103 6 SE101(1) 9	包含層(2) 153~156 包含層(3) 157~161 包含層(4) 162~167
Page 2	SE101(2) 10 SD102(1) 12 SD102(2) 28	包含層(5) 168~170 包含層(6) 172~173 包含層(7) 175~179
Page 3	SD102(3) 37 SD205 51 SD208上面 60	包含層(8) 192~196 Page11 SD101・203・207~209・211表面 40・52・54・61~63
Page 4	SD208側面 60 SD208底部外面 60	SD101・203・207~209・211裏面 40・52・54・61~63
Page 5	SD110 79 SD212 84 SX203 146	SX202(1)表面 94~113 Page12 SX202(1)裏面 94~113 SX202(2)表面 114~118 SX202(2)裏面 114~118
Page 6	包含層(1) 189 包含層(2) 191 SD102(1) 26・27・29 SD102(2) 31~35	Page13 SX203(3)表面 119~128 SX203(3)裏面 119~128 SX202(4)表面 129~139 SX202(4)裏面 129~139
Page 7	SD209 56~59 SD110凹面 66・67・80~83 SP204・SD110・201・204・206・207 SX202 1・45~48・68・85・90~92	Page14 SX202(5) 145 SX202(6) 145 Page15 包含層表面 197~203 包含層裏面 197~203
Page 8	包含層(1) 148~152	

川島本町南遺跡 遺構・遺物

Page 1	全景（北から） SP31土層断面（南から） SP39土層断面（東から）	Page 3 SD03勾玉出土状況（東から） SD04土層断面（東から） SD03表面 10
Page 2	SD03・04全景（西から） SD06・07全景（南から） SD03土層断面（東から）	Page 4 SD03表面 10 SD03裏面 10 SD03裏面 10

県道高松善通寺線道路改修事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

田村遺跡 II



第1図 田村遺跡位置図

2007. 1

香川県教育委員会

第Ⅰ章 調査の経緯と経過

県道高松善通寺線は高松市と善通寺市を結ぶ幹線道路であるが、近年の交通量の増加に伴い丸亀市内での混雑が多発してきた。こうした状況の緩和策として香川県土木部道路建設課（以下、道路建設課と略称）は、丸亀市田村町より中府町に至る県道高松善通寺線の拡幅工事を計画した。

平成10年度に香川県教育委員会（以下、県教委と略称）は、工事予定箇所が周知の埋蔵文化財包蔵地である田村廃寺（白鳳時代～平安時代）に隣接することから当該地に埋蔵文化財が所在する可能性が高いものと判断し、道路建設課と協議を重ね、地下構造に影響を与える範囲については発掘調査を実施することで合意に達した。現地での発掘調査は平成10年度に県教委が1次調査を、平成11年度に（財）香川県埋蔵文化財調査センターが2次調査を実施し、平成17年度の今回の発掘調査は3次調査になる。1・2次調査では、この遺跡が田村廃寺と密接に係わる、古墳時代末～平安時代（7～12世紀）頃の集落跡である事が明らかになった。また、注目される遺構としては、平安時代頃の田村廃寺で使われた釣鐘を鋳造したと考えられる梵鐘鋳造遺構を検出した。この資料は全国的にも希少であり、大変重要な調査成果になった。

今回の調査対象地は遺跡の北半部にあたり、県教委による平成14・16年の道路側溝工事に伴う立会調査、平成16年度の試掘調査を経て保護措置の必要な調査範囲が確定した。発掘対象地は790m²を測る。調査地は市街地で西側に県道、東側には複数の店舗が隣接する狭地のため、店舗への進入路の確保、発掘調査の作業ヤードの確保、掘削土の防塵対策、工事工程との調整等の多数の問題があった。これらの中を解決するため、地元地権者及び直接工事を担当する香川県善通寺土木事務所（平成17年度以降、香川県中讃土木事務所に事業を移管）と協議を重ねた。その結果、調査区を小分割し、その中で店舗への進入路と作業ヤードを確保しながら調査を進める方策をとることになった。また、スケジュールの関係で、対象地の主要な区域を香川県埋蔵文化財センターが4月～6月までの3ヶ月間で調査を実施し、南半部の一部を工事着工後に県教委が調査を担当する事になった（4次調査と仮称する）。

香川県埋蔵文化財センターの現地調査（3次調査）は、16年度から設けられた小規模調査班が担当した。小規模調査班とは、土木部道路建設課事業に係わる小規模な発掘調査を担当する調査班であり、17年度の担当は主任文化財専門員西村尋文、文化財専門員古野徳久、調査技術員中里伸明、整理作業員田村加良子が現地調査及び整理作業にあたった。現地調査は平成17年4月1日から6月30日までの3ヶ月間を要した。なお、県教委が担当する4次調査は同年8月中旬に実施した。なお、発掘調査の成果をまとめる整理作業は、香川県埋蔵文化財センターにおいて同年11月より12までの2ヶ月間を要した。

平成17年度の発掘調査及び整理作業は、以下の体制で実施した。

総括 所 長	渡部明夫	調査課 課 長	廣瀬常雄
次長兼総務課長	柳原正人	主任文化財専門員	西村尋文
総務課 副主幹兼係長	松崎日出穂	文化財専門員	古野徳久
主 査	塙崎かおり	参 事	河野浩征
主 査	田中千晶	調査技術員	中里伸明
		整理作業員	田村加良子
(現場作業参加者)	朝田加奈子、磯野良照、井戸 戸 等、香川慶一、佐野信子、新池谷昭雄、 茶本憲一、橋本敏子、松原登代子、矢野貞子		

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

田村遺跡が所在する丸亀平野には現在、中央部に土器川、西部に金倉川および弘田川、東部に大東川が流れている。このうち、土器川と金倉川の間の、北側中央に田村遺跡が位置する。このあたりは土器川と金倉川によって形成された沖積地で、両河川の上流地帯に由来する砂礫あるいは泥によって形成された土地である。この土器川と金倉川は流路が定まらず、たびたび変化していたことが、航空写真や地図上から読み取れる。田村遺跡のすぐ東側にも旧河道の痕跡が認められ、ため池である蓮池はこの旧河道上に位置する。一方、田村遺跡の西側においても先代池から丸亀城西高等学校に向けて、条里型地割が乱れており、旧河道の存在が想定できる。したがって、これら旧河道に挟まれた田村遺跡は、中州状の微高地上に立地することが推定される。このことを裏付けるかのように、田村遺跡近辺では、集落跡が緩やかな「く」の字状を呈して、南北に細長く分布する。これはおそらく蓮池の基であった旧河道によって形成された自然堤防を示しているのであろう。

第2節 歴史的環境

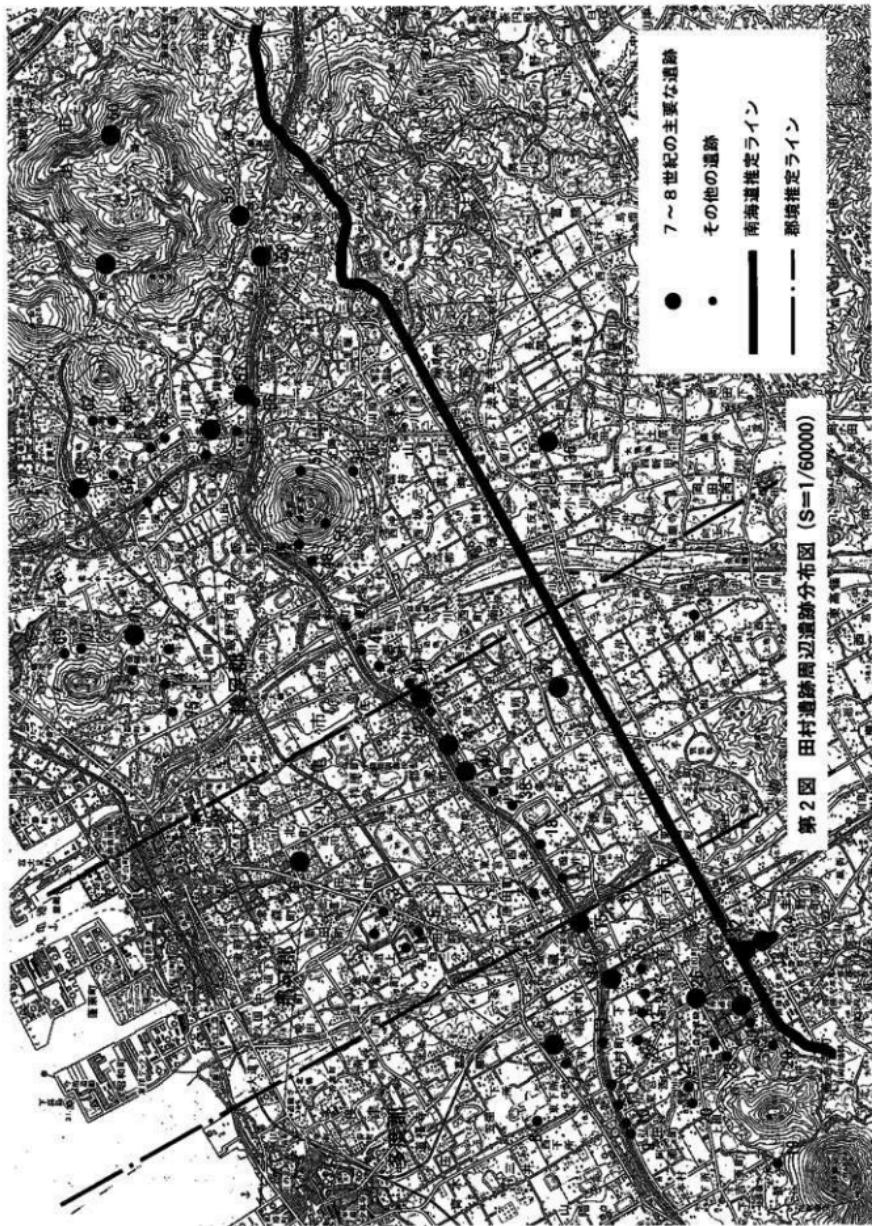
旧石器時代・縄文時代

香川県内で確認できる旧石器時代の遺跡は、主に島嶼部や丘陵地においてであるが、平野部に立地する三条黒島遺跡（39）では翼状剥片石核・翼状剥片などの接合資料が出土し（森下1997a）、郡家田代遺跡（43）では国府型ナイフ形石器、翼状剥片などが100点近く出土しており（佐藤1996）、そのほか2次堆積物中の出土遺物も含めると広範囲に分布している。

縄文時代に入ると中期に至るまでは遺構・遺物とともにほとんど確認されず、状況不明である。この時期の遺跡が県内では海浜部に多く見られることと対応している可能性はある。縄文時代後期に至っても遺構を確認することはほとんどないが、この時期から土器がまとまって出土する遺跡が散見される。特筆すべきは永井遺跡（13）で、後期から晩期前葉に至る多量の土器・石器とともに、自然河川跡からドングリを主体に、トチ・クリ・クルミなど、当時の食糧にあたる植物遺存体が確認された。これらを加工・調理する際に用いる石皿も多数出土している（渡部1990）。このほか、旧練兵場遺跡群中の弘田川西岸遺跡・平池南遺跡（5）などで磨消縄文土器がまとめて出土している。これらが出土するのは、自然河川跡もしくは黄褐色系シルト層からであり、この層は、弥生時代以降の基盤層となっている。

弥生時代

縄文時代後期後半（突堤文期）から弥生時代前期に至るまでは、河川流域で遺跡が確認できることが多い（森下1998）。大東川流域においては、川津下掘遺跡（64）で検出された自然河川跡で井堰が検出されるとともに、弥生時代前期と思われる水田跡が確認された（片桐1996）。このほか、下川津遺跡（68）・川津元結木遺跡（66）・川津川西遺跡（57）などでは、縄文時代晩期もしくは弥生時代前期の土器が出土している。また、金倉川流域においては、平池南遺跡（5）で自然河川跡より縄文時代晩期中葉～後葉の土器とともに、打製石鋸や小型鋤状木製品が出土している（木下1995）。龍川四条遺跡（18）も同様の状況であり、両者の近隣に集落跡の存在が想定される。これらの遺跡は水稻農耕が確認あるいは想定



第2図 田村遺跡周辺遺跡分布図 (S=1/60000)

第1表 田村遺跡周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	田村遺跡・田村廃寺	27	旧練兵場遺跡	53	川津西又遺跡
2	中の池遺跡	28	善通寺障所跡	54	川津一ノ又遺跡
3	平池東遺跡	29	香色山経塚	55	川津東山田遺跡
4	平池西遺跡	30	善通寺西遺跡	56	三ノ池古墳
5	平池南遺跡	31	善通寺境内遺跡	57	川津川西遺跡
6	稻木北遺跡	32	四国学院大学構内遺跡	58	足利池南窯跡
7	永井北遺跡	33	生野本町遺跡	59	前池北窯跡
8	三井遺跡	34	生野南口遺跡	60	城山城跡
9	阿弥陀堂遺跡	35	垂水妙見遺跡	61	峠奥窯跡群
10	高熊遺跡	36	法勅寺跡	62	川津茶臼山古墳
11	乾遺跡	37	宝信寺跡	63	蓮尺茶臼山古墳
12	中村遺跡	38	三条番ノ原遺跡	64	川津下橋遺跡
13	永井遺跡	39	三衆黒島遺跡	65	川津二代取遺跡
14	稻木遺跡	40	郡家原遺跡	66	川津元結木遺跡
15	金蔵寺下所遺跡	41	郡家一里屋遺跡	67	川津中塚遺跡
16	龍川五条遺跡	42	郡家大林上遺跡	68	下川津遺跡
17	五条遺跡	43	郡家田代遺跡	69	青ノ山山頂遺跡
18	龍川四条遺跡	44	川西北・原遺跡	70	青ノ山古墳群
19	大塚池（吉原桜賀塚）古墳	45	川西北・七条Ⅰ遺跡	71	青ノ山1号窯跡
20	甲山北遺跡	46	川西北・七条Ⅱ遺跡	72	吉岡神社古墳
21	甲山城跡	47	川西北・殿治屋遺跡	73	竈塚古墳
22	仲村城跡	48	飯野・東二瓦礫遺跡	74	青ノ山2号窯跡
23	九頭神遺跡群	49	飯野・東分山崎南遺跡	75	青ノ山城跡
24	下吉田八幡古墳	50	飯野山西麓遺跡	76	丸亀城跡
25	石川遺跡	51	坂元神社遺跡		
26	仲村廃寺	52	飯野山山頂遺跡		

されており、水稻農耕を契機とし、それに基づいて立地した集落の出現という見解がなされる。

このような河川流域の集落は、弥生時代前期の中頃以降、環濠集落という形で（視覚的に）拠点的な集落が形成される。金倉川流域では、中の池遺跡（2）において5重の環濠が確認されており、龍川五条遺跡においては、環濠とともに居住域と想定される柱穴群、周溝墓を主体とする墓域が構成される状況が検出された（森下1998）。一方、環濠の出現よりやや遅れて「瀬戸内型窯」が出現する。瀬戸内型窯は県内で自生したものではなく、他地域との交流関係に基づいて出現したものと理解されている（森下・信里・乗松2000）。また、竪穴住居（竪穴建物跡）の確実な事例が確認されるのも前期後半からであり、そのほとんどが「松菊里系住居」と考えられる（中里2004）。石器においても石斧類は遠隔地石材を用いており、広域流通の状況が窺える。さらにその一方で、前期後半～中期前葉の土器の文様パターンは、水系単位で異なることが指摘されており、金倉川・大東川流域では窓において直線文帯最下段に列点文や波状文を施す傾向があるという（森下・信里・乗松2000）。よって、「河川流域あるいは平野を単位とした広域交流が顕在化」したのが、この時期といえよう。

この後、弥生時代中期初頭までには環濠が埋没することを除けば、遺跡の動態に大きな変化はない。しかし、中期中葉にはこれらの拠点的集落は一旦廃絶し、それともに造墓活動も縮小傾向になる。その一方で、倉庫と考えられる掘立柱建物跡が出現し、その後の居住域（信里2003）は竪穴住居と掘立柱建物跡のセット関係に基づいて形成される（森下1999）。この居住域が複数まとまって確認できる遺跡・遺跡群が大規模集落とみなされ、逆に散在的であれば小規模集落ということになり、丸亀平野においては旧練兵場遺跡群（27）が前者にあたり、川津一ノ又遺跡（54）が後者にあたる（信里2002）。

弥生時代中期後半になると、これまでに河川流域を中心に展開されていた集落とは別に、丘陵裾や丘陵斜面に集落が営まれる状況が顕著に確認できる。弘田川西岸に展開する丘陵群においては、

天霧山に立地する矢ノ塚遺跡が代表的であり、周溝をもつ竪穴住居と、梁間一間の掘立柱建物跡で構成される居住域が検出されている（真鍋1987、森下1999）。大東川流域においても、平野部の集落と飯野山に立地する集落で構成される遺跡群が想定されている（信里2003）。

弥生時代後期後半以降、高所地あるいは丘陵上の集落は営まれなくなり、集落群のまとまりとしては、大規模集落である旧練兵場遺跡（27）と、平野部の微高地で各所に立地する集落とで、再び構成されるようなる。この時期に営まれる丸亀平野の代表的な遺跡として、下川津遺跡（68）があげられ、この集落で鉄器生産がなされていたことが推定され、周辺の遺跡群内で流通していた状況が想定された（信里2004）。また、旧練兵場遺跡（27）では鍛冶遺構とともに鉄器6点が出土した（森下2003）。いまだ事例は少ないが、この時期には鉄素材の確保が比較的安定したものと考えられる。集落立地の動向からみれば、この状況は古墳時代前期初頭ころまでは変わらないと思われる。ただ、この期間中、旧練兵場遺跡群においては、掘立柱建物跡が居住域内に見られなくなり、終末期には竪穴住居が小形均質化して、棟筋をそろえて配置されるなど、集落内の構成に何らかの統制が加わることが指摘されている（森下2001）。また、終末期には方形住居が大半を占め、古墳時代前期初頭には方形住居にはば統一される。ただし、終末期においては、丸亀平野西部域では小形もしくは中形の住居が主体をなすのに対し、大東川流域を中心とした東部地域では中形を主体としつつ、大形住居も検出されている点で、小地域色が見出される（藏本1999）。

古墳時代

古墳時代前期の集落の動向は不明である。これまで大規模集落として継続的に営まれてきた旧練兵場遺跡群において、少なくとも、これまで調査がなされた箇所での営みが解消され、他の弥生時代の集落も規模の縮小あるいは解消の傾向を示していることから、集落群の立地あるいは集落内の構成などが再編されたことを推定するのみであり、この時期の様相はきわめて不鮮明である。

古墳時代中期の状況も同様であるが、近年、旧練兵場遺跡（27）において中期の竪穴住居が検出された。この時期の竪穴住居は、竈が造り付けられているものと、そうでないものが混在しており、造り付け竈の出現過程を検証するうえで貴重な資料である。また、後期に入るとその資料数は充実する。これらの住居内の床面上あるいは埋土中からは、白玉を主体とする滑石製品が多数出土しており（片桐・信里・細川・中島2005）、集落機能時（あるいは廃絶時）の活動の一端をうかがい知ることができる。旧練兵場遺跡は、弥生時代のみならず、古墳時代の集落としても重要な遺跡である。

このほか、古墳時代後期（6世紀～7世紀前葉）の集落には、丸亀平野西部では四国学院大学構内遺跡（32）・仲村廃寺（26）・稻木遺跡（14）などがあり、平野東部では下川津遺跡（68）およびその周辺の遺跡群があげられる。これらの集落は造り付け竈を有する竪穴住居と掘立柱建物跡とで基本的に構成されている。断片的な検出事例も多いが、資料数は確実に蓄積されており、後期の集落の動向および内部構成などを一度整理すべき状況に至っているものと考える。

古代初頭

7世紀代は居住形態が竪穴住居から掘立柱建物跡へと移行する過渡期である。丸亀平野の多くの遺跡では、竪穴住居が確認されるのは7世紀前葉までであるが、四国学院大学構内遺跡（32）や下川津遺跡（68）などでは、7世紀中葉の竪穴住居がまとまって検出されている。おそらくこの時期を境にして以後、掘立柱建物跡を主体とする居住域が形成されると考えられるが、川津一ノ又遺跡（51）や川津川西遺跡（57）では、少数ながらも7世紀後葉～8世紀前葉の竪穴住居が検出されて

おり、豈穴住居から掘立柱建物跡への居住形態の推移は、一律的なものではなく、集落間もしくは集落内部で異なるようである。このうち、下川津遺跡（68）では7世紀代中葉以降、区画施設を伴った大型建物跡群が構成されるようになる。その整地作業にあたっては耳環・管玉・勾玉などを投棄しており、地鎮の可能性が指摘されている。また、遺跡内で鉄器・土師器の生産が行われているとともに、周辺では須恵器生産も継続的に行われていることなどから、多面的な経営活動を行う集団（周辺の遺跡群も含む）と、その首長層の存在が想定された（佐藤2000）。

一方、7世紀後葉～末葉には、四天王信仰や金光明經などにもとづく護国仏教の流布を国家側が意図して、各地方で仏教寺院が展開する（菱田2005）。この時期の寺院の創建主体者は、下川津遺跡で想定されたような首長層や、郡司に任命されるような氏族であり、丸亀平野での具体例としては、伝導寺（仲村廃寺）（26）・善通寺（30）が佐伯氏の氏寺であることがあげられる。この時期に創建される地方寺院の多くは法隆寺式伽藍配置と法起寺式伽藍配置であり、前者は山田寺式軒丸瓦、後者は川原寺式軒丸瓦の系統の瓦類が伴う。丸亀平野においても、郡内に1～2寺院存在し、川原寺式系統の軒丸瓦が広く分布している。今回の調査地のすぐ南に位置する田村廃寺（1）も、この時期に創建されたものであり、創建時の瓦として川原寺式系統の軒丸瓦が出土している（東2002）。したがって、伽藍配置としては法起寺式伽藍配置が第一候補として挙げられるが、その是非を検証する材料は今のところ皆無である。

また、古代寺院の寺域のほとんどは、条里型地割の一町（約109m）を単位とするが、条里型地割施行以前に建立された寺院は、それに一致しない（上田1987）。この状況は丸亀平野の古代寺院についてもあてはまり、佐伯氏の氏寺とされる伝導寺（仲村廃寺）（26）では、ほぼ正方位の土壇が瓦の堆積を伴って検出されている。その後、この寺院は奈良時代に消失し、あらためて南西500mの地に移転されたのが善通寺である。この善通寺の寺域は条里型地割に規制を受けて建立されている（菅川1989）。今回の調査地の南に隣接する田村廃寺（1）においても、当地に現存する地割が正方位をなしており、発掘調査においても正方位に近い方向で区画溝や掘立柱建物跡が検出されていることから（東2002・北山2004）、田村廃寺の創建が条里型地割施行以前であったという想定がなされる。

丸亀平野において、土地区画の整備である条里型地割の施行が開始されるのは、7世紀末葉～8世紀初頭の時期である（森下1997b）。この地割は、讃岐国においては南海道を基準に設置されていることが明らかにされており（金田1996）、推定される郡界線も南海道を基準にして直交方向に設置された状況がうかがえる。近年では、川原遺跡（高松市）および四国学院大学構内遺跡（32）において、南海道の側溝かと考えられる溝跡が検出された（藤好2003・海邊2003）。

この南海道を基準とした土地区画は、国家側からしてみれば、班田収授法に象徴される各種税徵収の前提としての土地管理政策、という一面を有している。実際、少なくとも8世紀後半以降は、条里プラン（金田1995）にもとづいて土地管理がなされている状況が明らかにされている（金田1999）。その一方で、条里型地割の施行は耕作地のみならず、宅地の再編成をも促していることが確認されており（大久保1990・森下1997b）、集落の動向を理解するうえでも重要な意味を有している。船木北遺跡（6）では、条里型地割に規制され、かつ、計画的に配置された大型建物跡群が検出された。この建物跡群は、それまで宅地としては利用されていなかった箇所に、条里型地割の施行直後に形成されており、この時期の宅地再編成の一端を示唆しているといえよう。

田村遺跡の今回の調査地においても、条里型地割施行前後の集落が検出された。したがって本報告では、条里型地割を考慮しながら、隣接する田村廃寺との対比の中で今回の調査地を評価している。

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 概要

道路拡幅工事であるため、調査地は南北に細長い。よって、調査地を北から順にⅠ区からⅢ区に区分して調査を進めた。また、調査地はいくつかの店舗に隣接しており、営業上の障害とならないよう配慮する必要があった。人力掘削時の排土は各調査区内で仮置きする必要があり、このため、各調査区はさらに南北に分けて調査した。それぞれの細区分はⅠ-1区・Ⅰ-2区というように、北から順に番号を付与している。また、本報告では、香川県教育委員会が調査した箇所（4次調査区域）についても掲載している。これらを、Ⅲ-3区・Ⅲ-4区として本報告では取り扱っている。

Ⅰ区の南部半部からⅡ区の北半部に集中して、7世紀前葉～8世紀前葉の掘立柱建物跡群を検出した（第3図・第7図参照）。今回の調査地のすぐ南には田村廃寺が位置しており、既往の調査では、鶴尾を含めた多量な瓦類・梵鐘鋳造遺構など、寺院の存在を示す遺構・遺物が多々確認されている。しかし、今回の調査でそのような遺構・遺物が確認できたのは、包含層中に含まれていた瓦片1点のみである。田村廃寺に隣接する以上、田村廃寺との関わりを完全に否定するものではないが、これまで確認してきた田村廃寺の関連遺構とは、その内容から見て区別されるべきである。

第2節 基本層序

調査地の旧状は複数の店舗が建ち並んでいた市街地であり、今回の調査においても店舗に伴うコンクリート基礎を含む造成土が確認されている。これらの造成土はおおむね60～80cmの厚さで、調査地全体に及んでいる。ただし、コンクリート基礎は地表下1m以下に位置しており、この部分については既に遺構は失われていた。

造成土の直下には耕作土層が堆積しており、残りのよい部分で40cm程の厚さがあった。この土層中からは近世の遺物が出土している。Ⅲ区で検出された土坑・溝跡（SK301・302、SD301）の埋土は、この耕作土層と基本的には同じものである。

耕作土層の直下では、淡灰色を呈する砂質シルト層が10～20cmの厚さで堆積しており、基盤層はその直下で確認された。遺構が検出されたのは基盤層上面である。また、Ⅱ区では、遺構に切られた状態で、旧河道を検出した。遺物は出土しておらず、形成された時期は不明である。

第3節 検出遺構・出土遺物

掘立柱建物跡・槽列跡

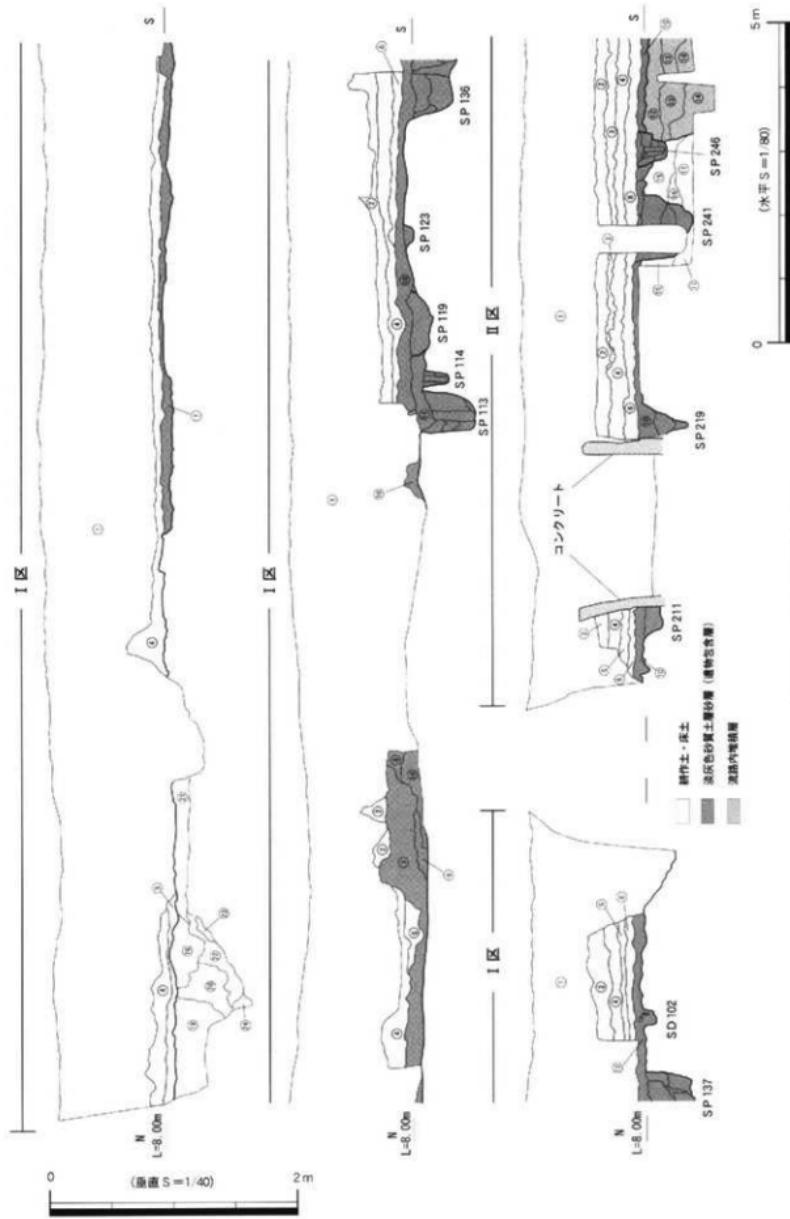
SB001・002、SA001（第7・8図）

SB001・SB002はほぼ重複しており、柱穴の切り合いから判断してSB002→SB001の順に建築されたものである。また、SA001はSB002に切られている。したがってこれらの先後関係は、SA001→SB002→SB001となり、主軸方位を少しずつ西にずらしている状況がうかがえる。

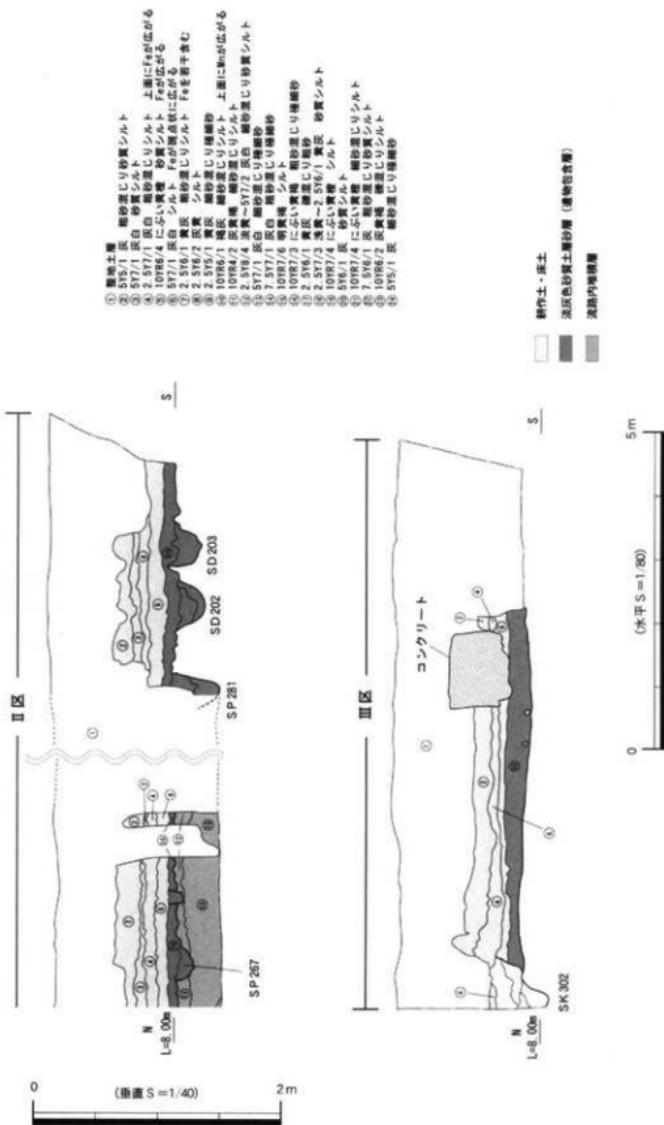
SB001は東西2間（3.65m）、南北2間以上（4.0m以上）で、主軸方位N-22.5°Wの南北棟である。SB002は東西2間（3.0m）、南北2間以上（4.05m以上）で、主軸方位N-19.5°Wの南北棟である。両者を南北棟としたのは、東西棟に復原すると梁間の中間柱に根石が敷かれていることになり（S

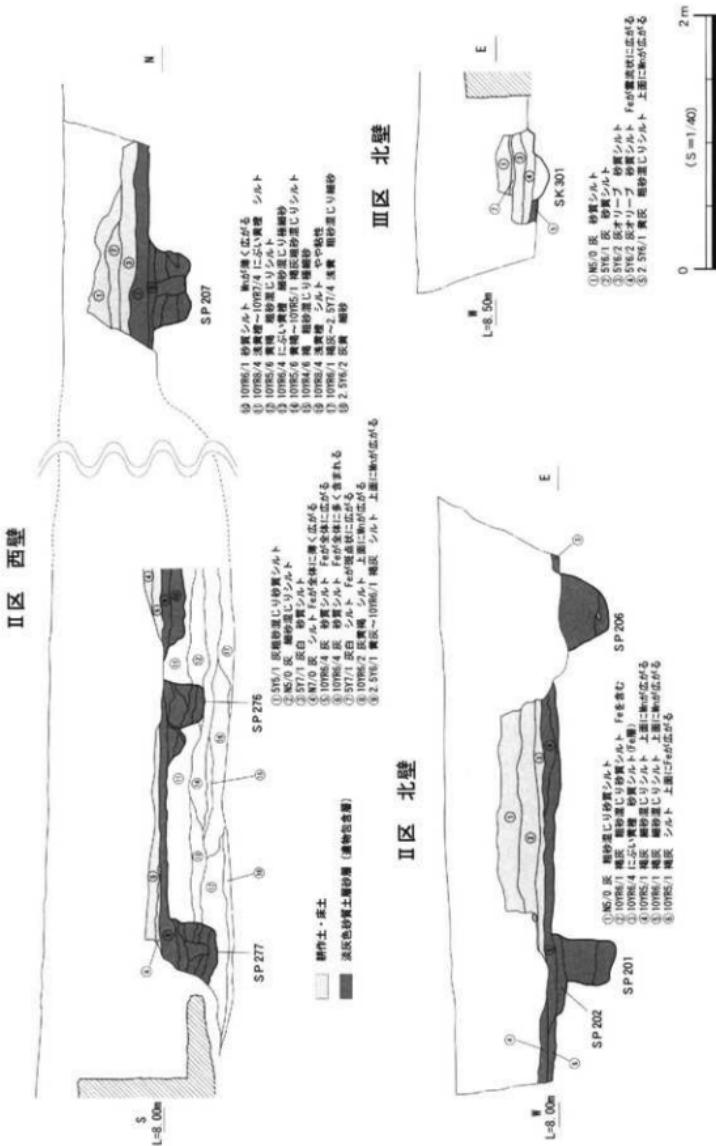


第4図 東壁土層断面図①

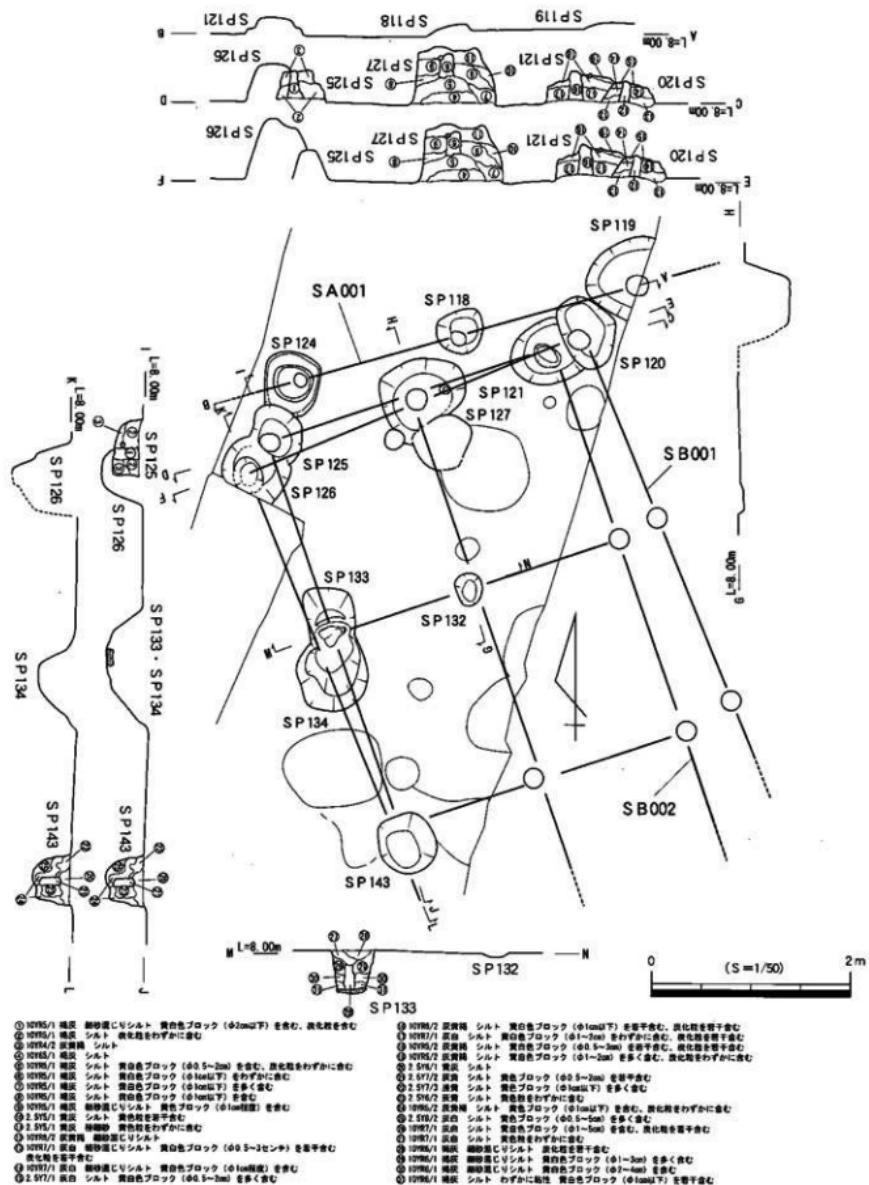


第5図 東壁土層断面図②

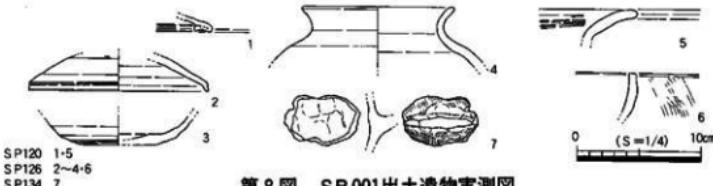




第6図 各調査区 西壁・北壁土層断面図



第7図 SB001・002, SA001平面図・断面図



第8図 SB001出土遺物実測図

P133)、やや不自然であると判断したためである。ただし、梁間2間で復原しているが、梁間3間であることを否定するものではない。

SA001は他に組み合う柱穴がなく、かつ、他の柱穴に比べて浅いものばかりで構成されているため、柵列跡と判断した。主軸方位は N-74.5° E (N-15.5° W)。

出土遺物は、SB001より7点（第8図-1～7）を図示した。SB002、SA001からは図示できる遺物は出土していない。1・2は須恵器杯蓋で、1は口縁部を折り返してかえりを成形している。3は須恵器杯身で、底部外面は未調整。4は須恵器壺。5は土師器壺で、外面には煤が付着していた。6は土師器鉢、7は土師器壺把手部である。

上記出土遺物のうち、1は7世紀後葉、2は7世紀末葉～8世紀初頭において、主に消費されたものである（信里2002参照）。他の遺物も、1・2から導き出される消費年代との対応に矛盾しない。したがって、なお検討の余地は残るであろうが、SB001は、8世紀初頭までに機能・廃絶した建物跡であると判断する。SB001に先行するSB002・SA001は、SB001の主軸方位とのズレはほとんどないことから、SB001の年代を大きく遡るものではないと判断する。

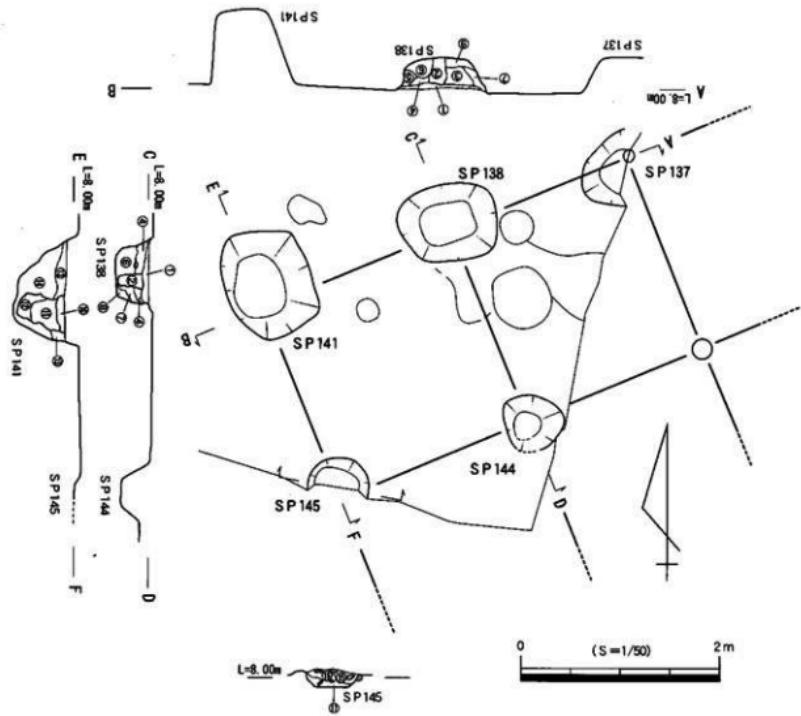
SB003（第9図）

今回検出された掘立柱建物跡の中では、最も柱配置の整った建物跡である。建物跡の規模は、南北1間以上（2.05m以上）、東西2間以上（3.9m以上）で、主軸方位 N-67.5° E (=N-22.5° W) の東西棟である。

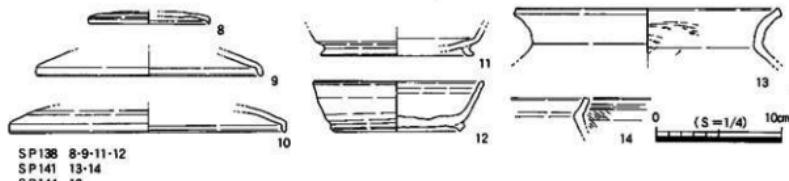
SP141は他の柱穴に比べてやや平面規模が大きく、かつ、深く掘り込まれているため隅柱であると判断した。したがって、これ以上西側へ伸びないものと考える。

出土遺物は7点図示した（第9図-8～14）。SP138・SP141からの出土遺物が主で、特にSP138からは比較的良好な遺物が出土している。8は短頸壺などの口径の小さい器種に伴う蓋かと思われる。今回の調査で出土した須恵器は、焼成がやや不良の軟質で、淡灰色を呈するものが杯類を中心多く認められるのに対して、8は焼成良好・堅緻で青灰色を呈している。また、外面は高温のため自然釉が消失した「肌荒れ」となっている。9・10は須恵器杯蓋、11・12は須恵器杯身である。12は今回調査の遺構に伴う遺物としては残存率の最も高い資料である。13は土師器壺、14は小形壺の口縁部片である。

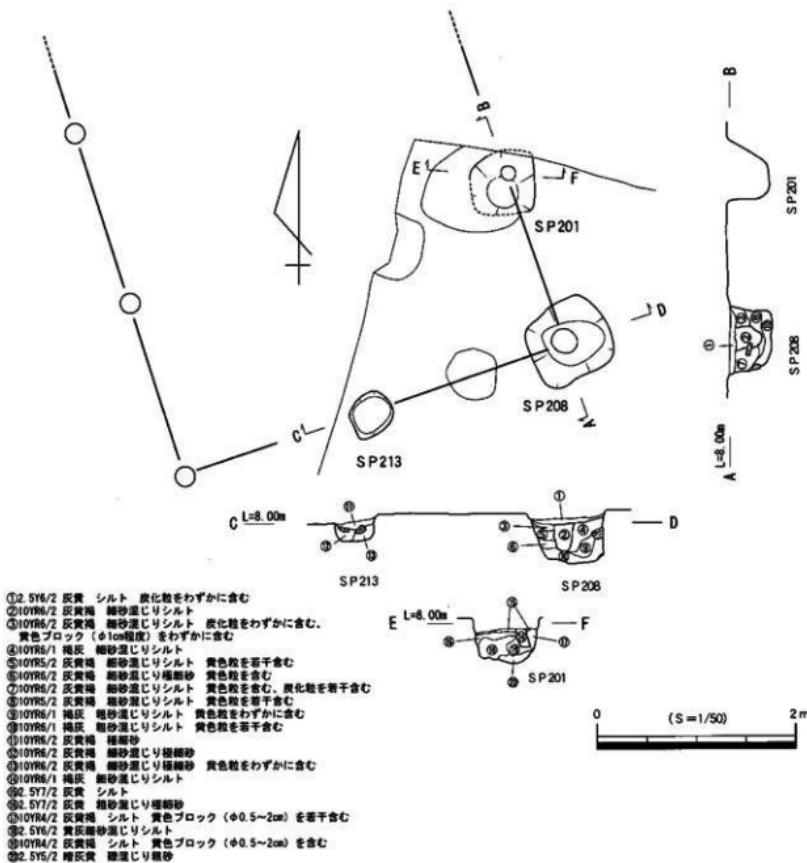
上記出土遺物のうち、9・10が7世紀末葉～8世紀初頭、11が7世紀後葉～8世紀初頭、12は7世紀末葉～8世紀前葉において、主に消費された遺物である（佐藤1993・信里2002参照）。したがって、SB003は7世紀末葉～8世紀初頭を中心に機能し、8世紀前葉には廃絶したものと判断する。また、SB003はSB001・002と重複しており、同時併存はありえない。直接の切り合い関係はないが、遺物組成の比較からは、SB003はSB001・002より後出すものと考えられる。ただし、SB002とS



- ⑩Y98/1 梅皮 シルト 黄白色ブロック（Φ0.5~2cm）を含む、炭化粒をわずかに含む
2. 25. S1/S1 梅皮
⑪Y98/1 梅皮 シルト 黄色粒をわずかに含む
⑫Y98/1 梅皮 シルト 黄白色ブロック（Φ1cm以下）を含む
⑬Y98/1 梅皮 黄皮 黄色粒を含む
⑭Y98/1 梅皮 黄皮シルト 黄白色ブロック（Φ1cm以下）を含む、炭化粒を含む
⑮Y98/1 梅皮 シルト 黄白色ブロック（Φ0.5~2cm）を含む、炭化粒をわずかに含む
⑯Y98/1 梅皮 シルト 黄色粒を含む
⑰Y98/1 梅皮 シルト 黄色粒を含む
⑱Y98/1 梅皮 シルト 黄白色粒を含む、炭化粒をわずかに含む
⑲Y98/1 梅皮 シルト 黄白色粒を含む
⑳Y98/1 梅皮 シルト 黄白色粒を含む
㉑Y98/1 梅皮 シルト 黄白色粒を含む
㉒Y98/1 梅皮 黄皮 黄色粒を含む
㉓Y98/1 梅皮 黄皮 黄褐色にシリコント 上面に黒いが広がる
㉔Y98/1 梅皮 黄皮 黄褐色にシリコント
㉕Y98/1 梅皮 黄皮 黄褐色にシリコント



第9図 SB003平面図・断面図及び出土遺物実測図



第10図 SB 004平面図・断面図

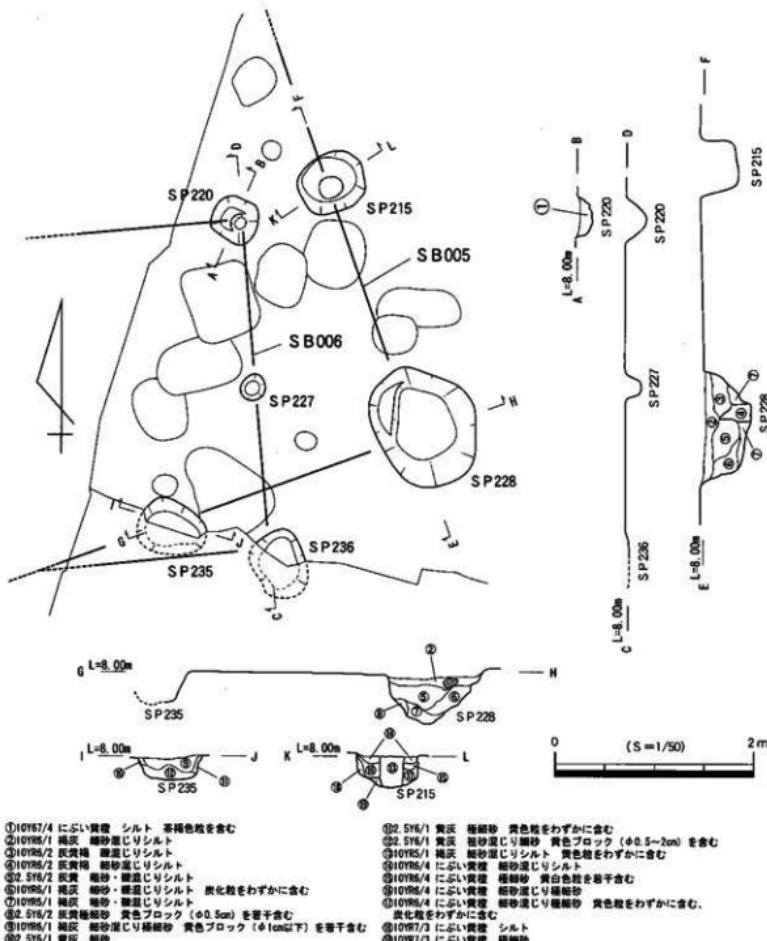
B 003は主軸方位が極めて近似しており、連続的に営まれたものと考えられる。

SB004（第10図）

柱穴 3基のみからの復原であり、隣接地の調査がなされれば修正を要する可能性は高い。ただ、SP 208を隅柱とした場合、SP 201が桁行の側柱となり、SP 213が梁間の中間柱とすれば大きな違和感はなく、かつ、主軸方位も他の掘立柱建物跡と近いことから復原するに至った。

SB004は東西1間以上（2.1m以上）、南北1間以上（1.8m以上）の規模で、主軸方位 N-18° W の南北棟である。

図示できる遺物は出土しなかった。したがって、建物跡の年代を推定する直接の根拠はないが、S



第11図 SB005・006平面図・断面図

B001～SB002の存続時期と大きく異なる状況を想定し難いため、7世紀末葉～8世紀前葉の時間幅の中で、機能および廃絶したものと仮定しておく。

SB005 (第11図)

柱穴3基からの復原であり、隣接地の調査がなされれば修正を要する可能性は高い。今回検出された他の事例に比べて、柱間が長い点でも違和感が残る。ただ、柱穴の規模からみてSP228は隅柱

である可能性が高く、その場合、SP215・235が側柱として成り立つことから、復原するに至った。建物跡の規模は、東西1間以上(2.65m以上)、南北1間以上(2.6m以上)で、主軸方位はN-20°Wである。

図示できる出土遺物はないが、SB004同様の理由から、7世紀末葉～8世紀前葉の時間幅の中で、機能および廃絶したものと仮定しておく。

SB006 (第11図)

柱穴3基からの復原であり、隣接地の調査がなされれば修正を要する可能性は高い。特に、建物跡の主軸方位と各柱穴平面形の主軸方位が不ぞろいである点で問題が残る。

建物跡規模は南北2間(3.25m)、東西1間以上で、主軸方位はN-85°E(=N-5°W)の東西棟としたが、南北棟である可能性を否定するものではない。

図示できる出土遺物はなく、およそ7世紀代であろうという予測は立つものの、厳密な時期比定は困難である。

SB007 (第12図)

柱穴3基のみからの復原であり、隣接地の調査がなされれば修正を要する可能性は高い。特に、梁間の中間柱がない点で、今回の検出例では異質である。また、隅柱であるSP266の平面形から導き出される主軸は正方位に近く、建物跡の主軸と異なる点で問題点を含んでいる。

建物規模は、南北1間(3.4m)、東西1間以上(1.9m以上)で、主軸方位N-17°Wの東西棟である。

出土遺物は3点を図示した。15は須恵器杯蓋で、天井部と口縁部の境にまで回転ヘラケズリが及んでいる。16は須恵器杯身であり、焼成は不良で軟質である。17は土師器で器種不明。下川津遺跡SH43・44に類例がある(藤好・西村1990)。

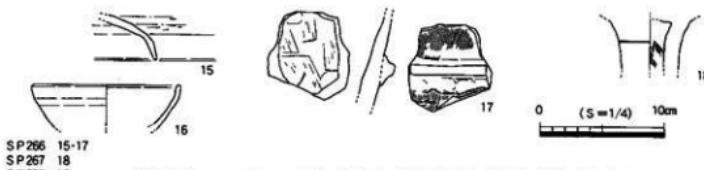
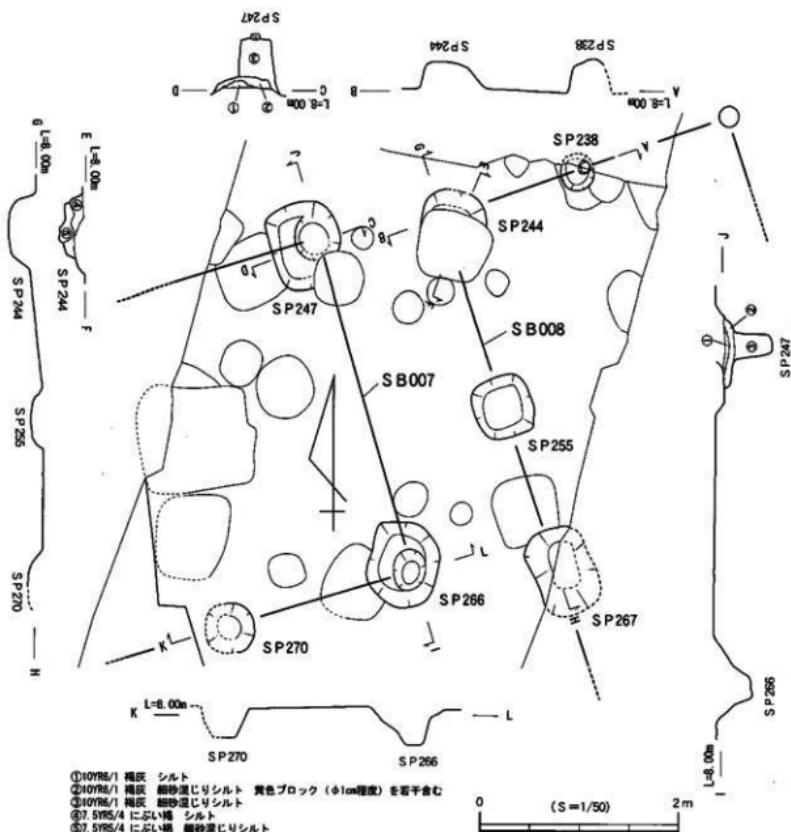
上記出土遺物のうち、15は6世紀末葉前後に主に消費された遺物である。同じ柱穴から出土した17も、下川津遺跡では類似資料が堅穴住居跡より出土していることから、15と組成上の矛盾はない。ただし、これらを出土した柱穴SP266は、同じく6世紀末葉前後の遺物を出土しているSP265を切り込んでいることから、本来はSP265の出土遺物が混入している可能性も多い。一方、SP270より出土した16は、やや問題は残るもの、その器形自体は7世紀中葉～後葉に類例が求められる(信里2002、渡部・森・古野1997参照)。したがって、SP266より導き出される年代と、SP270より導き出される年代にはやや開きがある。よって、厳密に時期比定する条件が整っていないが、7世紀代の時間幅の中でとらえておくことには問題はないであろう。

SB008 (第12図)

発掘調査時から、掘立柱建物跡に復原しうる予測がなされた建物跡であり、SP244-SP255-SP267の柱筋には大きな変更を要しないと考えられる。一方、SP244-SP238の柱筋に関しては、その可能性は高いと考えているものの、隣接地の調査がなされれば再検討される余地も十分残る。また、現時点においても、SP244からさらに北に伸び、柵列跡に復原できる余地がある。

建物規模は東西1間以上(1.5m以上)、南北2間以上(3.5m以上)で、主軸方位N-19°Wの南北棟である。南北棟であると判断したのは、SP238が他の柱穴よりやや小振りで、梁間の中間柱である可能性を考慮したとの、SP244-SP255-SP267がそれぞれ規模に大差なく、桁行の側柱であることに大きな問題点はない判断したためである。

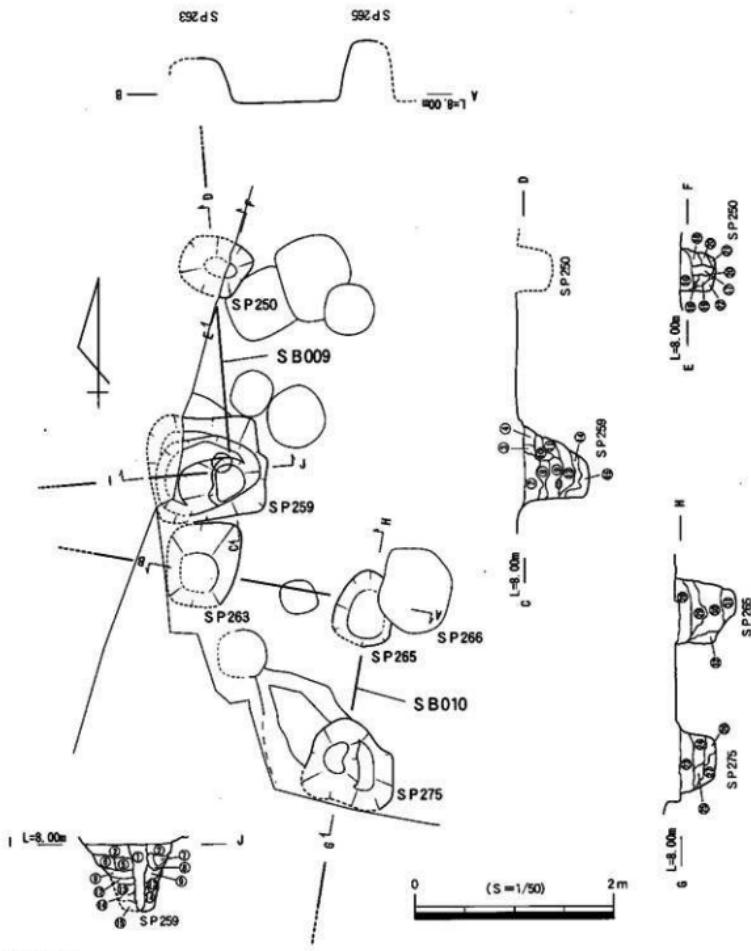
出土遺物は、SP267より出土した1点を図示した。18は須恵器高杯の脚部である。残存状況から



第12図 SB 007・008平面図・断面図及び出土遺物実測図

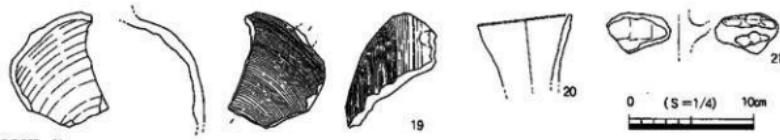
みて、透かしは施されていない可能性が高い。また、現存部の中位に極細の沈線が施されているが、文様として意図的に施されたものではない。

上記出土遺物から、年代を厳密に推定するのは問題が残る。ここでは、SB001・002と主軸方位をほぼ同じくすることから、7世紀末葉～8世紀前葉の期間中に機能・廃絶したものと仮定しておく。



- | | |
|--|--|
| ① 10YRS/1 桐灰 シルト | ⑪ 10YRS/1 桐灰 細砂混じり砂質シルト 黄白色ブロック (<1cm以下) を若干含む |
| ② 10YRS/1 桐灰 シルト | ⑫ 10YRS/1 桐灰 砂質シルト 黄白色ブロック (<0.5~2cm) を多く含む |
| ③ 2. SY6/1 黄灰 シルト | ⑬ 10YRS/1 桐灰 細砂混じり白色ブロック (<1cm以下) をわずかに含む |
| ④ ③よりやや明るい | ⑭ 2. SY6/1 黄灰 細砂混じり白色ブロック (<1cm以下) をわずかに含む |
| ⑤ 2. SY6/1 黄灰 シルト | ⑮ 2. SY6/1 黄灰 細砂混じり白色ブロック (<1cm以下) を若干含む |
| ⑥ 2. SY7/1 白灰 シルト | ⑯ 2. SY6/1 黄灰 細砂混じり白色シルト 黄色ブロック (<1cm以下) を若干含む |
| ⑦ 2. SY7/1 白灰+10YRS/1 桐灰 シルト | ⑰ 2. SY6/1 黄灰 細砂混じり砂質シルト 黄色ブロック (<1cm以下) を若干含む |
| ⑧ 10YRS/1 桐灰 シルト 黄色ブロック (0.5~1cm) を若干含む | ⑱ 2. SY6/1 黄灰 細砂混じり砂質シルト 黄色ブロック (<1cm以下) を若干含む |
| ⑨ 10YRS/1 桐灰 シルト 黄色ブロック (0.5~1cm) を若干含む | ⑲ 2. SY6/1 黄灰 細砂混じり砂質シルト 黄色ブロック (<1cm以下) を若干含む |
| ⑩ 10YRS/1 桐灰 シルト 黄色シルトが若干混じる | ⑳ 2. SY6/1 黄灰 細砂混じり砂質シルト 黄色ブロック (<1cm以下) を若干含む |
| ⑪ 10YRS/1 桐灰 シルト 黄色ブロック (0.5~1cm) を若干含む | ㉑ 2. SY6/1 黄灰 細砂混じり砂質シルト 黄色ブロック (<1cm以下) を若干含む |
| ⑫ 10YRS/1 桐灰 シルト 黄色シルト 黄色ブロック (0.5~1.5cm) を若干含む | ㉒ 2. SY6/1 黄灰 細砂混じり砂質シルト 黄色ブロック (<1cm以下) を若干含む |
| ⑬ 2. SY5/1 黄灰 シルト 黄色ブロック (0.5~1cm) を含む | ㉓ 2. SY6/1 黄灰 細砂混じり砂質シルト 黄色ブロック (<1cm以下) を若干含む |
| ⑭ 2. SY5/1 黄灰 シルト 黄色シルト 黄色ブロック (0.5~1cm) を含む | ㉔ 2. SY6/1 黄灰 細砂混じり砂質シルト 黄色ブロック (<1cm以下) を若干含む |
| ⑮ 10YRS/1 桐灰 シルト | ㉕ 10YRS/1 桐灰 細砂混じり砂質シルト 黄色ブロック (<1cm以下) を若干含む |
| ⑯ 10YRS/1 桐灰 シルト | ㉖ 10YRS/1 桐灰 細砂混じり砂質シルト 黄色ブロック (<1cm以下) を若干含む |
| ⑰ 2. SY5/1 黄灰 シルト | ㉗ 2. SY6/1 黄灰 細砂混じり砂質シルト 黄色ブロック (<1cm以下) を若干含む |
| ㉑ 2. SY6/1 黄灰 桐灰混じり砂質シルト 黄色ブロック (<0.5~4cm) を若干含む | ㉘ 2. SY6/1 黄灰 細砂混じり砂質シルト 黄色ブロック (<1cm以下) を若干含む |

第13図 SB 009・010平面図・断面図



第14図 SB010出土遺物実測図

SB009 (第13図)

柱穴2基のみで復原された建物跡であり、隣接地の調査がなされれば修正を要する可能性が高い。ただ、SP259は規模が大きく、隅柱である可能性が高い。また、主軸方位についても、SP259の平面形から導き出される方位と大差はないものと考えられる。

建物規模は東西1間以上、南北1間以上(2.0m以上)で、主軸方位はN-5°Wである。

図示できる出土遺物はなく、およそ7世紀代であろうという予測は立つものの、厳密な時期比定は困難である。

SB010 (第13・14図)

柱穴3基のみで復原された建物跡であり、隣接地の調査がなされれば修正を要する可能性が高い。ただ、それぞれの柱穴の平面形から導き出される主軸方位は、復原された建物跡の主軸方位と概ね一致しており、大きな問題点を含まない。また、後述するように、SP265とSP275より出土した遺物も、組成上の問題はなく、少なくともSP265-SP275の柱筋に関しては、蓋然性が高いと考えられる。

建物規模は、東西1間以上(1.75m以上)、南北1間以上(1.6m以上)で、主軸方位はN-10°Eである。隅柱にあたるSP265は、他の柱穴より掘削深度が深い。

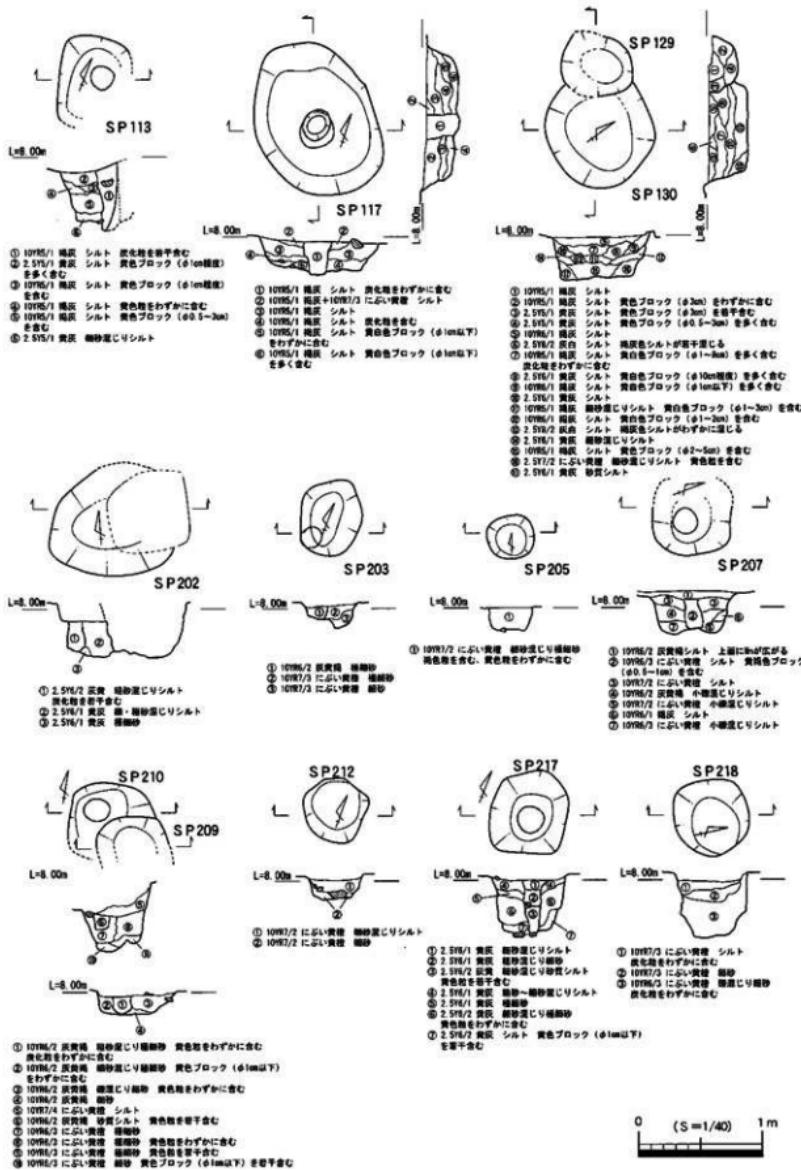
出土遺物は、SP265より1点(第14図-21)、SP275より2点(第14図-19・20)図示した。19は須恵器提瓶の体部で、把手部がわずかに残存する。把手部は角状に退化している可能性が高い。20は平瓶の口縁部である。やや砂粒を多く含むものの、胎土・焼成とともに19とよく似ている。21は土器師壺の把手部である。

上記の出土遺物のうち、SP275より出土した19は6世紀末葉～7世紀前葉を中心に消費された遺物であり、20は厳密な時期比定は難しいが、7世紀代を中心で消費されている。SP265より出土した21も、厳密な時期比定は困難だが、SP275出土遺物より導き出される年代との矛盾はない。また、SP265はSP266に切られているが、そのSP266からは6世紀末葉～7世紀前葉の所産と考えられる遺物が出土している。これが本来SP265に伴う遺物である可能性がある。これらの遺物の組成からみて、SB010は、7世紀前葉までに機能および廃絶したものと判断する。

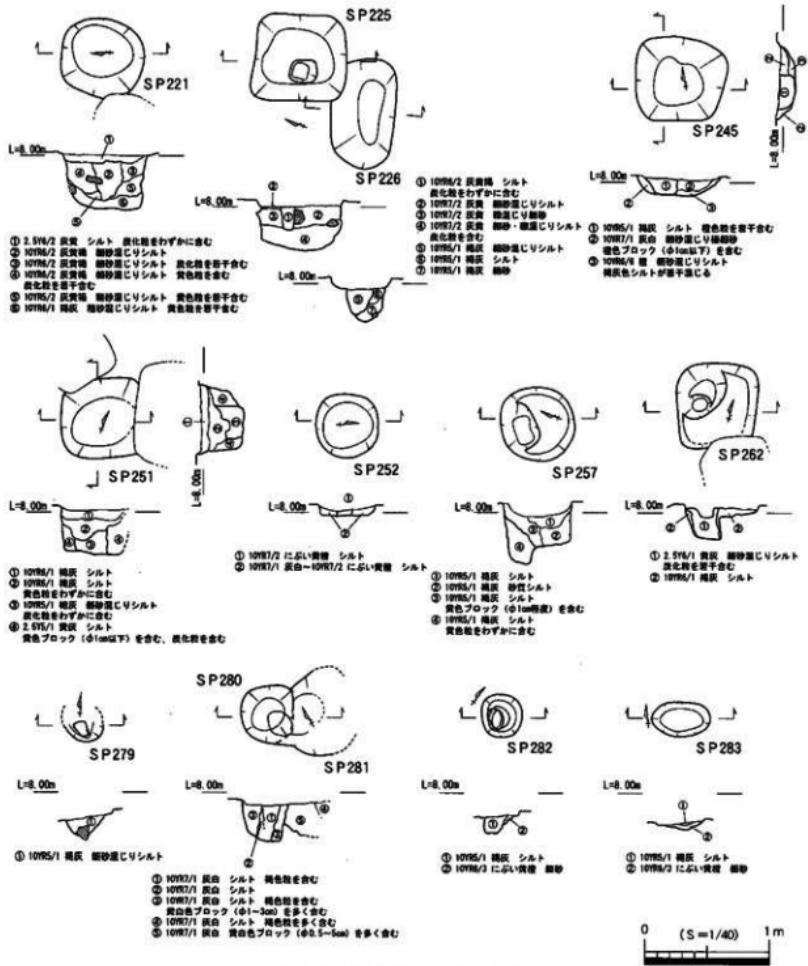
柱穴(第15～17図)

掘立柱建物跡に復原できなかった柱穴のうち、主たるもの第15・17図に図示した。それらの検出位置は第20図を参照していただきたい。

これらのうち、平面形が隅丸方形に近く、掘削深度が比較的深いものに関しては、側柱を構成する柱穴という想定がなされる。それに対して小振りの柱穴は、束柱、櫛列などを構成する柱穴という想定が可能である。一方、SP117のように、平面規模は大きいながら、掘削深度がさほど深くないものがI区を中心にいくつか認められ、現時点でこれらの機能上の想定は困難である。また、ほとんどの柱穴からは根石を確認することができなかった。確実に根石を確認できる事例は、SB002を構成しているSP133のみであり、他に可能性としてあげられるのは、SP212・279のみである。

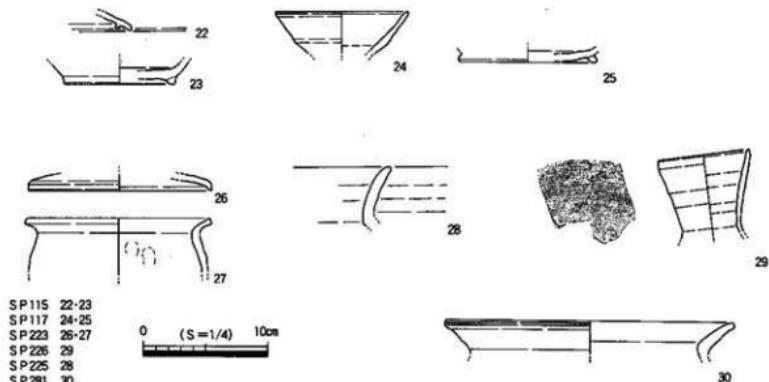


第15図 柱穴平面図・断面図①



第16図 柱穴平面図・断面図②

出土遺物は、各柱穴より計9点図示した（第17図）。22・26は須恵器杯蓋である。22が焼成良好であるのに対して、26は焼成不良で、淡灰色を呈する軟質である。23・25は須恵器杯身で、両者ともに焼成は26よりもさらに悪く、かろうじて還元焼成が達成されている程度の軟質である。24は甌の口縁部である。焼成は比較的良好。29は平瓶の口縁部で、外面に力キ目を施している点で異質である。焼成は良好・堅緻で、胎土および焼き上がりの状況も、今回出土した遺物のなかでは、やや違和感がある。他地域からの搬入品である可能性が考えられる。28・30は土師器甌の口縁部である。27は弥生土器甌で、2次被熱のためか、外面の劣化が著しい。



第17図 柱穴出土遺物実測図

これら出土遺物のうち、混入されたと考えられる弥生土器（27）を除けば、7世紀中葉までに主に消費された遺物（22・24）と、7世紀末葉～8世紀前葉に主に消費された遺物（23・25・26）が確認でき、土師器壺（28・30）および須恵器平瓶（29）も、概ね7世紀代の範疇で使用されたものである。したがって、各柱穴の存続時期は、上記の期間内にほぼ収まるものと考えられる。掘立柱建物跡群より想定される存続時期と、ほぼ同様の傾向を示していることから、今回の調査地で検出された柱穴群のほとんどが、最大限に長く見ても6世紀末葉～8世紀前葉の間に機能・廃絶されたことがいえる。ただし、6世紀末葉～7世紀中葉までの杯類が少ないとから、主たる存続時期は7世紀末葉～8世紀前葉の期間内であったと考えられる。

溝跡（第18図）

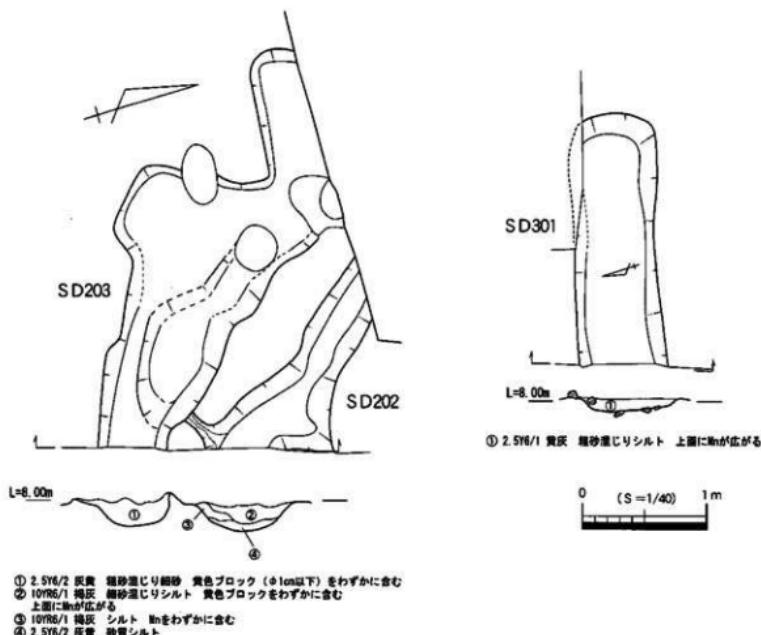
I区で1条、II区で3条、III区で1条の計5条を検出した。それぞれの検出位置は第20図を参照にしていただきたい。

SD101・201は、その機能および存続時期が不明である。SD202・203も存続時期は不明であるが、両者が検出されたのは旧河道の上面である。SD301は機能の想定は難しいが、上層である近世耕作土と埋土が近似しており、出土遺物はないものの、中世末～近世の所産であると考えられる。

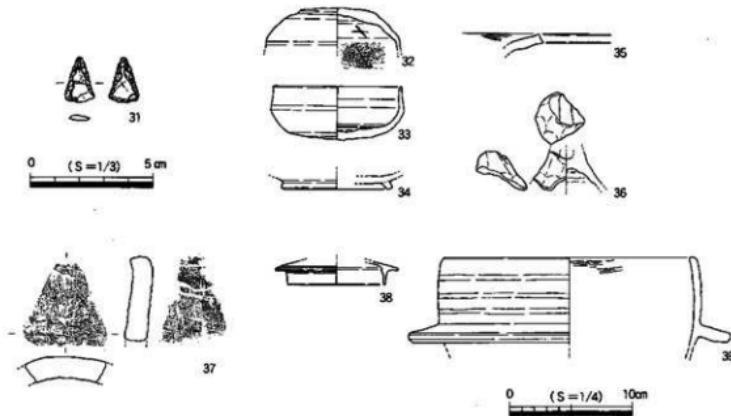
包含層出土遺物（第19図）

弥生土器1点、石鎌1点、7世紀代の杯類3点、近世の遺物2点のほか、蜻壺1点、瓦片1点を図示した。

35は弥生土器の壺口縁部片、31は石鎌である。32は須恵器杯蓋としたが、杯身である可能性を否定できない。天井部外面はヘラ切り後ナデを施し、内面にはヘラ描きで「X」を印している。焼成は良好であるが、胎土中に1～5mm大の粗い砂粒を多く含んでおり、今回出土した須恵器杯類の中では異質である。胎土の状況からは三野地域で生産された可能性をあげられる。33・34は須恵器杯身である。33は焼き歪みが大きいが、胎土は精良で、焼成も良好・堅緻の優品である。底部外面はヘラ切り未調整。34も他の杯類と比べれば、比較的焼成良好であるが、堅緻といえるほどのものではない。36は土師器飯蛸壺である。37は丸瓦であり、今回の出土遺物では唯一の瓦類である。凸面は板ナデと横方向のナデによって調整される。凹面の布目圧痕は細くて糸目が通り、明瞭に残っている。

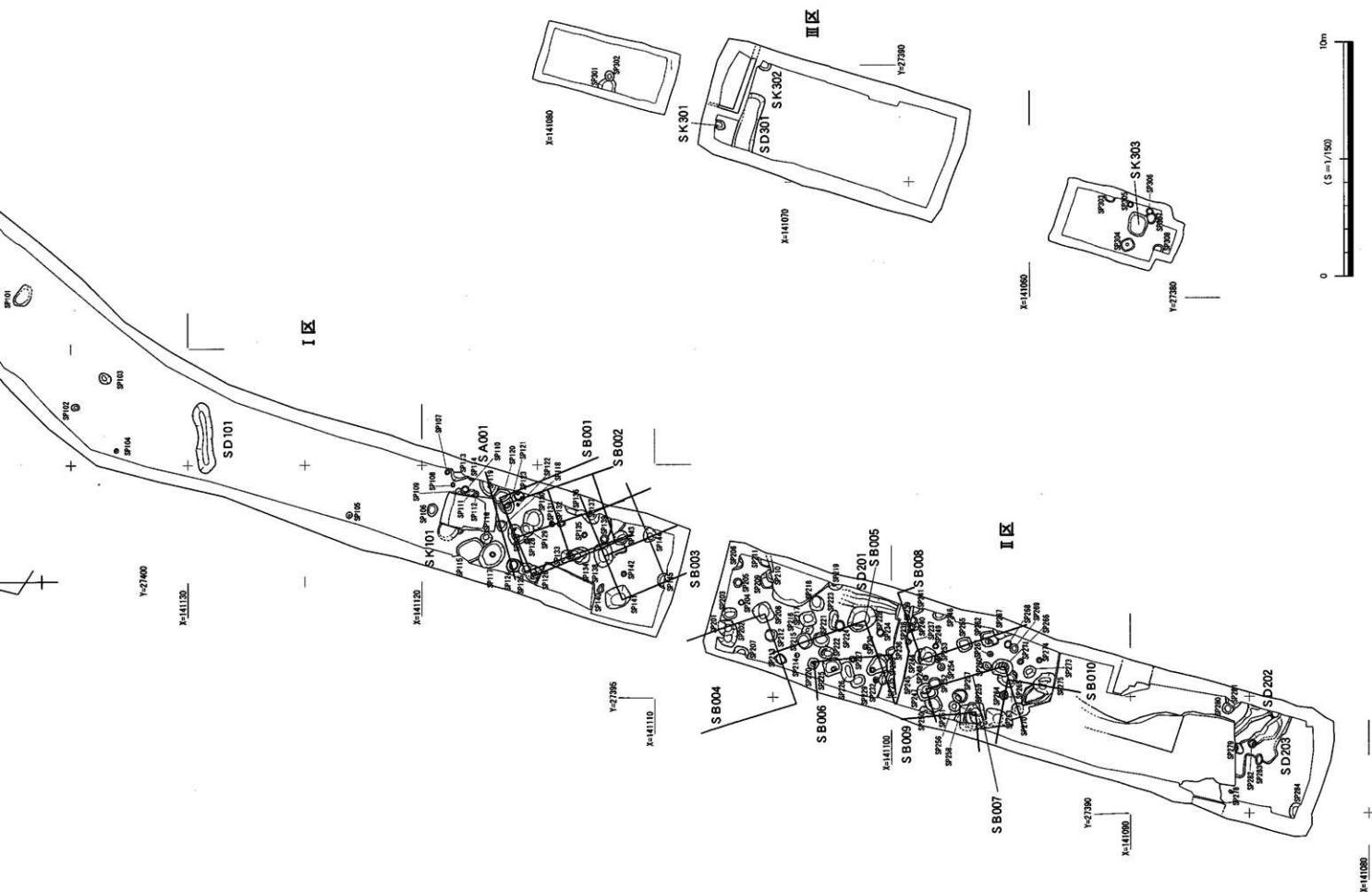


第18図 溝平面図・断面図



第19図 包含層出土遺物実測図

第20図 田村道路選擇配置図



る。38は施釉陶器蓋で、施釉されているのは天井部外面のみである。口縁部外面には沈線を1条意図的に施している。39は瓦質土器羽釜である。口縁部外面および鰐部上面は、焼しによる光沢をもつ。口縁部外面の3条の凹線は焼された後に施されたものであり、凹線部分に関しては胎土が露出している。内面には、鰐部に対応する部分以下に顯著なこげつきが認められる。

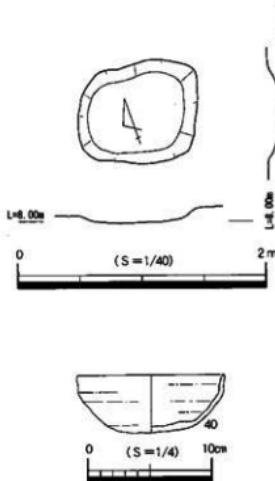
第4節 III-3・4区の調査

第3図に示した各調査区のうち、III-3区とIII-4区としたものは、香川県埋蔵文化財センターによる本調査後に、香川県教育委員会が調査を実施したものである。その経緯については、第I章を参照していただきたい。ここでは、遺構・遺物に関する所見を述べておく。

遺構は、III-3区で柱穴2基、III-4区で柱穴6基・土坑1基が検出された。いずれも現存深度は10cm前後に收まり、それぞれの最深部は標高8.0mよりわずかに低い程度である。柱穴が密集して検出されたI区・II区では、柱穴の最深部が標高7.50m前後に至り、現存深度が40cm以上に及ぶ事例が多いのとは対照的である。ただし、柱穴が密集している地区の最北側では、SP 115・117など現存深度が浅いものがあり、III区だけが特殊な状況とはいえない。このような状況から、ほとんど遺構が検出されなかった地区についても、本来は建物跡がある程度まとまって存在し、最深部が標高8.0m以上に位置する柱穴に関しては削平を受けて消失してしまったものと推定される。

遺物は、SK303より出土した須恵器杯身(40)を図示した(第21図)。40は底部外面がヘラ切り未調整。底部内面も弱いナデを施すのみで、ロクロ目を明瞭に確認できる。焼成はややあまく、外面は淡灰色を呈する。

上記遺物は、主に7世紀後葉前後に消費された遺物であり(信里2002参照)、したがって、当資料が出土したSK303は、7世紀後葉頃に機能したものと推定される。また、他の柱穴からは時期比定に耐えうる遺物は出土しなかったが、埋土の特徴やI区・II区の検出状況からみて、概ね7世紀～8世紀前葉の時間幅の中で、機能していたものと推測される。



第21図 SK 303平面図・断面図
及び出土遺物実測図

第IV章 調査成果の分析

第1節 調査成果について

(1) 挖立柱建物跡・柵列跡の変遷

今回の調査では、一部7世紀前葉に機能したと思われる建物跡があるものの、概ね7世紀後葉もしくは末葉～8世紀前葉に機能していたと考えられる掘立柱建物跡群と柵列跡を検出した。これらは、その主たる存続時期・建物跡の構造・主軸方位・分布の観点から、大きく分けて2つのグループに分けることができる（第2表）。なお、SB007は、前章で述べたとおり、建物跡の構成および時期の検討などにおいて問題点が多く残るため、ここでの検討対象からは除外している。

第2表 挖立柱建物跡・柵列跡の大別

	建物跡Ⅰ群	建物跡Ⅱ群
存続時期	7世紀後葉以前 (ただし、時期比定が困難なものが多い)	7世紀末葉～8世紀前葉
主軸方位	正方位に比較的近いが、ばらつきが大きい (座標北とのズレは東西10°以内) 東柱をもつ確実な事例はない	座標北より20°前後西に振れる
建物跡の構造 分布	柱穴密集地の南半部中心	東柱構造のもののが存在する 柱穴密集地の北半部中心
掘立柱建物跡 及び柵列跡	(SB006) (SB009) SB010	(SA001) SB001 SB002 SB003 (SB004) (SB005) (SB008) SP115 SP117
柱穴・土坑	SK303	

第2表に示した建物跡Ⅱ群のうち、SA001・SB001～003については、前章で述べた通り、SA001→SB002→SB001（7世紀末葉～8世紀初頭）→SB003（～8世紀前葉）の順に構築されたことが確認できている。このうち、SB002はSB001と建て替え関係にあることから、SB001とほぼ同時期に機能していたと推定することに問題はない。SB002に先行するSA001も、状況から考えて7世紀末葉頃に位置づけておくべきであろう。残るSB004・005・008は、時期を推定する根拠に乏しく、SA001・SB001～003の存続期間中に機能していたと仮定するほかはない。

これら建物跡Ⅱ群は、主軸方位のズレが小さく、齊一性が高い。また、比較的大形の柱穴を多く含むという傾向が見出せる。また、SP115・117は、それぞれの平面形から導き出される主軸方位がN-20°W前後であり、かつ、出土遺物から想定される存続時期は7世紀末葉～8世紀前葉である。掘立柱建物跡には復原できなかったが、建物跡Ⅱ群としての条件を備えているといえよう。この他にも、時期は不明であるが、主軸方位がN20°W前後を示す柱穴は多々認められる。したがって、これらの補足的資料も踏まえれば、建物跡Ⅱ群は検出事例数の多さによっても、ある程度その存在を裏付けられる一群といえる。

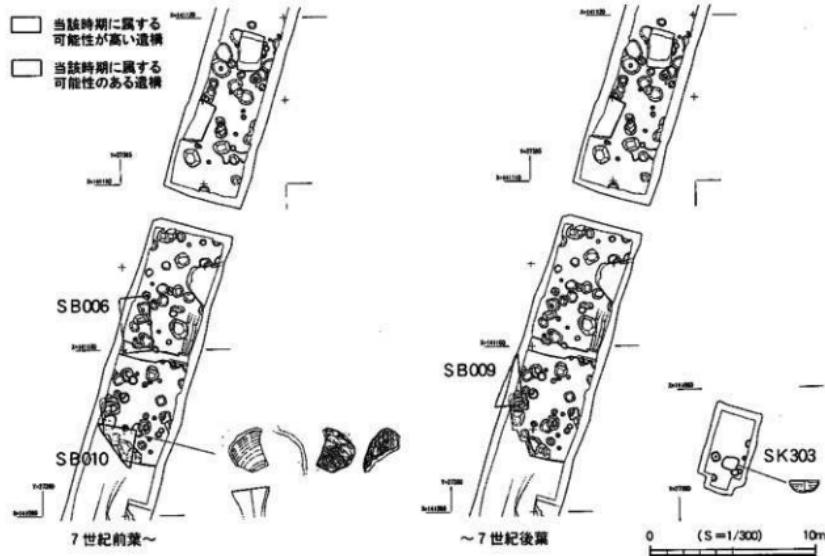
一方、建物跡Ⅰ群は、主軸方位は概ね正方位に近いものの、ばらつきが大きい。検出事例数の少なさも相俟って、群として抽出する条件が整っているとはいえない。しかし、主軸方位が座標北前

後に想定される柱穴がいくつか確認できることは事実であり、これらの柱穴より出土した遺物が建物跡Ⅱ群で出土したものよりも古い様相をもつこともまた事実である。したがって、やや消極的かつ恣意的な抽出方法であるが、建物跡Ⅱ群とは区別される一群として、建物跡Ⅰ群を設定することは可能であろう。

建物跡Ⅰ群において、時期比定が可能なのはSB010（7世紀前葉前後）のみである。ただし、SK303では、その平面形から想定される主軸方位はSB010に近く、かつ、7世紀後葉頃の遺物が出土している。したがって、建物跡Ⅰ群は7世紀前葉～後葉の時間幅を考えなければならない。

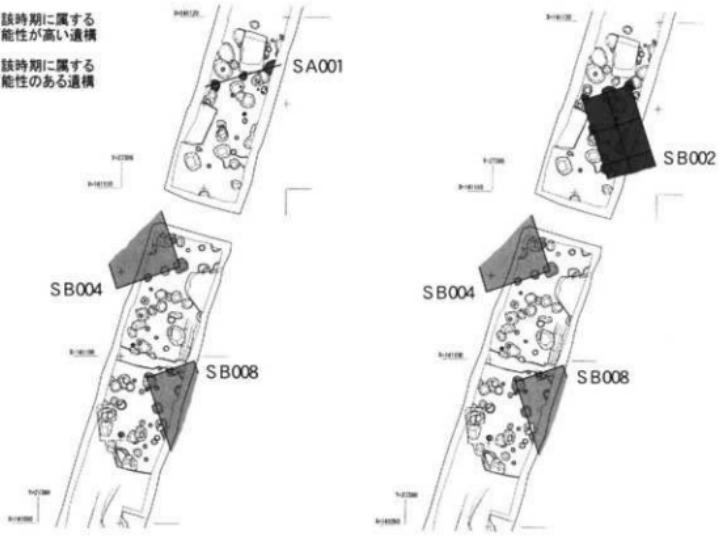
ここで注意しなければならないのは、建物跡Ⅰ群の下限と建物跡Ⅱ群の上限である。両者はともに7世紀後葉もしくは末葉に想定することが可能である。しかし、建物跡Ⅱ群は主軸方位等において齊一性が高いため、建物跡Ⅰ群が同時併存する状況は想定しがたい。よって、両者は時期差において完全に区分でき、7世紀後葉もしくは末葉を境に、建物跡Ⅰ群から建物跡Ⅱ群へと、建物配置上の再編成がなされたものと理解される。このような見解にもとづき、建物跡Ⅰ群の下限を7世紀後葉、建物跡Ⅱ群の上限を7世紀末葉にとらえておく。

さて、以上の検討に基づき、主要な掘立柱建物跡・柵列跡等の変遷図を作成した（第22・23図）。建物跡Ⅰ群およびⅡ群には厳密な時期比定が困難なものが多くあるが、これらについては、建物跡相互の重複関係からみて、無理のない配置になるよう考慮することで、時期比定の幅を絞り込んだ。ただし、それぞれの年代については、遺物から時期比定が可能な建物跡の年代を定点にし、それ以外は均等割して年代を付与している。したがって、これらについては、今後の調査・研究の進展によって修正されるべき内容であることを付言しておく。



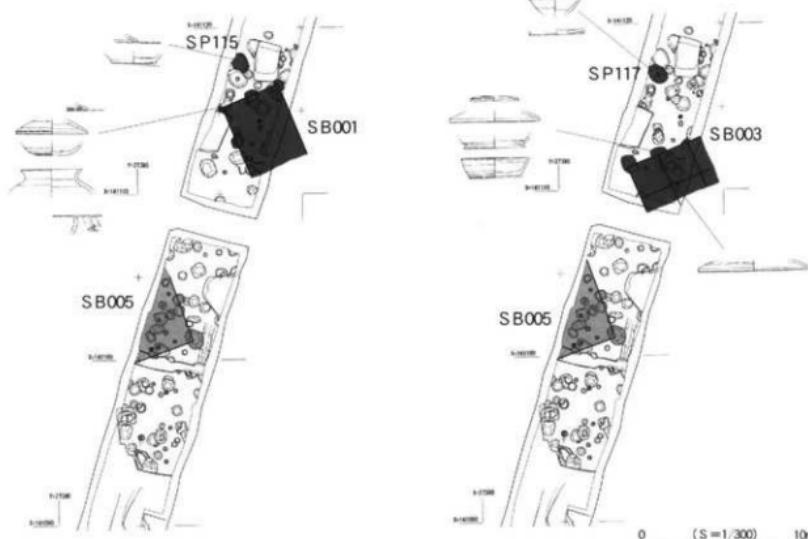
第22図 田村遺跡主要遺構変遷図①

■ 当該時期に属する可能性が高い遺構
■ 当該時期に属する可能性のある遺構



7世紀末葉？

7世紀末葉～8世紀初頭①



7世紀末葉～8世紀初頭②

～8世紀前葉

0 (S=1/300) 10m

第23図 田村遺跡主要遺構変遷図(2)

(2) 出土遺物について

今回の調査で出土した遺物の量は、コンテナ1箱分、実測遺物は40点であり極めて少ない。したがって、詳細な検討に基づく所見を得ることは困難である。ただし、須恵器の焼成については、器種ごとに差異が認められるという、おおまかな傾向が掴めた。この傾向は、今回の調査地に限った特殊なものではなく、消費地における一般的なあり方の一つであると思われる。以下、この点について若干の所見を述べておく。

第3表 須恵器各器種の焼成の大別

	杯類					杯類以外の器種					
	蓋A	蓋B・C	蓋D	杯C	杯D	高杯	甌	短頸壺蓋	提瓶	平瓶	壺
良好・堅緻	15			33		18		8	19		4
良好		1・22	2	12・32	34		24			20・29	
やや不良			9・10・26	3・16・40	11						
不良					23・25						

*数字は遺物番号を示す

*器種分類は信里2002に準ずる

第3表は、須恵器の各器種における焼成の状況を示したものである。まず、杯類における傾向をみると、以下のようにまとめることができる。

焼成良好・堅緻← 蓋：A—B・C—D →焼成不良

杯身： C — D

蓋・杯身の各器種は、A→Dの順に出現することから、杯類は時期が下るにつれて焼成があまくなる傾向にあるといえよう。特に、杯D（高台付杯身）である23・25は、還元焼成がほとんど達成されていない軟質であり、杯Dとセット関係にある蓋Dも焼成不良・軟質のものが多い。今回の調査で出土した蓋D・杯Dは基本的には焼成不良・軟質のものであるといえよう。

一方、杯類以外の各器種は、焼成不良・軟質のものではなく、いずれも焼成良好である。資料数が少なく、厳密な時期比定も困難であるため、時期的推移を見出すことは難しいが、8世紀前葉の杯類とともに出土した短頸壺？の蓋（8）が、高温焼成による「肌荒れ」（信里2002）を呈しており、このことから時期が下っても、焼成良好であることが維持されていた可能性が高いと考えられる。したがって、杯類との対比から以下のようにまとめることができよう。

杯類 … 時期が下るにつれて焼成不良・軟質化する

杯類以外 … 各時期を通じて焼成良好

このような傾向は、焼成上の問題である以上、須恵器生産時に起因しているものとみてよい。ただし、三野地域で生産されたと考えられる杯（32）や、県外の他地域で生産された可能性のある平瓶（29）などは、流通上の問題、もしくは人の移動に関する問題を含んでいることを付言しておく。

第2節 既往の調査との比較検討

(1) 各遺構群の比較

前節で述べたように、今回の調査では主軸方位が座標北より東西10°以内におさまる一群（建物跡I群）と、N-20°W前後におさまる一群（建物跡II群）が検出された。これらは7世紀末葉頃

を境として、建物跡Ⅰ群から建物跡Ⅱ群へと変遷することから、この時期に建物配置上の再編成がなされていることが確認できる。本節では、このような事象と、隣接地でなされた既往の調査（東2002・北山2004）との対比から、いくつかの所見を述べることに努める。

既往の調査においても、主軸方位を推定できる建物跡群・溝跡・土坑などが検出されているが、今回の調査地で得られた所見とはやや様相が異なる。すでに各報告書（東2002・北山2004）で指摘されているように、既往の調査地では、ほぼ正方位に配置された建物跡群・溝跡などで構成されている。これらは主軸方位のズレが小さく、齊一性の高い一群であり、同じ正方位でもばらつきのある建物跡Ⅰ群とは明らかに異なる。さらに、その存続時期は、7世紀末葉以降であり、建物跡Ⅰ群とは時期的には併存しない。むしろ、建物跡Ⅱ群と確実に併存する一群である。したがって、今回検出した建物跡Ⅰ群とは区別されるべきである。一方、建物跡Ⅱ群と比較すると、主軸方位が異なるのは当然であるが、それに加え、建物跡Ⅱ群の下限が8世紀前葉頃に求められるのに対して、これらの一群は10世紀頃までは確実に機能しており、その存続時期においても区別される。

以上のように、既往の調査で検出された建物跡・溝跡などは、建物跡Ⅰ群・建物跡Ⅱ群とは区別されるものである。したがって、これらの一群を建物跡Ⅲ群と仮称し、その特徴として以下の条件を備えるものとする。

建物跡Ⅲ群 … 存続時期：7世紀末葉～10世紀頃を中心とする

主軸方位：ほぼ正方位（座標北とのズレは東西5°以内）

分布：今回の調査地より南側

さて、建物跡Ⅲ群は各報告書（東2002・北山2004）に基づけば、7世紀末葉に出現している。一方、建物跡Ⅱ群も、厳密な時期比定は困難であるが、7世紀末葉頃に出現したものと考えられる。両者は齊一性の高い建物配置という点でも共通しており、この時期に土地利用上の画期があったと推察される。ただし、両者は主軸方位・消長がことなるため、やはり性格上区別されるべきものであることは考慮しなければならない。

一方、7世紀後葉以前においては、今回の調査地では、正方位に近いがばらつきのある建物跡（建物跡Ⅰ群）がいくつか確認できたが、当センターが以前に調査した箇所（北山2004）においても、同様の構造が確認されている。ただし、検出事例数は極めて少なく、居住域としての様相は希薄である。また、丸亀市教育委員会の調査地では、古墳の周溝かと思われる溝跡が検出されており、少なくとも古墳時代後期における居住域の可能性は極めて低い。

- 7世紀後葉以前 ① 居住域としての様相は希薄で、少なくとも集住している状況は認められない。
② 建物跡等が確認される場合には、主軸方位が正方位に近い。ただし、ばらつきがあり、齊一的な状況は認められない。

検出事例数が少ないため、積極的に評価はできないが、上記の傾向は今回の調査地・既往の調査地ともに認められるものであり、7世紀後葉以前においては両者が性格上異なる状況は見出せない。裏を返せば、両者が区別されるようになるのは、建物跡Ⅱ群・建物跡Ⅲ群の出現以後のことであり、あらためて、7世紀末葉頃に想定される土地利用上の画期が浮彫りになろう。

（2）寺院関連遺構・遺物の有無からみた比較

田村遺跡の既往の調査地は、田村廃寺と呼ばれる古代寺院の推定地である。実際、既往の調査では、梵鐘鑄造遺構や築地壙などの遺構、鶴尾を含めた多量の瓦類など、寺院の存在を示す遺構・遺物が多く

確認されており、寺域として相応しい様相を呈している。これまで、建物跡Ⅲ群の性格については触れてこなかったが、これらの遺構・遺物と併存することから、建物跡Ⅲ群が寺院関連遺構であると位置づけることに異論はないであろうし、各報告書においても既にそのような位置づけがなされている。

一方、今回の調査地で、寺院の存在を示す遺構・遺物として確認できたのは、包含層より出土した瓦片1点のみであり、寺院関連遺構として評価できる内容ではない。前節で述べたように、今回の調査地で出土した遺物は、消費地における一般的な方を示している。古代寺院の推定地に隣接していなければ、一般的な集落跡として位置づけがなされるのが自然であろう。前項までの検討では、主に建物跡配置上の検討から、今回の調査地と既往の調査地が性格上区別されることを確認してきたが、その区別が寺院関連遺構・遺物の有無とも対応しているといえる。

建物跡Ⅱ群 — N20°W前後 — 寺院との関連が認められない遺構群

建物跡Ⅲ群 — ほぼ正方位 — 寺院関連遺構群

ところで、既往の各調査報告書では、寺院関連遺構群（寺域）の北限について言及している。当センターの報告書（北山2004）では、SD05・06と名づけられたほぼ東西方向の溝跡が北限を区画している可能性を報告している。一方、丸亀市教育委員会の報告書（東2002）では、SF01と名づけられた築地塀が寺院の北限を示していると判断している。ただし、築地塀SF01は上記のSD05・06より20mほど南に位置し、かつ、その完成時期が10世紀頃と想定されることから、この時期には寺院の規模が縮小したことを想定している。

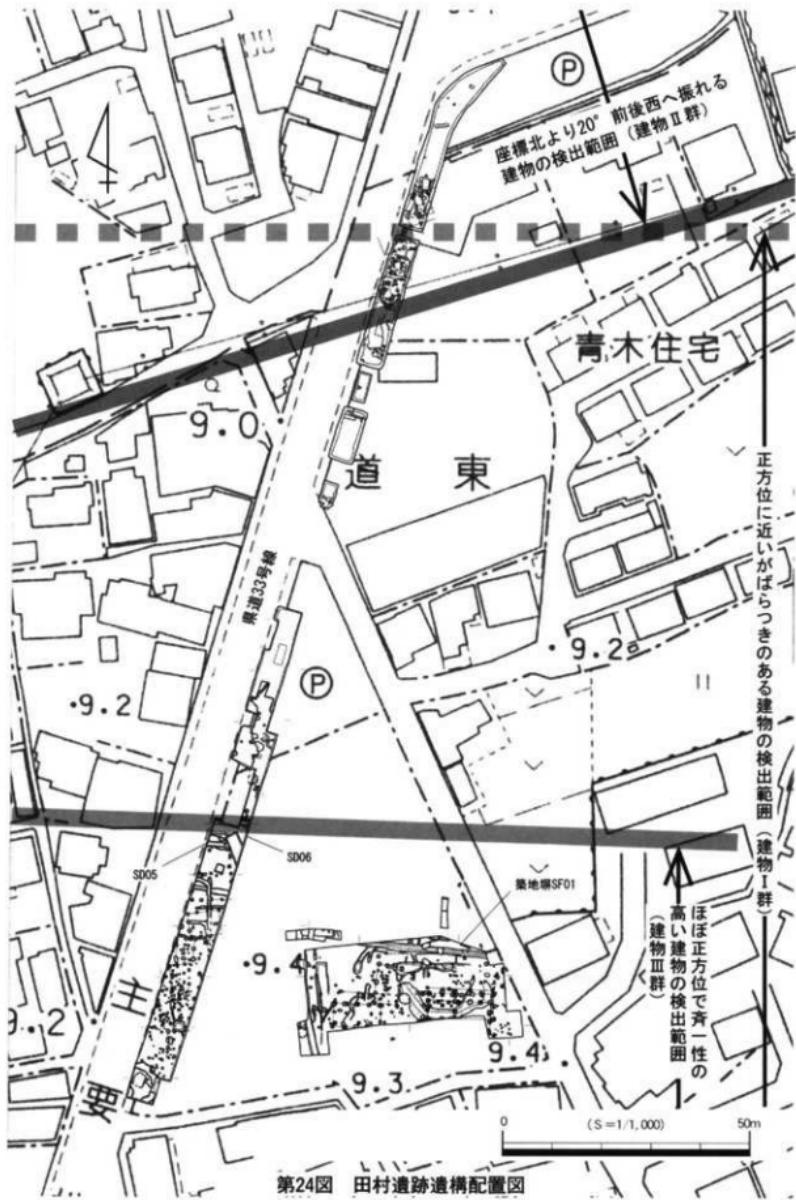
したがって、両報告から想定される寺院の最大域は、上記のSD05・06までである。実際、SD05・06からは、多量の瓦類が出土しており、寺院関連遺構と位置づけることに問題はない。一方、SD05・06より北側では、今回の調査地を含めて、寺院の存在を示す遺構・遺物の出土量は極端に少なくなっていること、SD05・06が寺院の北限を区画する溝跡であることを裏付けていくよう。

このように、これまで想定されていた田村廃寺の寺域の北限が、今回の調査結果から見ても追認され、あらためて裏づけできたことは、今回の調査の大きな成果の一つといえる。

さて、本節での所見をまとめると、以下のようになる（第24図参照）。

- ① 寺院関連遺構・遺物をとり上げるまでもなく、今回の調査地と既往の調査地とでは、建物置及び存続時期からみて区別されるものであり、両者は性格の異なるものであると推察される。
- ② 寺院関連遺構・遺物の有無からみて、既往の調査地が田村廃寺の寺域であるのに対して、今回の調査地は田村廃寺との関わりを直接的に示す資料ではなく、むしろ一般的な集落跡としての特徴を備えるものである。この対比的な関係は、①で示された区別とも対応する。
- ③ ①・②で示された区別があるにもかかわらず、両者を構成している建物跡Ⅱ群・建物跡Ⅲ群の出現時期はおむね7世紀末葉頃に求められる。一方、両者の出現以前である7世紀前葉～後葉においては、齊一性の低い建物跡が散在的に確認できるのみであり（建物跡Ⅰ群）、集落等の様相は極めて希薄である。したがって、田村遺跡においては、7世紀末葉頃に土地利用上の画期があったことが想定される。

ここで、注意していただきたいのは、それぞれを構成する建物跡群の分布範囲である。建物跡Ⅰ～Ⅲ群のうち、建物跡Ⅲ群については、田村廃寺の寺域の北限が確認されているので、それに準じて分布範囲も限定される。それに対して、建物跡Ⅰ群はもともと散在的に分布しているため、第24図に示した範囲よりさらに北に広がる可能性は充分ある。また、第Ⅲ章第4節で述べたように、今回の調査地の南半



第24図 田村遺跡遺構配置図

部では遺構が削平されている状況が伺え、当センターの前回の調査地北部でも、大きな削平を受けしており同様の状況が考えられる。したがって、建物跡II群の分布範囲も、第24図に示した範囲よりもさらに南に広がる可能性が考えられる。ただし、田村廃寺の寺域内にまで広がる状況は認められない。

第3節 周辺の地割との比較検討

(1) 検出された建物跡群を規制する地割の抽出

前節までの所見は、既往の調査の再評価（寺域の追認）という側面が強い。その一方で、今回の調査地に対しては、「田村廃寺関連遺構群とは区別される建物跡群」もしくは「田村廃寺に隣接する集落跡」というような、いわば消極的な評価しかできていない。

一方、田村遺跡においては、7世紀末葉頃に土地利用上の画期があることを確認してきた。その背景には、古代寺院である田村廃寺の創建があることがまず想起される。寺域内に位置する建物跡III群の出現事由は、ここに求めてよいだろう。今回の調査地で検出された建物跡II群も、基本的に田村廃寺の存在を前提として営まれたものと考えられる。ただその場合、田村廃寺に隣接する以上、田村廃寺と主軸方位をそろえるのが自然であろう。しかし、建物跡II群の主軸方位はN20°W前後であり、田村廃寺の創建を背景とするだけでは、建物跡II群の出現事由としては説明不十分である。つまり、建物跡II群の出現事由は、別途究明すべき課題として残されるのである。

第25図は、現存する丸亀平野条里型地割（N30°W前後）・建物跡II群（N20°W前後）・建物跡III群（ほぼ正方位）と方位を同じくする地割を抽出したものである。この図から、以下のような所見が得られる。

- ① 田村廃寺推定地には、寺域を示唆する正方位地割が確認できる。この地割と、既往の調査成果をもとに、寺域および主要伽藍位置をある程度推定することは可能であると考えられる。
- ② 建物跡II群と同じN-20°W前後の地割は、①より推定される田村廃寺の寺域の北側を中心確認され、今回検出された建物跡II群もここに含まれる。
- ③ 丸亀平野条里型地割は、田村廃寺の寺域の北側では確認できず、復原が困難である。これは、②と表裏一体の関係にある可能性が高い。

このうち、建物跡II群との関わりのなかで重要な意味を持つのは②・③である。すなわち、田村廃寺推定地の北側では、丸亀平野条里型地割とは異なる地割が形成され、この地割に基づいて配置されたのが建物跡II群であるという位置づけがなされるのである。したがって、田村廃寺の北側で確認されるN-20°W前後の地割の原形は、少なくとも建物跡II群が出現する7世紀末葉頃には成立していたものといえる。

このように、建物跡II群が位置する田村廃寺推定地の北側では、田村廃寺の主軸方位や丸亀平野条里型地割とは異なる地割が7世紀末葉頃に機能しており、この地割が建物跡II群の出現事由の一因をなしていることが確認される。したがって、この地割は、今回の調査で検出された遺構群を評価する上で重要な意味を持つのにとどまらず、田村廃寺機能時における、田村廃寺の北側の状況を推察する上でも重要な意味を持つものと考えられる。そこで、この地割を指して、「田村北型地割」と称することとする。

田村北型地割 … 田村廃寺推定地の北側で認められる、N20°W前後の地割

この地割を詳しく解説していくことが、今回検出された建物跡群の評価へつながるものと予察される。



(2) 田村北型地割の成立背景

田村北型地割の持つ意味を理解するためには、この地割がいつ頃、どのような経緯で成立したかを把握する必要がある。特に、田村北型地割の現時点での上限である7世紀末葉頃は、丸亀平野条里型地割の施行開始時期であり（森下1997）、両者のどちらが先に成立したかで、田村北型地割の持つ意味が大きく変わる。すなわち、田村北型地割の成立が7世紀後葉以前に遡ることが確認されれば、この地割は条里型地割に先行する地割という位置づけになり、そのこと自体が、これまで不鮮明であった7世紀代の土地開発史の一端を明らかにしうる事実となる。一方、丸亀平野条里型地割の施行開始と同時期かそれ以降であるならば、下川津遺跡と同様（大久保1990）、何らかの制約を受けたために、通有の条里型地割とは異なった、いわば、変則条里型地割とでも呼ぶべきものであろう。

さて、ここで再び検討の対象となるのが、7世紀後葉以前の状況である。前節までに確認したことより、田村遺跡で検出されたこの時期の建物跡は概ね正方位に近く、田村北型地割との関連は想定できない。また、正方位に近いとはいえばつきがあり、かつ、極めて散在的に分布する状況からは、地割の規制を受けて配置されているような齊一性自体が読み取れない。したがって、田村北型地割に限らず、そもそもこの時期に地割が存在していた状況は、田村遺跡の調査結果からは想定し難いのである。よって、現状では、田村北型地割の成立は丸亀平野条里型地割の施行開始と同時期かそれ以降に求めるほかはない。

一方、今回の調査地では、7世紀末葉頃に建物跡配置上の再編成がなされ、主軸方位等において齊一性の高い建物跡群（建物跡II群）が構成されている。この現象は、主軸方位を考慮に入れなければ、稻木遺跡・金蔵寺下所遺跡などで示される「宅地の再編成」（森下1997）という現象と同様である。つまり、今回の調査で認められた「7世紀末葉頃の土地利用上の画期」とは、「地割施行に基づく集落の再編成」という点で、丸亀平野各所で認められる現象と通有のものであり、それが変則条里型地割に基づくものであったために、主軸方位が丸亀平野条里型地割とは異なったにすぎないという見解が示されるのである。

以上の検討より、田村北型地割とは、丸亀平野条里型地割が何らかの制約を受けることで生じた、変則条里型地割であると認識する。これまで、田村遺跡の近辺では、丸亀平野条里型地割の成立時期を示す調査事例はなく、判然としなかったが、田村北型地割が丸亀平野条里型地割を前提とする以上、丸亀平野条里型地割も、7世紀末葉頃には田村遺跡近辺で施行していたものと推察できる。このような推察が可能になったことは、今回の重要な調査成果の一つであるといえよう。

さて、田村北型地割が何らかの制約を受けた、変則条里型地割であると位置づけた場合、この「何らかの制約」とは一体何なのかという問題が浮上する。ここで想起されるのは、田村廃寺の存在である。主軸方位が正方位である田村廃寺と、N-30°W前後である丸亀平野条里型地割とでは、どこかで不整合が生じるのは必然である。この不整合を解消するためには、どこかで地割の方位を変更させる必要がある。もちろん、田村廃寺との不整合を無視し、通有の丸亀平野条里型地割を施行すること自体は可能である。しかし、この時期は田村廃寺創建当初ということもあり、田村廃寺を十分に機能させるため、田村廃寺へと続く道は重要な意味を持っていたのであろう。このような経緯で施行された変則条里型地割が、田村北型地割であると推察する。

第V章 まとめ

今回の調査で検出されたのは、7世紀前葉頃から8世紀前葉頃までの約100年間に営まれた建物跡群である。この建物跡群の営まれ方は、7世紀後葉以前と7世紀末葉以後とでは大きく異なる。7世紀後葉以前の建物跡は、建物跡の軸をそろえる意識が弱く、また、断続的に営まれているのに対して、7世紀末葉頃からは、軸をそろえ、継続的に営まれていた。この時期は、古代の土地区画事業である条里型地割が丸亀平野において施行される時期であり、この地割の形成に伴って、丸亀平野の各所で宅地の再編成がなされている。今回の調査で確認された建物跡群の営まれ方の変化も、当地に形成された地割に沿って建物跡を構築した結果といえる。

ただし、当地に形成された地割は、丸亀平野において広く認められるN-30°W前後の地割ではなく、当地の近辺のみに認められるN20°W前後の地割である。これは、同じく7世紀末葉頃に創建された田村廃寺と、丸亀平野の条里型地割の不整合を解消しようとした結果である。すなわち、この地割は田村廃寺に起因する、当地近辺独自の地割である。このような地割を認識できるようになったのは、今回の調査結果の賜物であり、大きな成果といえる。

一方、今回の調査地は、古代寺院である田村廃寺の隣接地でありながら、寺院との直接的な関わりを示す遺構・遺物はなかった。田村廃寺の隣接地である以上、田村廃寺との関わりを完全に否定するものではないが、田村遺跡としてこれまで確認されてきた遺構群とは区別されるものである。しかし、このことが、前回の調査で確認された区画溝SD05・06が田村廃寺の北限であるという推定をあらためて裏付ける結果となっている。これも重要な成果のひとつである。

さて、今回の調査で認識できるようになった地割（田村北型地割）や、田村廃寺の名残を留める正方位の地割は、現在も地図や現地で確認することができる。すなわち、現在の地割のいくつかは、7世紀末葉頃に原型を求めることができるということである。したがって、現在の地割を検討することで、古代寺院である田村廃寺の復原や、当時の土地区画の施され方など、ある程度の推定が可能である。しかし、それはあくまで推定の域をでないものであり、これを検証するためには、発掘調査による「物証」が不可欠である。当地近辺は今後も土地開発が徐々に進み、時には現存する地割が失われることも想定されよう。そのこと自体は、現代における土地開発のあり方で、かつ、将来的には土地開発の歴史の一端となるものであり、否定されるべきものではない。ただ、原型を辿れば約1300年前にまで遡る地割が、いずれは消失してしまう可能性のあることを、強く認識しておく必要がある。地割に基づく推定が、推定のままで終わらないためにも、当地近辺における発掘調査が重要な役割を担っていることを最後に付言させていただく。

引用・参考文献

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

（附）香川県埋蔵文化財調査センターほか 2004 「県道高松丸亀線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 田村遺跡」
香川県教育委員会 2000 「田村遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報－平成10年度－』

丸亀市教育委員会 2002ほか『田村遺跡発掘調査報告書』

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

東 信男 2007『田村遺跡発掘調査報告書 株式会社百十四銀行城西支店建設に伴う丸亀市田村町所在の古代寺院跡の調査』丸亀
市教育委員会ほか

- 安藤文良 1967 「讃岐古瓦図録」『文化財協会報 特別号8』香川県文化財保護協会
- 石井試一 1995 「第1章 自然環境」『新編 丸亀市史I 自然・原始 古代・中世編』丸亀市
- 上田 聰 1987 「寺院とその構造」『藤井寺市及びその周辺の古代寺院（上） 一藤井寺の遺跡ガイドブックNo.2』藤井寺市教育委員会
- 大久保春也 1990 「下川津遺跡といわゆる条里地割について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 海邊博史 2003 「四国学院大学構内遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報 平成14年度』香川県教育委員会
- 片桐孝浩 1996 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第21冊 川津下種遺跡」（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 片桐孝浩 1997 「中小河川大東川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 川津一ノ又遺跡」（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 片桐孝浩、信里芳紀、細川健一、中島将史 2005 「旧練兵場遺跡」『香川県埋蔵文化財センターワーク』香川県埋蔵文化財センター
- 北山健一郎 2004 「県道高松丸亀線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡」（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 木下晴一 1995 「陸上競技場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成6年度 平池南遺跡」（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 齋木晋司 1999 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第33冊 川津川西遺跡・飯山一本松遺跡」（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 金田草裕 1995 「条里制」『日本古代史研究事典』東京堂出版
- 金田草裕 1996 「南海道 一直線道と海路・山道」「古代を考える 古代道路」吉川弘文館
- 金田草裕 1999 「地図に表現された古代の土地管理法」『古地図からみた古代日本 土地制度と景観』中公新書
- 齋木晋司 1999 「弥生時代終末期の鐵鉄地帯の土器様相について」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第32冊 中間西井坪遺跡II』（財）香川県埋蔵文化財調査センター
- 笹川龍一 1989 「仲村庵寺～旧練兵場遺跡における埋蔵文化財確認調査報告書～」善通寺市教育委員会
- 佐藤竜馬 1996 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第24冊 都家田代遺跡」（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 佐藤竜馬 2000 「讃岐・川津地区遺跡群の動向」『古代文化 特集 南海道諸國の官街遺跡～調査研究の現状と課題～』52 （財）古代学協会
- 中里伸明 2004 「香川県における弥生時代後期～終末期の堅穴住居に関する若干の検討」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 研究紀要X-1』（財）香川県埋蔵文化財調査センター
- 信里芳紀 2001 「出土遺物から見た旧練兵場遺跡（旧練兵場遺跡シンボリズムの記録）」『旧練兵場遺跡 市営西仙遊町住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』普通市、（財）元興寺文化財研究所
- 信里芳紀 2002 「讃岐地域における弥生時代前期から中期前半の様相 一集落の検討を中心にして～」『弥生時代前中期・中期初頭の動態 ～研究発表会集～』古代学協会四国支部
- 信里芳紀 2003 「讃岐地域における弥生時代前期集落の様相」『統文化財学論集』文化財学論集刊行会
- 信里芳紀 2004 「下川津遺跡における鉄器生産の可能性について」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 研究紀要X-1』（財）香川県埋蔵文化財調査センター
- 乗松真也 2005 「三谷三郎池遺跡出土の弥生時代資料」『調査研究報告 第1号』香川県歴史博物館
- 菱田哲郎 2005 「古代日本における仏教の普及 ～仏法僧の交易をめぐって～」『考古学研究』52-3 考古学研究会
- 藤野史郎 2003 「伊原遺跡・本郷遺跡（中間地区・円座地区）」『平成14年度 埋蔵文化財発掘調査概報 県道関係埋蔵文化財発掘調査 農業試験場移転に伴う埋蔵文化財発掘調査 国立善通寺病院改修に伴う発掘調査』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 高鍋昌宏 1987 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊 矢ノ塚遺跡」香川県教育委員会ほか
- 森下英治 1997 a 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第27冊 三条黒島遺跡 川西北七条I遺跡」（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 森下英治 1997 b 「九鬼平野条里型地割の考古学的検討」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 研究紀要V 特集 7世紀の鐵砲』（財）香川県埋蔵文化財調査センター
- 森下英治 1998 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第29冊 龍川五条遺跡 II 鮎野東分山崎南遺跡」（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか

- 森下英治 1999 「讃岐地方における弥生時代中期集落の機能と構造について」『古代学協会四国支部第13回大会資料 濱戸内の弥生中期集落—その機能と構造の研究』古代学協会四国支部
- 森下英治 2001 「旧練兵場遺跡の集落構造—これまでの発掘調査成果から—(旧練兵場遺跡シンポジウムの記録)」「旧練兵場遺跡 市営西仙道町住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」普通市、(財)元興寺文化財研究所
- 森下英治 2003 「国立普遍寺病院改修事業に伴う旧練兵場遺跡発掘調査報告Ⅰ—平成13年度・14年度上半期の発掘調査成果概要報告—」(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 森下英治・信里芳紀・乗松真也 2000 「讃岐地方における弥生土器の基礎資料Ⅱ—前期後半～中期前葉の土器を中心にして—」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 研究紀要Ⅵ』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 渡部明夫 1990 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第9番 水井遺跡」(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 渡部明夫 2005 「天平勝宝以前の讃岐国分寺」『香川県埋蔵文化財センター 研究紀要Ⅰ』香川県埋蔵文化財センター
- ### 第Ⅲ章 調査結果
- 佐藤竜馬 1993 「香川県十瓶山墓跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設四十周年記念 考古学論叢』関西大学文学部考古学研究室
- 信里芳紀 2002 「小谷窯跡出土須恵器の編年」「高松東ファクトリーパーク造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 小谷窯跡・塚谷古墳」(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 藤好史郎・西村尋文 1990 「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡」(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 渡部明夫・森格也・古野徳久 1997 「打越窯跡出土須恵器について」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 研究紀要Ⅴ 特集 7世紀の讃岐』(財)香川県埋蔵文化財調査センター
- ### 第Ⅳ章 調査結果に関する所見
- 東 信男 2002 「田舎遺跡発掘調査報告書 株式会社百十四銀行城西支店建設に伴う丸亀市田村町所在の古代寺院跡の調査」丸亀市教育委員会ほか
- 上田 睦 1987 「藤井寺市及びその周辺の古代寺院(上) 藤井寺の遺跡ガイドブックNo.2」藤井寺市教育委員会
- 大久保徹也 1990 「下川津遺跡といわゆる条里地割について」「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡」(財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 北山健一郎 2004 「県道高松丸亀線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 佐藤竜馬 1993 「香川県十瓶山墓跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設四十周年記念 考古学論叢』関西大学文学部考古学研究室
- 信里芳紀 2002 「小谷窯跡出土須恵器の編年」「高松東ファクトリーパーク造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 小谷窯跡・塚谷古墳」(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 藤好史郎・西村尋文 1990 「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡」(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 森下英治 1997 「丸亀平野条里型地割の考古学的検討」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 研究紀要Ⅴ 特集 7世紀の讃岐』(財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 渡部明夫・森格也・古野徳久 1997 「打越窯跡出土須恵器について」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 研究紀要Ⅴ 特集 7世紀の讃岐』(財)香川県埋蔵文化財調査センター

田 村 遺 跡

遺 物 觀 察 表

第4表 田村遺跡出土土器觀察表

番号	報告遺物名	調査区	法面	法面(m)	斜面率	地土	外觀(地)		内面	測量	備考
							口面	底面			
1	SB011(SP120)	I-2区須恵器 瓢瓶	-	-	-	口縁鋸歯片 石灰・長石(網)少	2.5Y7/1	灰白	N7/ 灰白	圓盤形	燒成良好
2	SB011(SP126)	I-2区須恵器 瓢瓶	(14.4)	-	-	口縁鋸歯片 石灰・長石(網)少	N8/ 灰	N8/ 灰	圓盤形,八方切	圓盤形	燒成不良
3	SB011(SP126)	I-2区須恵器 瓢舟	-	-	(3.9)底窓8 灰石(網)少	5Y7/1	灰白	5Y6/1 灰	圓盤形	圓盤形	燒成不良,堅韌
4	SB011(SP126)	I-2区須恵器 瓢	(12.0)	-	口縁鋸歯片 灰石(網)少	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	圓盤形	圓盤形	圓盤形	燒成良好,堅韌
5	SB011(SP120)	I-2区土師器 壺	-	-	口縁鋸歯片 灰石(中)並,赤色(網)少	7.5Y8/2	灰褐	7.5Y8/7/6 橙	3D形	3D形, N7/	外面に焼付有
6	SB011(SP126)	I-2区土師器 瓢	-	-	口縁鋸歯片 灰石・長石(中)並	5Y8/6 橙	5Y8/6 橙	5Y8/6 橙	外側3D形	3D形	燒成不良
7	SB011(SP134)	I-2区土師器 壺	-	-	把手窓片 灰石・赤色(網)少	7.5Y8/4	にぶい黒	5Y8/6 極赤褐	打刃W1.8	打刃W1.8	燒成良好,堅韌
8	SB003(SP136)	I-2区須恵器 瓢瓶	(9.7)	-	口縁鋸歯片 灰石・黑色(網)少	N8/ 灰	N7/ 灰白	圓盤形	圓盤形	圓盤形	燒成良好,堅韌
9	SB003(SP136)	I-2区須恵器 瓢瓶	(8.0)	-	口縁鋸歯片 灰石(中)少	5Y7/1 灰白	5Y7/2 灰白	圓盤形	圓盤形	圓盤形	燒成不良
10	SB003(SP144)	I-2区須恵器 瓢瓶	(22.0)	-	口縁鋸歯片 灰石・黑色(網)少	N8/ 灰	5Y7/1 灰白	圓盤形	圓盤形	圓盤形	燒成不良
11	SB003(SP136)	I-2区須恵器 瓶舟	-	-	(12.0)底窓8 長石(網)少	N8/ 灰	N8/ 灰白	圓盤形	圓盤形	圓盤形	燒成不良
12	SB003(SP136)	I-2区須恵器 瓢舟	13.5	4.0	10.0 底窓8 灰石(中)並	2.5Y6/1 黃灰	2.5Y6/1 黃灰	圓盤形,底面小判未調査	圓盤形,底面小判未調査	圓盤形	燒成良好
13	SB003(SP141)	I-2区土師器 瓢	(21.0)	-	口縁鋸歯片 灰石・長石(中)並,赤色(網)少	7.5Y8/6 橙	7.5Y8/6 橙	7.5Y8/6 橙	外側3D形, 小刀W1.8	3D形	燒成良好
14	SB003(SP141)	I-2区須恵器 小型壺	-	-	口縁鋸歯片 灰石・長石(網)少	7.5Y8/4	にぶい黒	5Y8/6/6 橙	3D形	3D形	燒成良好
15	SB007(SP265)	I-1区須恵器 瓢瓶	-	-	口縁鋸歯片 灰石・長石(網)少	5Y6/1 灰	N8/ 灰	圓盤形,底面△2.4	圓盤形	圓盤形	燒成良好,堅韌
16	SB007(SP270)	I-1区須恵器 瓢舟	(11.6)	-	口縁鋸歯片 灰石(網)少	N8/ 灰	N7/ 灰白	圓盤形	圓盤形	圓盤形	燒成不良
17	SB007(SP265)	I-1区土師器 茶器不明	-	-	被片 灰石・長石(中)並	5Y8/6 橙	5Y8/6 橙	3D形, 打刃W1.8	3D形, 打刃W1.8	3D形	燒成良好
18	SB006(SP267)	I-1区須恵器 高杯	-	-	被片/8 灰石・長石(網)少	5Y7/1 灰白	7.5Y8/4	にぶい黒	圓盤形	打刃W1.8	燒成良好,堅韌
19	SB009(SP275)	I-1区須恵器 盆皿	-	-	被片/1 灰石・長石(中)少	N8/ 灰	N8/ 灰	圓盤形	圓盤形	圓盤形	燒成良好
20	SB009(SP275)	I-1区須恵器 平皿	(7.5)	-	口縁鋸歯片 灰石・長石(網)少	N8/ 灰	N8/ 灰	圓盤形	圓盤形	圓盤形	燒成良好
21	SB009(SP265)	I-1区土師器 壺	-	-	把手窓片 灰石・長石(網)少	10Y8/4	にぶい黒	5Y3/1 オリーブ黒	板形	板形	燒成良好
22	SP115	I-2区須恵器 瓢舟	-	-	口縁鋸歯片 灰石・黑色(網)少	N8/ 灰白	N8/ 灰白	圓盤形	圓盤形	圓盤形	燒成良好
23	SP115	I-2区須恵器 瓢舟	(10.6)	-	口縁鋸歯片 灰石・黑色(網)少	10Y8/1 灰白	2.5Y7/2 黑質	圓盤形	圓盤形	圓盤形	燒成不良
24	SP117	I-2区須恵器 壺	(10.6)	-	口縁鋸歯片 灰石・黑色(網)少	N7/ 灰白	N7/ 灰白	圓盤形	圓盤形	圓盤形	燒成良好

番号	報告者名	調査区	名稱	法面(m)	断面	断面	土		色調	内面(地土)	外面	内面	備考
							口径	深さ					
25	SP117	I-2区	須恵器 杯身	-	- (1.0) 細砂2/8 石英・長石(細)少	2.5Y6/1 灰白	2.5Y7/2 黄灰	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/2 黄灰	圓板形	板形	板底不規	板底やや不規
26	SP223	I-1区	須恵器 杯盤	(14.6)	- 口縁部2/8 黑色(中)少	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/2 黄灰	圓板形	板形	板底不規	板底やや不規
27	SP223	I-1区	須恵土器 鋼	(14.6)	- 瓦部2/8 石英・長石(中)多	5YR7/6 紫	10YR8/2 白褐	10YR8/1 白褐	10YR8/2 白褐	33万t.付近	板形	板底不規	板底やや不規
28	SP225	I-1区	須恵器 鋼	-	- 口縁部2/8 石英・長石(中)多 雲母(中)少	7.5YR8/6 紫	7.5YR8/6 紫	7.5YR8/6 紫	7.5YR8/6 紫	33万t	板形	板底不規	板底やや不規
29	SP226	I-1区	須恵器 平底	(7.2)	- 口縁部2/8 石英・長石(細)少	7.5Y6/1 灰	7.5Y5/1 灰	7.5Y5/1 灰	7.5Y5/1 灰	圓板形	板形	板底不規	板底やや不規
30	SP281	I-2区	土師器 盆	(23.0)	- 口縁部2/8 石英・長石(中)多 雲母(中)少	5YR5/6 明赤褐	5YR6/6 棕	5YR6/6 棕	5YR6/6 棕	33万t	板形	板底不規	板底やや不規
32	包含層	I-2区	須恵器 杯盤	-	- 天井部2/8 石英・長石(中)多	N5/ 灰	N5/ 灰	N5/ 灰	N5/ 灰	圓板形・圓板5.5付近	板形	板底不規	板底やや不規
33	包含層	I-2区	須恵器 杯身	(0.5) 4.3	- 口縁部2/8 石英・長石(細)少	N6/ 灰白	N6/ 灰白	N6/ 灰白	N6/ 灰白	圓板形・圓板5.5付近	板形	板底不規	板底やや不規
34	包含層	I-1区	須恵器 杯身	-	- (0.2) 細砂2/8 石英・長石(細)少	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	圓板形・圓板5.5付近	板形	板底不規	板底やや不規
35	包含層	I-1区	須恵土器 盆	-	- 口縁部2/8 石英・長石(細)少	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐	33万t	板形	板底不規	板底やや不規
36	包含層	I-1区	須恵器 鋼	-	- 故片	7.5YR8/6 紫	5YR6/6 紫	5YR6/6 紫	5YR6/6 紫	33万t	板形	板底不規	板底やや不規
38	包含層	I-2区	須恵器 盆	(7.8)	- 口縁部2/8 沙母(中)少	7.5YR6/3 にぶい黄 (N6) 5YR6/2 白オリーブ	33万t	板形	板底不規	板底やや不規			
39	包含層	I-1区	須恵土器 羽釜	20.0	- 口縁部2/8 沙母(中)少	N4/ 灰灰	N4/ 灰灰	N4/ 灰灰	N4/ 灰灰	47万t.付近	板形	板底不規	板底やや不規
40	SA433	I-4区	須恵器 杯身	11.8 4.7	- 6.8 沙母(中)少	5Y6/1 灰	10YR8/4 にぶい黄 沙母(中)少	10YR8/4 にぶい黄 沙母(中)少	10YR8/4 にぶい黄 沙母(中)少	圓板形・圓板5.5付近	板形	板底不規	板底やや不規

番号	報告者名	調査区	特徴	現存 高さ (cm)	法面 最大 厚 (cm)	胎土	色調		凹面	凸面	備考
							凹面	凸面			
37	包含層	I-1区	丸瓦	6.6	6.8	1.7 白色砂粒(細)少	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	布目、板形	板形	0.38

番号	報告者名	調査区	特徴	現存 高さ (cm)	法面 最大 厚 (cm)	胎土	色調		凹面	凸面	備考
							凹面	凸面			
31	包含層	I-2区	石版	サヌカイト	1.8	1.2	0.2	0.38			

県道西植田高松線道路改良事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

川島本町遺跡
川島本町南遺跡



第26図 川島本町遺跡・川島本町南遺跡位置図

2007. 1

香川県教育委員会

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

県道西植田高松線と県道三木国分寺線が交わる、高松市川島本町の交差点は、近年の交通量の増加に伴い混雑が多発してきていた。こうした状況の緩和策として香川県土木部道路建設課（以下、道路建設課と略称）は、川島本町の交差点の西側に県道西植田高松線のバイパス工事を新たに計画した。

道路建設課から工事計画の照会を受けた香川県教育委員会（以下、県教委と略称）は、工事予定箇所に埋蔵文化財が所在する可能性が高いものとの判断し、道路建設課と協議を重ね、地下遺構に影響を与える範囲については発掘調査を実施することで合意し、遺跡の有無を確認するための試掘調査を実施することになった。県教委による試掘調査は、平成16年と17年の2次に分けて実施した。その結果、路線の南北2地点において埋蔵文化財の包蔵地とその範囲を確認し、北側の包蔵地を川島本町遺跡、南側を川島本町南遺跡として認められることになった。その報告を受けた道路建設課は、工事予定との関係で県教委と更に協議を重ね、平成17年度中に香川県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することで合意に達した。

現地での発掘調査は香川県埋蔵文化財センターの、16年度から設けられた小規模調査班が担当した。現地調査は平成17年7月1日から10月31日までの4ヶ月間を要した。調査対象面積は、川島本町遺跡が1,275m²、川島本町南遺跡が448m²、合計で1,723m²を測る。川島本町遺跡の調査では、縄文後期頃のサヌカイト製の碎片・剥片及び石器類を多量に廃棄している不整形遺構や弥生時代から中・近世頃の多数の溝状遺構、古墳時代前期の井戸跡等を検出した。注目できるものでは、高松平野でも出土例が少ない、縄文時代後期の土器が比較的豊富に出土し、貴重な調査成果になった。

なお、発掘調査の成果をまとめた整理作業は、香川県埋蔵文化財センターにおいて平成18年1月より3月までの3ヶ月間を要した。

平成17年度の発掘調査及び整理作業は、以下の体制で実施した。

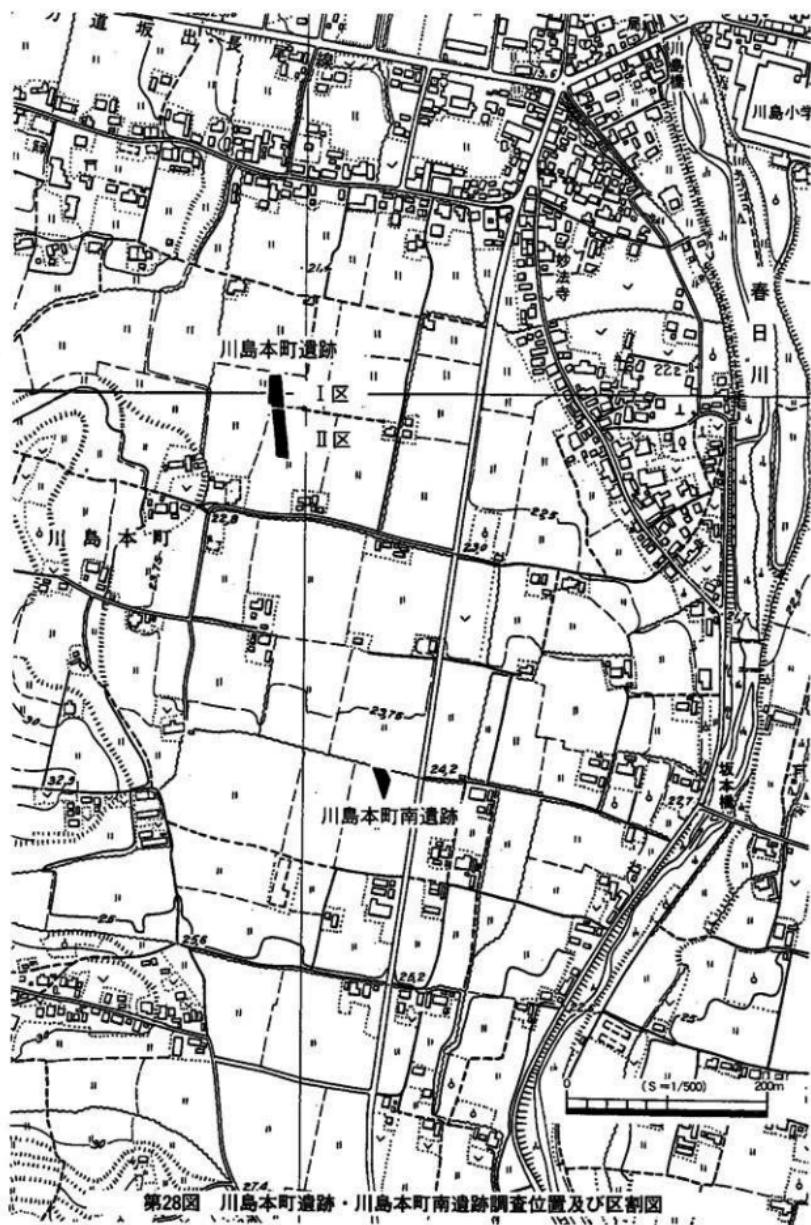
総括 所 長	渡部明夫	調査課 課 長	廣瀬常雄
次長兼総務課長	榎原正人	主任文化財専門員	西村尋文
総務課 副主幹兼係長	松崎日出穂	文化財専門員	古野徳久
主 査	塩崎かおり	参 事	河野浩征
主 査	田中千晶	調査技術員	中里伸明
		整理作業員	田村加良子

（現場作業参加者）

池添晶子、大浦哲也、川西俊士、川西雅子
川渕ひな美、柴垣俊裕、筒井敏和、土居剛
長尾誠一、西村和代、平居和彦、松本悦子
松本毅彦、三谷恵子、吉井和美



第27図 調査地より由良山を望む



第28図 川島本町遺跡・川島本町南遺跡調査位置及び区割図

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

高松平野は、香川県のほぼ中央部の瀬戸内海沿岸に位置する沖積平野である。西を五色台山塊、東を立石山、雲附山、南を日山、上佐山等に隔てられ、南北約20km、東西約16kmを測る。高松平野の南方には、香川県と徳島県とを隔てる阿讃山脈が東西に広がり、その山稜裾部から平野部に向かい多くの丘陵が細長く延びる。この丘陵間に東より新川、春日川、香東川、本津川等の河川が北流し、主にその河川堆積層により高松平野は形成されている。

川島本町遺跡及び川島本町南遺跡の所在する、高松市川島本町及び高松市池田町周辺は、高松平野の南東部に位置する。北約1.5kmには由良山、南西約1.2kmには上佐山、西約1.4kmには三郎池、東約0.3kmには春日川が北流している。春日川は高松市西植田町及び東植田町周辺の丘陵地より北流し、高松平野の東部の沖積地を、新川と共に形成している。川島本町遺跡及び川島本町南遺跡は春日川が形成した沖積地の上面に位置する。

遺跡周辺は条里型地割りが広範囲に及んでいる。そのため、旧地形の復元が困難であり、詳細な点は問題を残すが、周辺の旧地形を復元した第29図（註）を見れば、遺跡周辺は旧河道、氾濫原、開析谷、自然堤防、段丘、山地・丘陵等に分けられる。遺跡は春日川西岸に位置し、東の旧河道A・Bと西に広がる段丘面との間の扇状地上に立地する。旧河道Aは川島本町南遺跡より東方の春日川西岸より北西方向へ派生し、川島本町遺跡より北東約500mの地点で春日川と合流する。河幅は約50～100mを測り、規模等により春日川の本流の可能性を考えられる。なお、春日川と旧河道Aの間は中州状の自然堤防に分類される。旧河道Bは旧河道Aの西側に位置する小路で、北半部は水路も走り比較的明瞭であるが、川島本町遺跡に隣接する南半部は不明瞭である。

遺跡の西に広がる段丘面には、北東ないし東方に向く開析谷が複数認められる。川島本町遺跡の西側には、開析谷Aが隣接している。そのため、川島本町遺跡は開析谷Aからの堆積層と春日川方向からの堆積層が交わるような土地条件を呈しているが、主に春日川方向からの堆積作用により、遺跡がある基盤層は形成されたものと考えられる。同様に川島本町南遺跡の西方には、開析谷Bが位置しているが、比較的離れているため、川島本町遺跡同様、春日川方面からの堆積作用により基盤層が形成されているものと考えられる。なお、遺跡のある基盤層は、調査の成果から推定して、縄文時代後期までにはおおむね堆積作用が終了し、その上面に縄文時代後期以降の遺構が広がる。

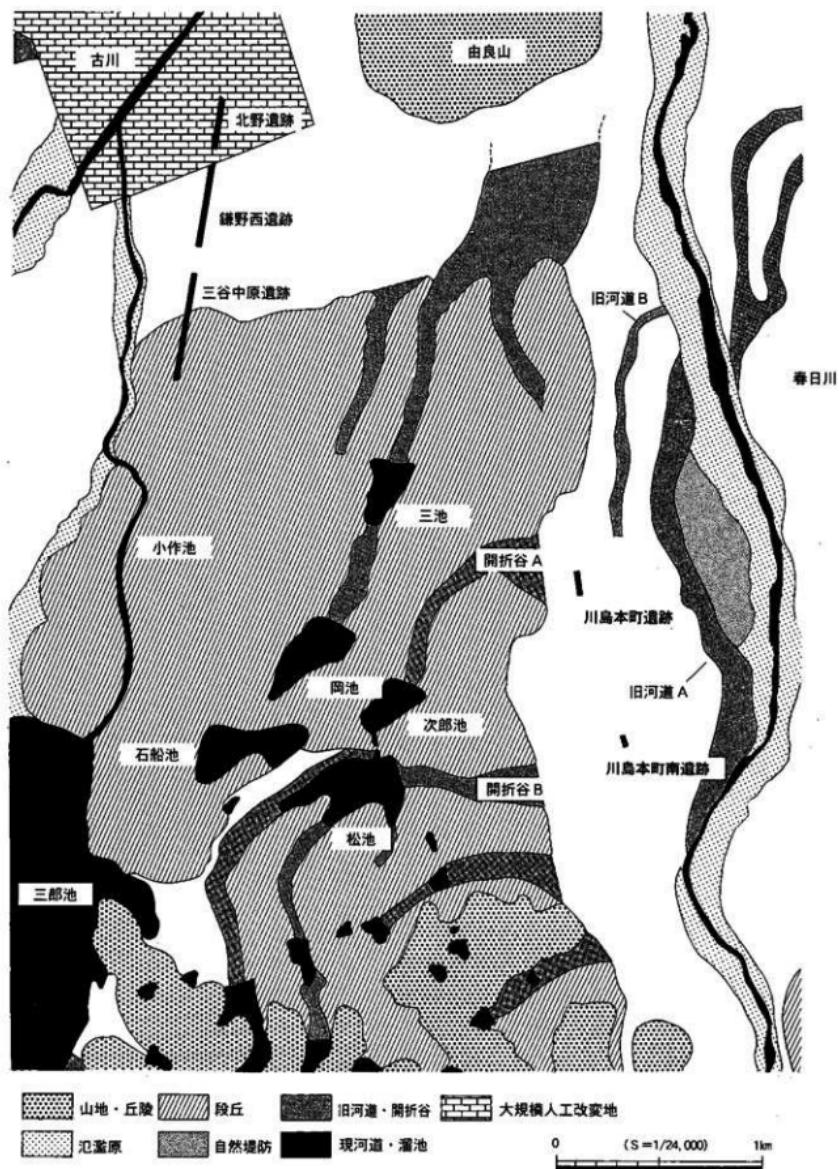
（註）

第29図は下記参考文献中で報告している地形分類図を参考にして、空中写真の検討と現地踏査を実施し作成したものである。

（参考文献）

金田章裕 1992「第2章 第1節 地理的環境」『讃岐国弘福寺領の調査』高松市教育委員会

高橋 学 1992「第4章 第1節 高松平野の環境復原」『讃岐国弘福寺領の調査』高松市教育委員会



第29図 微地形分類図

第2節 歴史的環境

高松平野において、縄文時代草創期～縄文時代中期の明確な遺構はなく、遺物がわずかに確認されている。前田東・中村遺跡や大池遺跡で縄文時代草創期の有舌尖頭器が出土した。縄文時代後期は、磨消縄文土器を主体とした土器組成が西日本の広域に分布する時期である。香川県内においても、森広遺跡群・小山南谷遺跡・永井遺跡などでこの時期の遺物がまとまって出土している。今回報告する川島本町遺跡でも、この時期の土器と石器類がまとまって出土している。

縄文時代晩期以降、水稻耕作を行っていたことを示す遺構・遺物が確認されるようになる。上西原遺跡、浴・長池遺跡では不定形小区画水田が検出されており、林・坊城遺跡では木製農具が出土している。これらの水田関連遺構・遺物よりやや後出するが、弥生時代前期～中期初頭には汲汲遺跡、天満・宮西遺跡などで環濠を伴う集落が形成され、ある程度集落の様相が把握できる。弥生時代中期中葉には既に環濠が消失しているが、居住域の単位に大きな変化があった状況は読み取れない（信里2003）。

弥生時代中期後葉～後期前葉には、丘陵地や山頂などの高所地や、平野の縁辺部にも集落が展開する。久米池南遺跡、鹿伏・中所遺跡、小山南谷遺跡などは、この頃より集落としての様相が明瞭になる。今回報告する川島本町遺跡、川島本町南遺跡の近辺においても、三谷三郎池遺跡、池田合子神社遺跡で、当期の遺物が確認されている。一方、平野部においても、集落の中心地は微視的には推移しているが、巨視的に見れば前期以来続的に営まれている状況が読み取れる（乗松2005）。このうち、上天神遺跡では、朱精製容器である把手付広片口皿が約80個体出土したばかりでなく、遠近を問わず他地域よりの搬入品・模倣品が確認された。

高所地や丘陵地での集落の営みは弥生時代後期以降、縮小傾向にある。その一方で、竪穴住居跡の検出数は中期後葉以降、確実に増加し、古墳時代前期初頭まではこの状況が存続するようである。天満・宮西遺跡・凹原遺跡・空港跡地遺跡など、この時期の集落の推移が明らかとなっている事例も蓄積されつつある。これらの事例から、遺跡群（信里2003）内における集落の動向が把握できるようになりつつある。

第7表 川島本町遺跡・川島本町南遺跡周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	川島本町遺跡	21	凹原遺跡	41	久米池遺跡
2	川島本町南遺跡	22	汲汲遺跡	42	諏訪神社古墳
3	光寺寺山遺跡	23	林・坊城遺跡	43	諏訪神社遺跡
4	中山田遺跡	24	浴・松ノ木遺跡	44	久米池南遺跡
5	上佐山山麓遺跡	25	弘福寺領田園比定地北地区	45	高松茶臼山古墳
6	通谷遺跡	26	浴・長池Ⅰ遺跡	46	前田東・中村遺跡
7	三谷三郎池D遺跡	27	浴・長池Ⅱ遺跡	47	西浦谷遺跡
8	三谷三郎池C遺跡	28	井手東Ⅰ遺跡	48	池戸鍋淵遺跡
9	三谷三郎池A遺跡	29	井手東Ⅱ遺跡	49	池戸八幡神社1号墳
10	船岡山古墳	30	居石遺跡	50	砂入遺跡
11	三谷中原遺跡	31	蛙股遺跡	51	香川大学農学部遺跡
12	鎌野西遺跡	32	大田下・須川遺跡	52	鹿伏・中所遺跡
13	北野遺跡	33	上天神遺跡	53	天神山古墳群
14	由良南原遺跡	34	松並・中所遺跡	54	白山1遺跡
15	空港跡地遺跡	35	鶴屋神社4号墳	55	白山2遺跡
16	宮西一角遺跡	36	東中筋遺跡	56	白山3遺跡
17	多肥宮尻遺跡	37	天満・宮西遺跡	57	福万遺跡
18	日暮・松林遺跡	38	上西原遺跡	58	南天枝遺跡
19	多肥・松林遺跡	39	大池遺跡	59	十川東・平田遺跡
20	松林遺跡	40	木太・中村遺跡	60	西尾遺跡

第30図 川島本町遺跡・川島本町南遺跡周辺遊歩分布図



第Ⅲ章 川島本町遺跡の調査成果

第1節 概要

今回の調査では、弥生時代後期～古墳時代前期の溝跡を主に検出した。また、それと共に集落跡の存在を示す柱穴・井戸跡を検出しており、調査地の東側に集落跡が展開する状況が推定できるようになった。古墳時代中期以降の様相は今回の調査から窺い知ることはできないが、17世紀前葉までに機能していたと考えられる条里方向の溝跡を検出しており、耕作地として土地利用されていたものと考えられる。

一方、黄褐色砂混じりシルト層中および上面からは、縄文時代後期の土器がまとまって出土した。また、風倒木痕と考えられる不定形な遺構の埋土中より、縄文土器と共に多量のサヌカイト製の石器類が出土した。縄文時代後期の土器が包含層中より出土することは、県内では増加傾向にあるがその事例は少なく、これらの遺物は貴重な資料になる。

第2節 基本層序

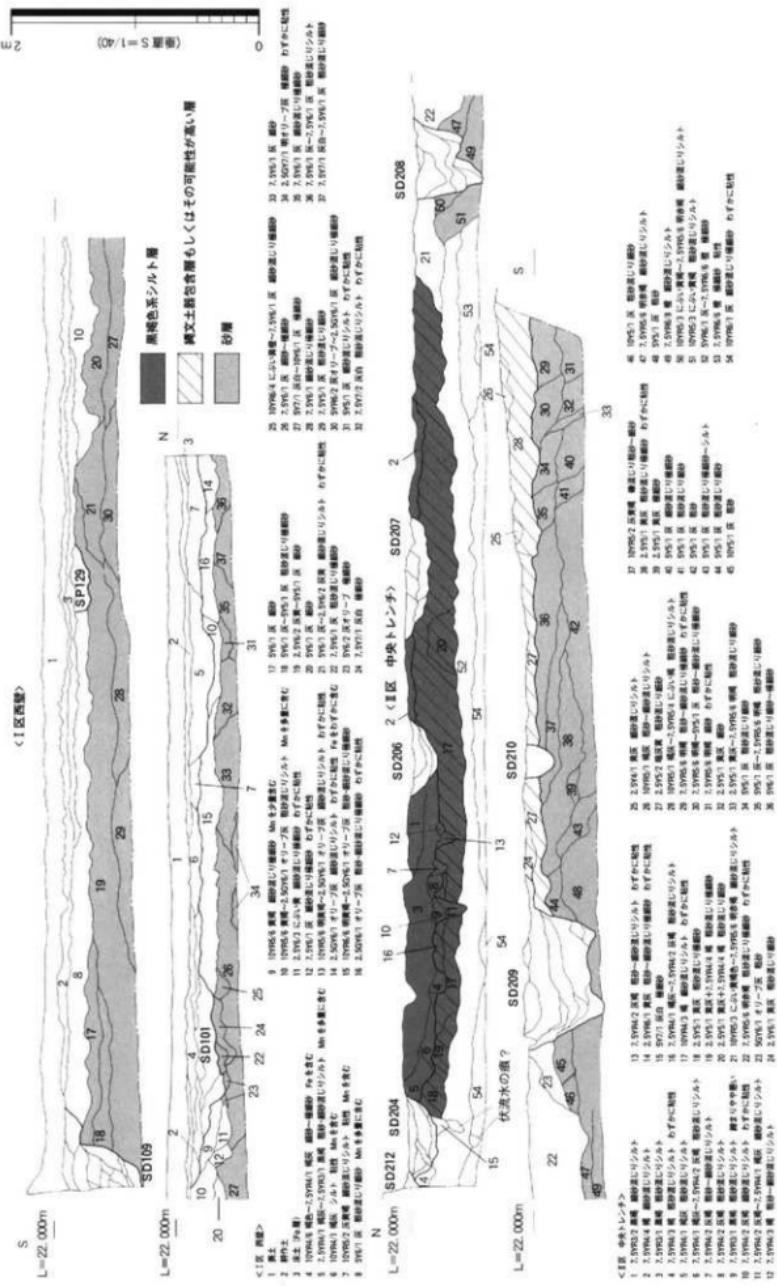
当地は、今回の調査が行われる以前は、耕作地として利用されていた。この耕作土の下層にも旧耕作土層が確認される。この下層には黒褐色系～黄褐色系シルト層が堆積しており、検出された遺構はこの層を切り込んで形成されている。したがって、この層の上面が遺構検出面である。この遺構検出面の上には、部分的に砂層が薄く堆積している。したがって、この砂層が、遺構検出面を把握する際の指標となる。これらの遺構の基盤層となっている黒褐色系シルト層の下層では、砂粒を多く含んだ黄褐色系シルト層が、厚さ不均等に堆積する。縄文時代後期の土器はこの層よりまとまって出土している。さらにその下層は、調査区全体に砂層が厚く堆積しており、当地が旧河道上に位置していたことが想定される。また、縄文土器包含層中では、伏流水の跡を確認しており、旧河道の埋没後も水位が高かった状況が読み取れる。今回の調査では井戸かと考えられる土坑を検出していることからも、この状況を指示できる。

第3節 検出遺構・出土遺物

柱穴（第35・36図）

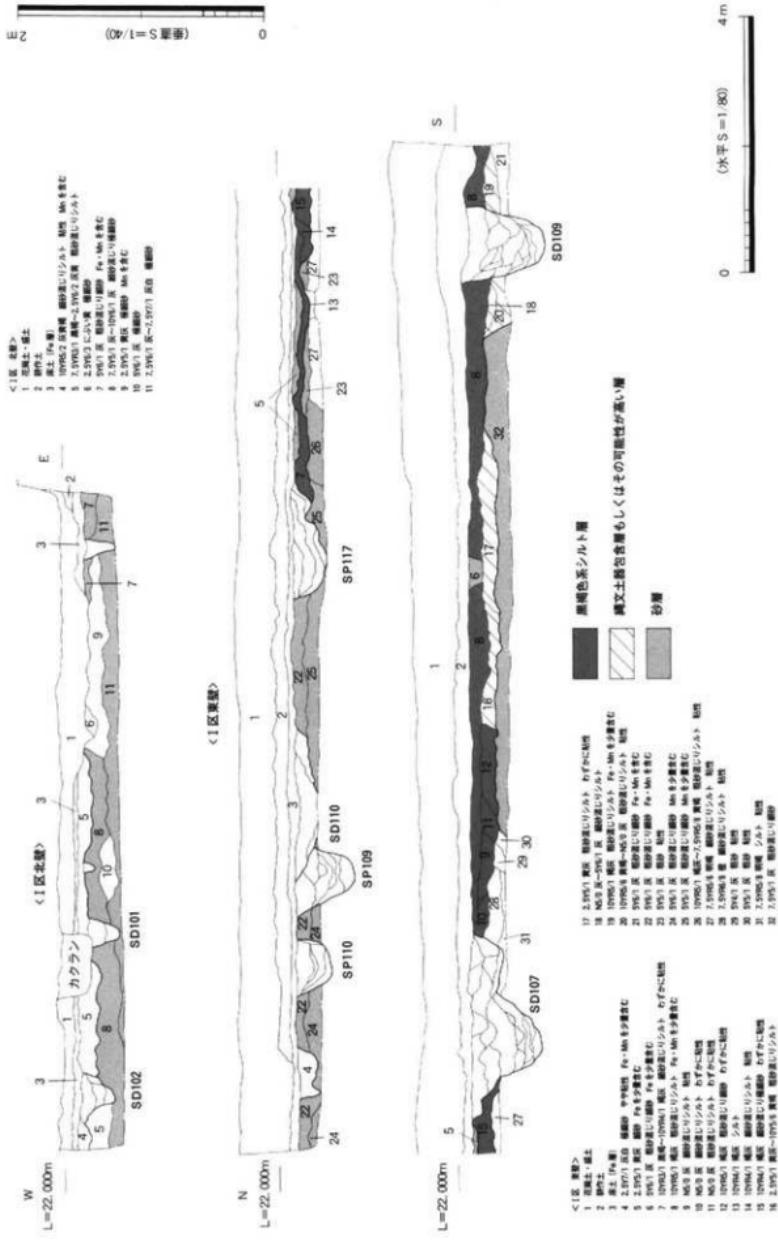
I区の北東部を中心に検出している（第58図参照）。黒褐色を呈する埋土と、灰白色を呈する埋土の2種類がある。出土遺物から、前者が弥生時代後期～古墳時代前期、後者が中世前半に所属する。いずれも現存深度が浅く、かなりの削平を受けているものと考えられる。

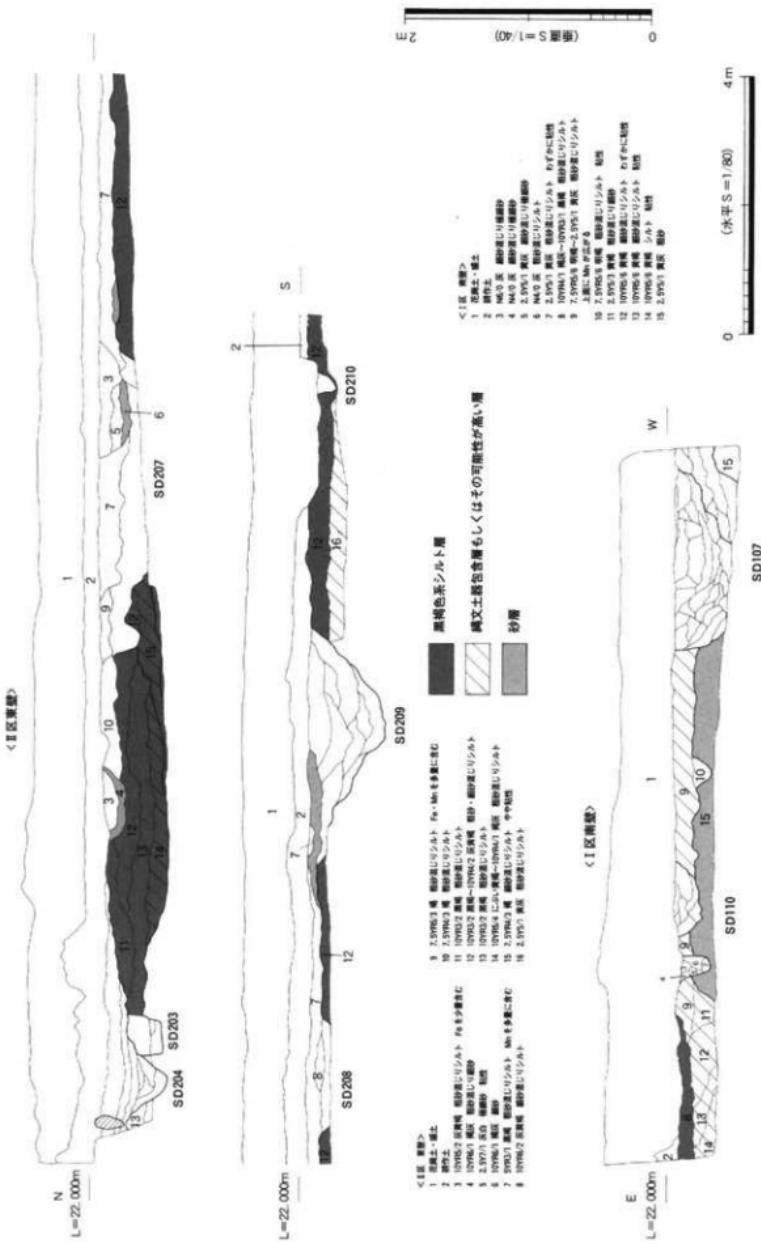
柱穴より出土した遺物のうち、5点を図示した（第36図）。1は磨消縄文土器で、縄文時代後期のものである。周辺より混入されたものとみてよいだろう。3は弥生土器広口壺の胴部。香東川下流域産（下川津B類）である。外面には、屈曲部より下半にわずかながら黒斑が認められる。断面に黒化層は認められない。5は弥生土器高杯脚部である。色調は香東川下流域産と同じである。断面には黒化層が認められる。7は土師器壺である。にぶい橙色を呈する。8は土師器甕。体部下半にはヨコナデが施されておらず、この部分が押し出し技法によって体部に成形されたものと考えられる。上記出土遺物のうち、3・5は弥生時代後期中葉～後葉、7は古墳時代前期後葉（布留式中相～新



第31図 I区西壁・II区中央トレーンチ土層断面図

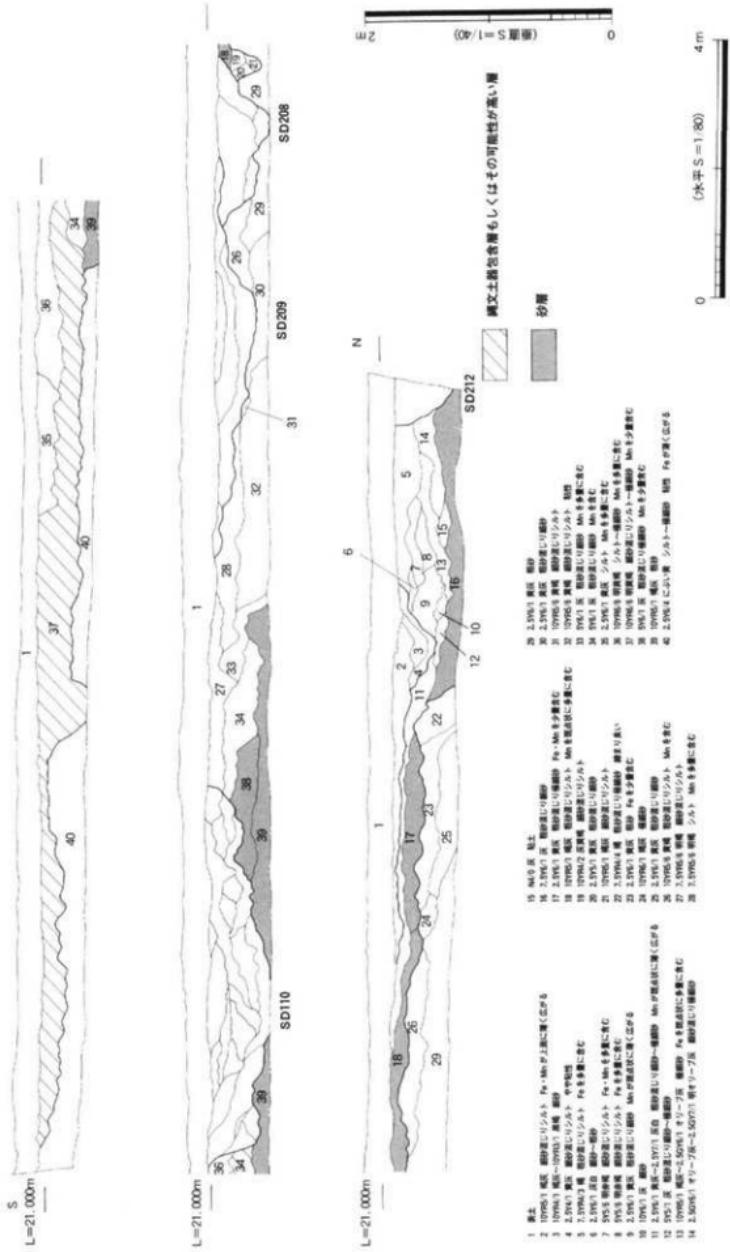
第32図 I区北壁・I区東壁土層断面図

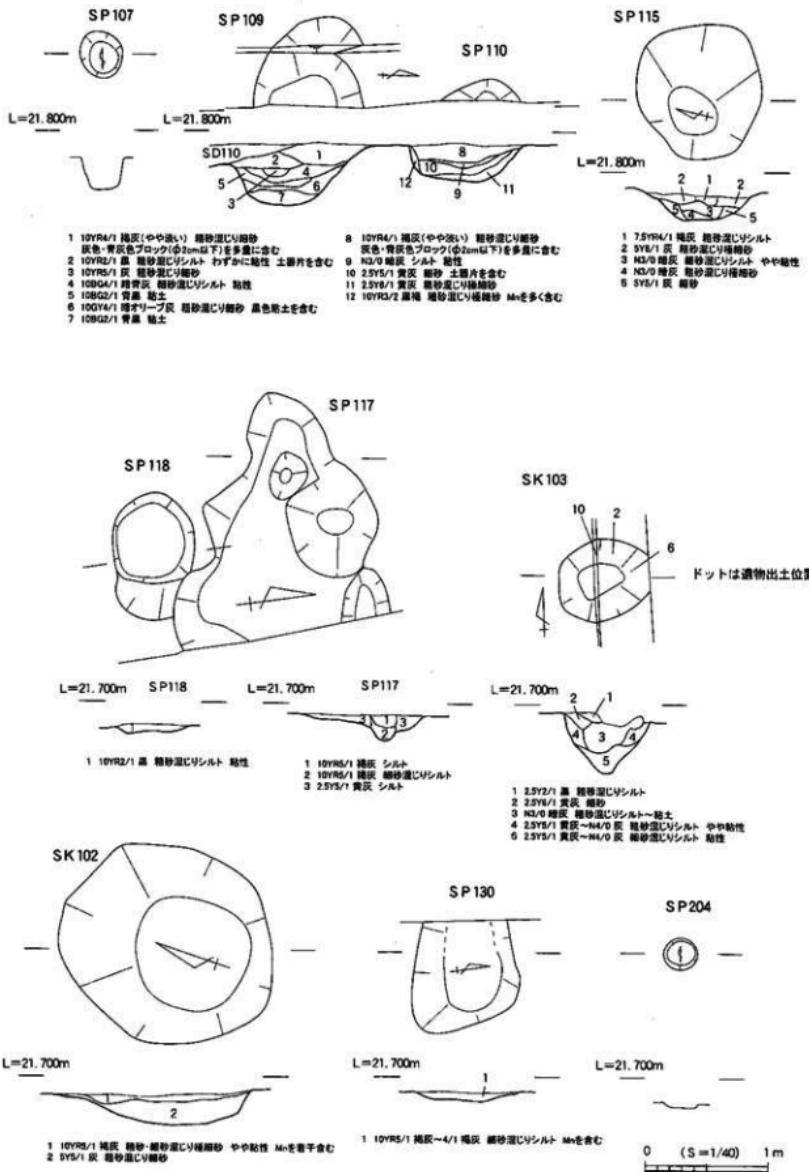




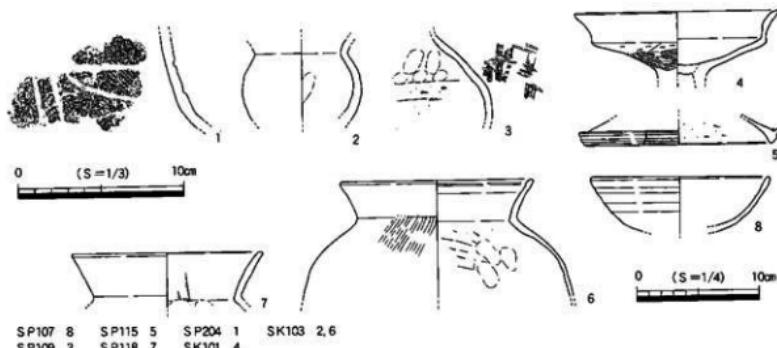
第33図 II区東壁・I区南壁土層断面図

第34図 II区西壁土層断面図





第35図 柱穴・土坑平面図・断面図



第36図 柱穴・土坑出土遺物実測図

相)、8は12世紀中葉～13世紀初頭に消費された遺物と考えられる。

土坑(第35・36図)

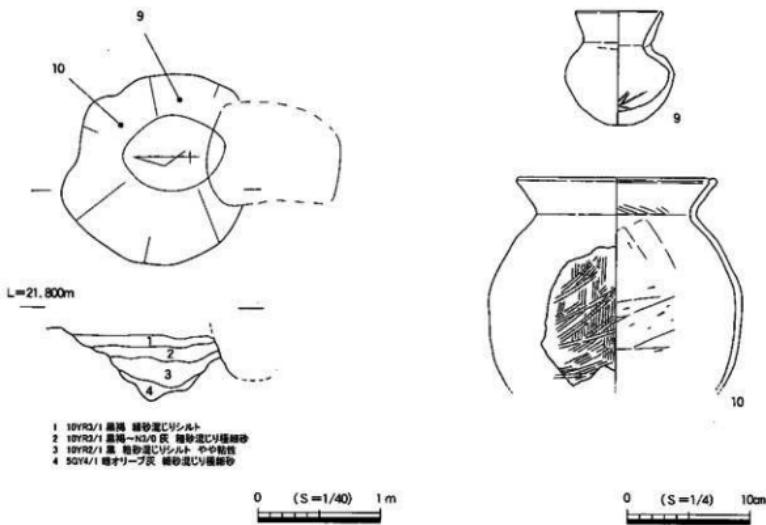
土坑としているが、平面形およびその規模・断面形および掘削深度や、残存率の高い遺物がまとまって出土するなど、後述するSE101と共通する部分が多い。したがって、これら土坑も井戸跡である可能性が高いと考える。いずれも溝跡(SD102・105)が埋没した後に、それぞれの溝跡を切り込んで掘り込まっている。

II区北側では、伏流水の痕跡を確認している(第31図参照)。この伏流水の標高は、検出された各土坑・井戸跡の掘削深度とほぼ同じか、やや上に位置しており、調査地近辺の地下水位の高さを示唆していると考えられる。これら土坑が井戸跡であることを想定できるならば、井戸跡の廃絶時には土器をまとめて投棄するという行為が通常化していた状況が読み取れる。

なお、各土坑の掘削時にも湧水が顕著であったため、土層断面図が不完全となってしまったことを断っておく。特に、SK102は、調査時にはSD102であると認識したため、この土坑より出土した遺物がSD102出土遺物と混入している可能性が高い。

出土遺物は、SK101より1点(4)、SK103より2点を図示した(2・6)。なお、SK103より出土した土師器甕の破片(10)は、SE101出土のものと接合したため、SE101にて報告している。4は香東川下流域産(下川津B類)の高杯である。摩滅が著しいが、内面には分割ヘラミガキが施されていたとみてよい。シャモットと思われる幅2～4mm程度の褐色粒を多く含む。2は土師器小形丸底壺である。白色～にぶい橙色を呈する。6は土師器甕である。白色～淡い橙色を呈する。胴部の断面には薄い黒化層が認められる。10と同一個体の可能性を考慮すべきだが、口縁端部の形状や、口縁部の厚みおよび長さにおいてやや違和感を覚える。

上記出土遺物のうち、4は弥生時代後期中葉頃、2・6は古墳時代前期後葉(布留式中～新相)に消費された遺物である。ただし、4を出土したSK101は、弥生時代後期後葉に埋没したと考えられるSD102を切り込んでいる。よって、4は混入したものと考え、SK101の主たる存続時期を弥生時代終末期と仮定しておく。また、SK102より出土した可能性が高い遺物(第39図27～29、第40図30～35)は、弥生時代終末期のものであり、この頃に廃絶したものと考える。SK103は上記出土遺物にしたがって、古墳時代前期後葉に廃絶したものと考えられる。



第37図 SE101平面図・断面図及び出土遺物実測図

井戸跡（第37図）

井戸跡である可能性が高い遺構として、SE101を検出した。また、前述の通り、各土坑も井戸跡である可能性が高い。各土坑と同様、湧水が著しかったため、底付近の掘り方の形状は不確かなものである。

出土遺物は2点を図示した（9・10）。このうち、10はSK103出土遺物と接合している。9は土器小形丸底壺である。にぶい橙色を呈する。内外面ともに摩滅が著しい。10は土器壺で、白色を呈する。口縁端部内側の肥厚は、ヘラ状工具を押し当てることで成形している。

上記出土遺物は、古墳時代前期後葉（布留式中～新相）に消費された遺物である。したがって、SE101は、この時期に廃絶したものと考えられる。

溝跡

SD101・102・104・106（第38～40図）

I区西側で検出された南北方向の溝跡群である。特筆すべきはSD102で、他のものより現存深度が深く、かつ、断面形が箱形もしくは逆台形を呈する。ただし、このような状況は全検出部分の北半部においてであり、南半部は他の溝跡と近い状況を呈している。したがって、他の溝跡についても、調査区外の部分で上記のような断面形を呈している可能性がある。

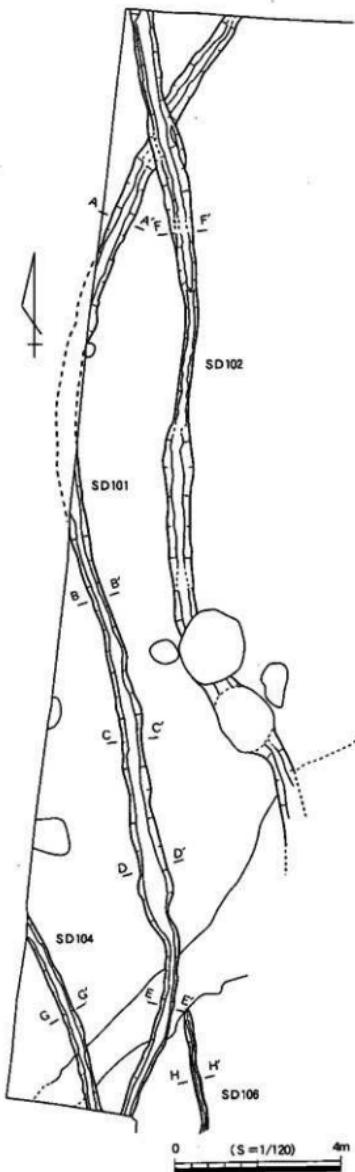
出土遺物は、SD101より2点、SD102より30点を図示した（第39・40図）。ただし、先述の通り、SD102出土遺物の中には、SK102出土のものが確実に混入している。このうち、残存率の高い高杯（27～29）は、SK102の位置にて、SD102の現存深度よりさらに深い位置よりまとめて出土している。つまり、SK102の底付近より出土したものであり、SK102出土遺物と断定できる。また、27～29に本来伴っていたと考えられる高杯脚部のうち31・32は、SK102およびその近辺で出土

していることから、SK102出土遺物である可能性が高い。一方、同じく残存率の高い小形鉢（37・38）は、SD101との交差地点のやや南側で出土しており、SK102出土遺物混入品と確実に区別されるものである。斐17～20も小形鉢37・38付近で出土していることから、同様のことが言えよう。

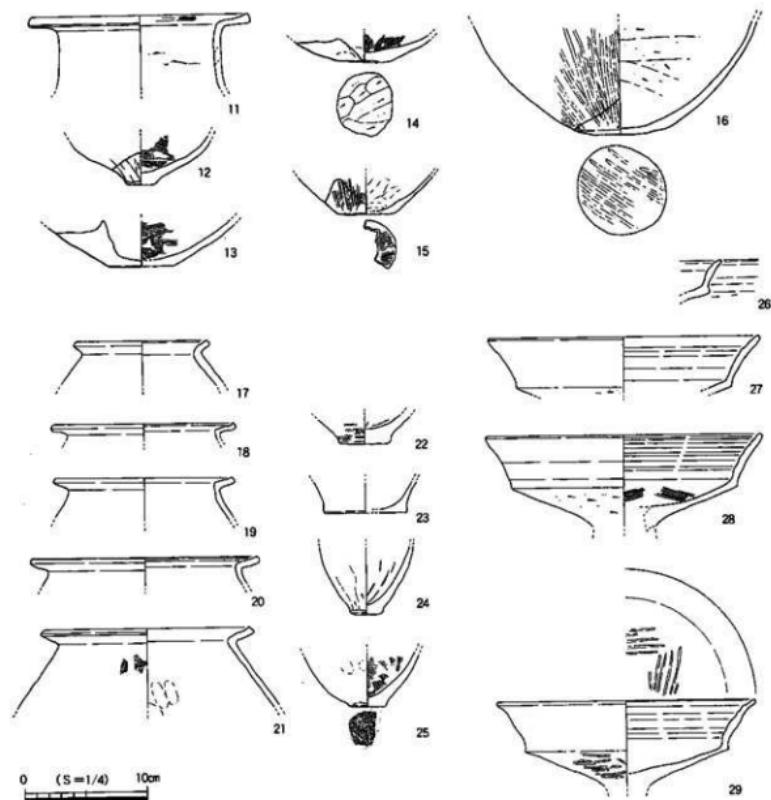
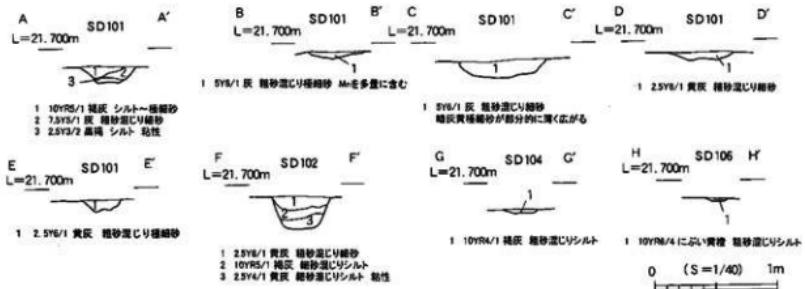
11は弥生土器壺の口頸部、13・14・16は底部および体部である。このうち、11は香東川下流域産（下川津B類）であり、16もその可能性がある。13・14は白色～淡い橙色を呈するものである。14の断面には薄い黒化層が認められる。17～21は弥生土器壺の口縁部および胴部、15・23・24は底部および胴部である。これらのうち、15、18～21は香東川下流域産であり、断面に黒化層は認められない。一方、17は白色～淡い橙色を呈するものであり、断面にはかなり薄い黒化層が認められる。26～29は弥生土器高杯の杯部、30～35は脚部である。いずれも香東川下流域産のものである。胎土中にはシャモットの可能性のある幅1～3mm程度の褐色粒が散見される。12・22・25・37・38は弥生土器小形鉢である。ただし、22・25がやや小形の甕である可能性を否定するものではない。このうち、底部が突出しているもの（12・22・25）は淡い橙色を呈し、突出しないもの（37・38）はにぶい白色～橙色を呈する。黒化層は12・25・38に認められる。なお、37の外面に認められる黒斑はかなり薄くなってしまっており、消失しかかっている状況である。39は鉢である。内面はにぶい白色、外表面は橙色を呈する。36は小形丸底壺である。にぶい白色～橙色を呈する。

40はSD101出土、サヌカイト製の石鏃未製品である。素材の背面側には自然面を、腹面側にはポジティブな剥離面を多く残す。41はSD101出土、サヌカイト製の楔形石器である。下端部には複数の階段状剥離痕が認められ、正面と背面には剪断面が認められる。42はSD102出土、サヌカイト製の楔形石器の削片である。上・下両端部には複数の階段状剥離痕が認められる。

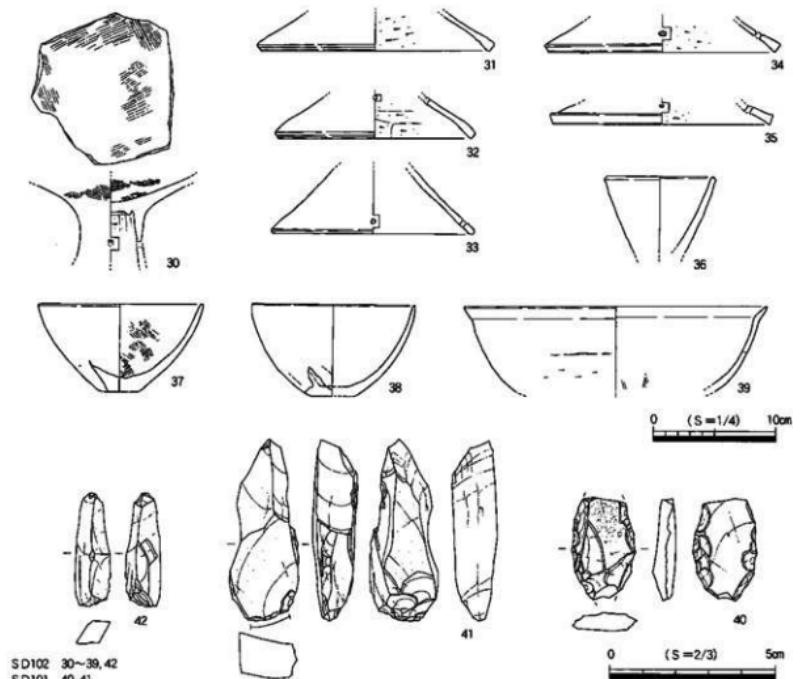
上記出土遺物のうち、SK102出土遺物とみられ



第38図 SD101・102・104・106平面図



第39図 SD101・102・104・106断面図及びSD102出土遺物実測図①



第40図 SD102出土遺物実測図②及びSD101出土石器実測図

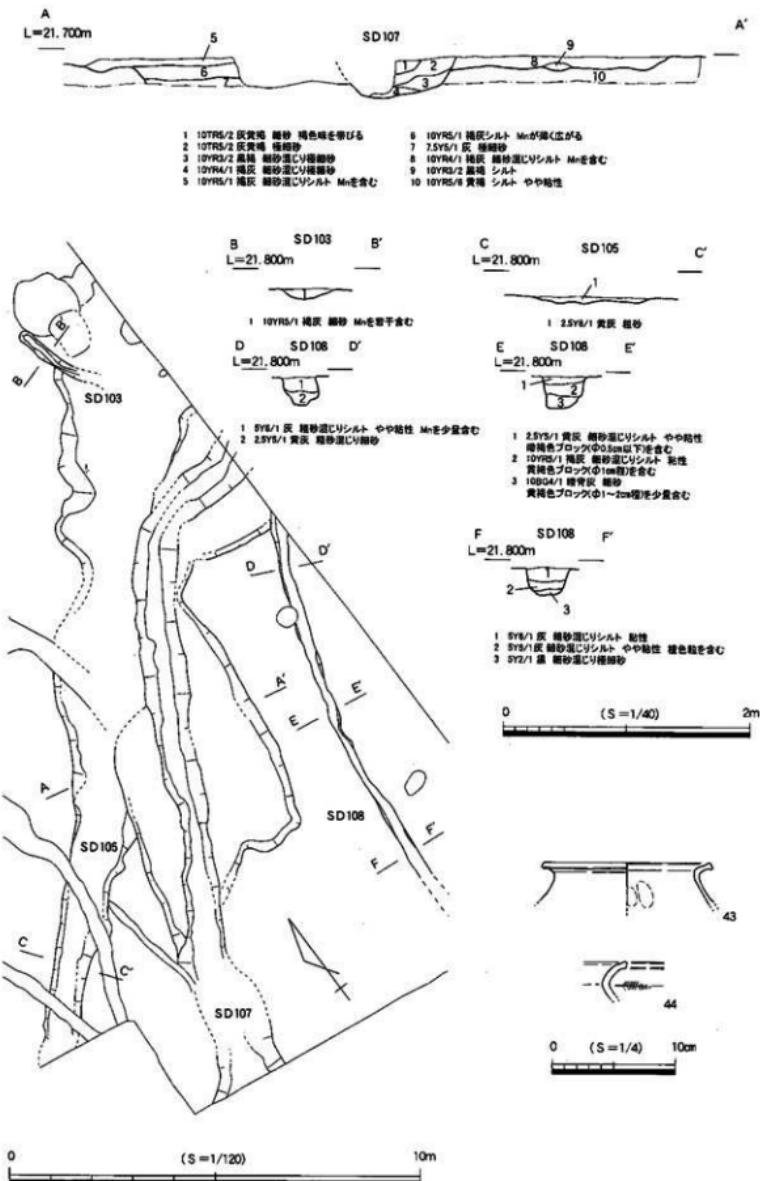
る27~29は弥生時代終末期、SD102より確実に出土している37・38は弥生時代後期後葉に消費された遺物であり、廃絶時期を示すものと考える。また、SD101はSD102に先行することから、弥生時代後期中葉頃に機能および廃絶したものと仮定しておく。

SD103・105・107・108 (第41図)

I区東南側で検出された溝跡群である。このうち、SD108は先述したSD102と同様、断面形が箱形もしくは逆台形を呈するものであり、部分的には土圧のためにオーバーハングしている箇所も見られる。遺物は出土しなかったが、SD102と近い時期に、SD102と同様の機能を有していたものと想定できる。なお、SD108はII区で検出されたSD203に続いている可能性が高い。

SD105は切り合い関係から見て、I区で検出された溝跡の中では最も古い時期に形成されたものと考えられる。その大部分はSD107に付随する浅い落ち込みと同化しており、土層上の區別もほとんどつかない。SD107はこの浅い落ち込みを切り込んで掘削されている。断面形は逆台形を呈するが、埋土・規模からみてSD102・108とは区別されるべきものと考える。また、この状況から、本来SD105のような断面形皿形の溝跡を掘りなして、SD107が形成された可能性があげられる。

出土遺物はSD107およびSD107に付随する浅い落ち込みより、計2点を図示した。43は香東川下流域産の甕であり、浅い落ち込みより出土している。44はSD107より出土した弥生土器甕であり、白色～淡い橙色を呈する。



第41図 SD103・105・107・108平面図・断面図及びSD107出土遺物実測図

上記出土遺物はいずれも破片で、かつ、出土点数も少ないので、SD107の厳密な時期比定の根拠とするのはやや困難であると考える。周辺の状況からみて、弥生時代後期後葉～古墳時代前期の時間幅の中で、機能および廃絶したものと仮定しておく。また、SD105からは時期を示す遺物は出土していないが、切り合い関係を考慮して弥生時代後期中葉以前に機能していたものと推定する。SD108は、SD102と同様の機能が想定されることから、弥生時代後期後葉およびその前後に機能していたものと推定する。

SD201～203（第42図）

いずれも削平を受け、現存深度が浅く、遺物出土量も極わずかである。ただし、前述の通り、SD203はI区で検出された断面形箱形を呈するSD108につながるものと想定される。

出土遺物は3点を図示した。45は縁帶文土器で、縄文時代後期中葉のものである。周辺では黄褐色シルト層（基盤層）上面および層中より縄文土器が多数出土しており、混入したものとみなせる。49は弥生土器甕の底部かと思われる。

52はSD203出土、サヌカイト製の凹基式の石鏃である。

SD203は上記の状況から、弥生時代後期後葉およびその前後の時期幅で位置づけておく。SD201・202は厳密な時期比定が困難であるが、周辺の状況から弥生時代後期頃に機能および廃絶したものと仮定しておく。

SD205～207（第42図）

SD205より枝分かれして、SD206・207が派生する。SD206とSD207には時期差が想定されるが、SD205の部分において層上の区別はできなかった。なお、これらの溝跡は縄文時代後期の土器がまとまって出土した落ち込みを切り込んで形成されている。

出土遺物は、計7点を図示している。このうち、46～48は縄文後期の土器で、46は縁帶文土器、47は磨消縄文土器、48は刻目突帯文土器である。50は弥生時代前期の甕。これらは上記の落ち込みに伴う土器が混入したものとみなせる。51は須恵器杯蓋。外面では、ニス状の降灰による暗灰色を呈する部分と、重ね焼きによって露胎した白灰色を呈する部分がまだ認められる。

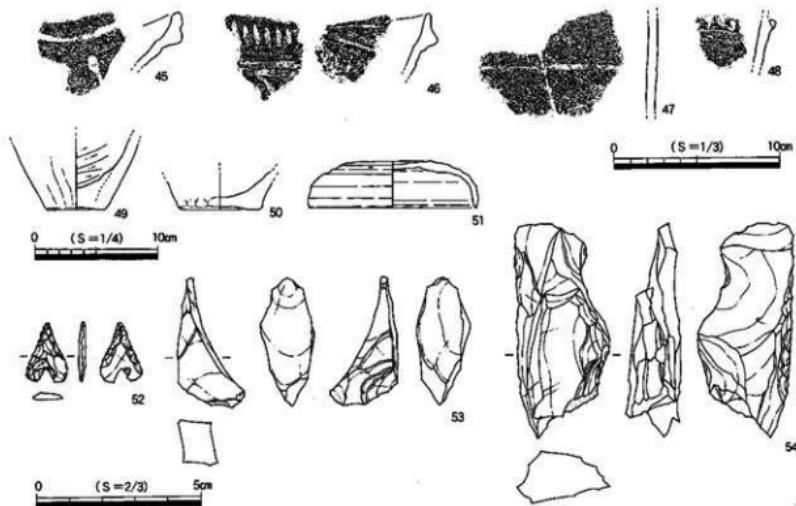
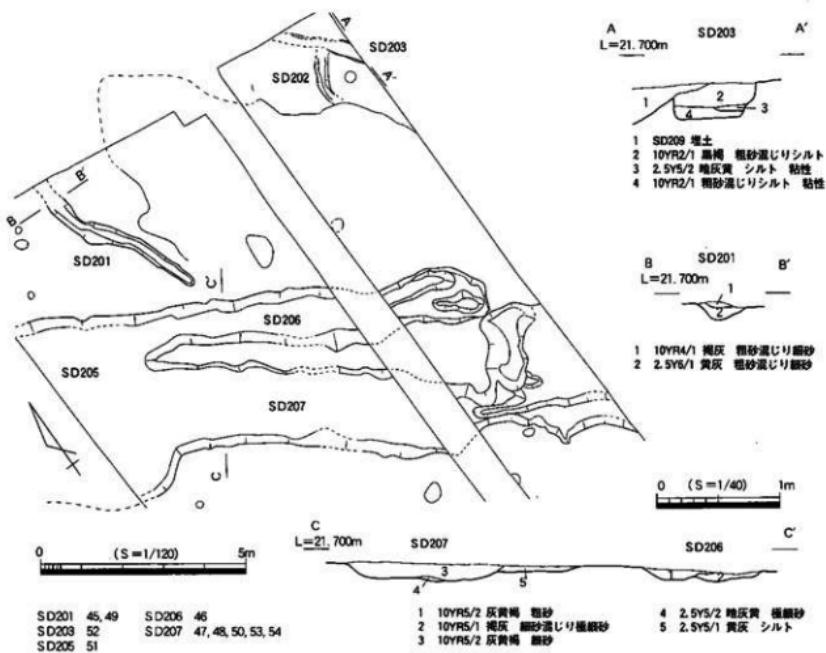
53はSD207出土、サヌカイト製の楔形石器の削片である。下端部には複数の階段状剥離痕が認められ、上端部からの加熱による剪断面が認められる。54はSD207出土、サヌカイト製の石核である。打面調整後不整形な横長状の剥片を剥離している。なお、側縁部には小刻みな直線状の調整が認められ、最終的には削器として転用したものと考えられる。

上記出土遺物のうち、51は6世紀末葉頃に消費された遺物である。しかし、同様の時期を示す資料が他にない。また、SD205～207とほぼ同じ方向で形成されているSD208～210においても、出土遺物が示す時期は弥生時代前期～中期である。したがって、51のみでSD205～207の時期を判定するには、なお問題が残ると考える。よって、これらの時期比定については今後の調査に委ねたい。

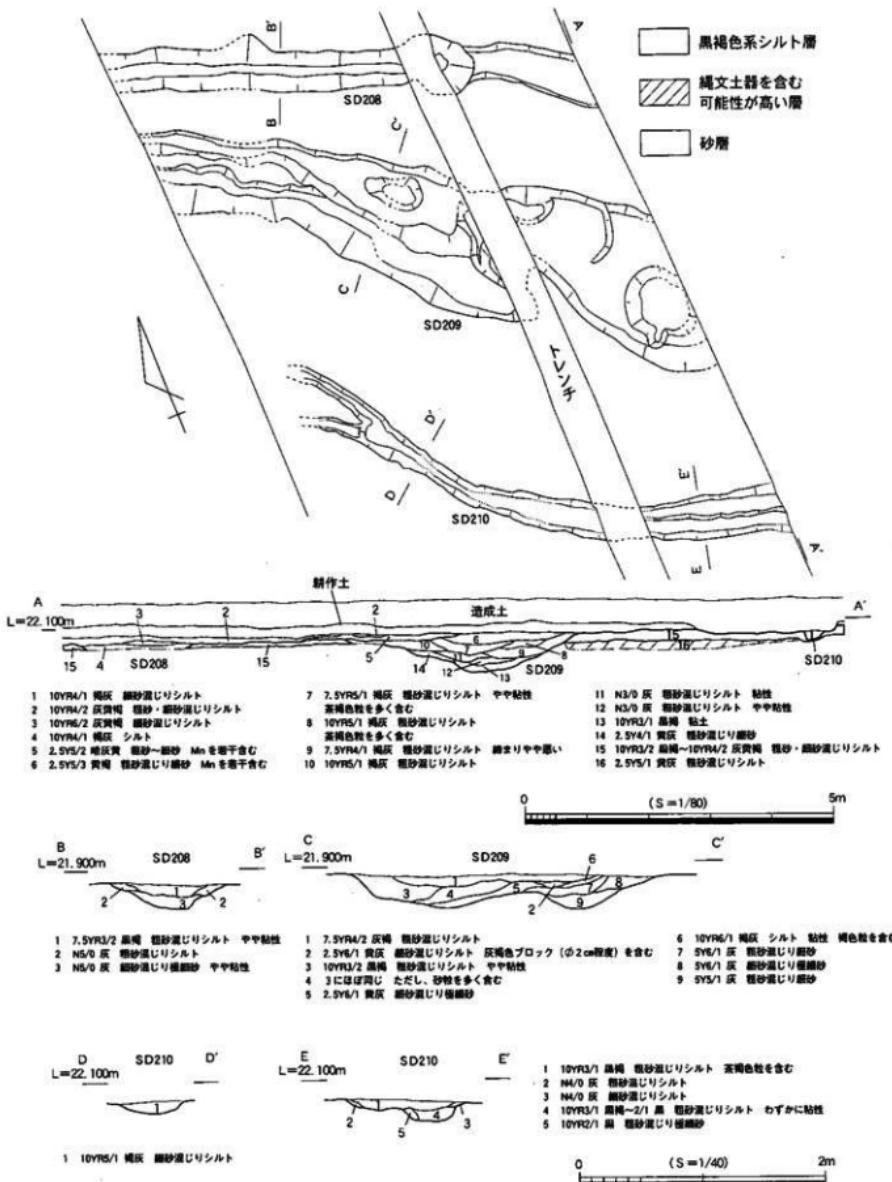
SD208～210（第43・44図）

SD205～210とほぼ同じ方向に形成された溝跡群である。このうち、SD209はかなり凹凸が著しいが、これは湧水によるものだと考えられる。SD208でもその可能性を示唆する深い落ち込みが1箇所確認されている。SD210は西端で二股に分かれしており、そこで極端に浅くなっている。

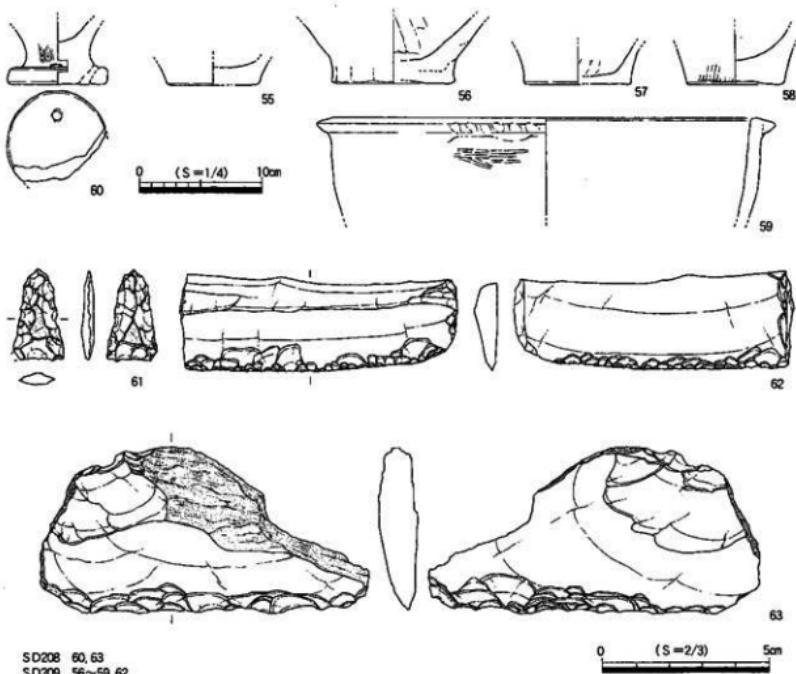
出土遺物は、9点を図示した。55～59は弥生土器甕の底部である。ただし、56は壺である可能性を否定しない。いずれも摩滅が著しいが、56については器表面の砂粒が沈んでいることから、ヘラ



第42図 SD 201～203・205～207平面図・断面図及び出土遺物実測図



第43図 SD208～210平面図・断面図



第44図 SD208~210出土遺物実測図

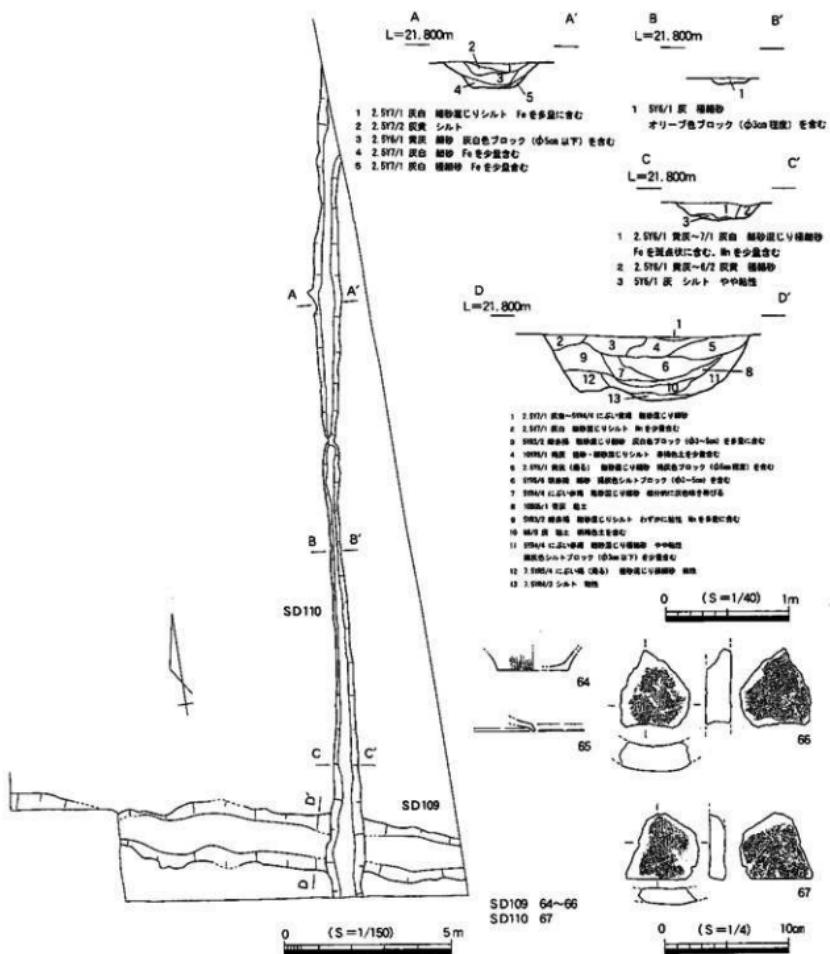
ミガキを施しているのは確実である。ただし、底部外面には施されていない。59は弥生土器甕もしくは鉢。口縁部端に貼り付けられた突帯の下側には、板状工具の先端が押圧されたような圧痕がある。おそらく、ヘラミガキの前に胴部外面に施されたタテハケの痕跡であろう。60は弥生土器甕もしくは鉢の底部かと思われる。底部は円盤状を呈し、穿孔しており、類例の少ない資料と考える。56同様、底部外面以外はヘラミガキを施しているものと考える。

61はSD210出土、サヌカイト製の平基式の石鏸である。62はSD209出土、サヌカイト製の削器である。横長状の剥片を素材に用い、刃部には表・裏両面より調整を施し、直線状で鋭いエッジを形成している。63はSD208出土、サヌカイト製の削器である。肉厚な横長状の剥片を素材に用い、刃部には表・裏両面より調整を施しているが比較的粗雑な階段状の剥離痕である。

上記出土遺物は、いずれも弥生時代前期～中期前葉の所産である。ただし、SD208～210の存続時期については、SD205～207同様、慎重に検討する必要があろう。

SD211（第58図）

調査時には明瞭に区別できなかったが、SX202を切り込んで形成されたものと考える。極めて浅く、遺物も出土しなかったため詳細は不明である。主軸はほぼ正方位となる。

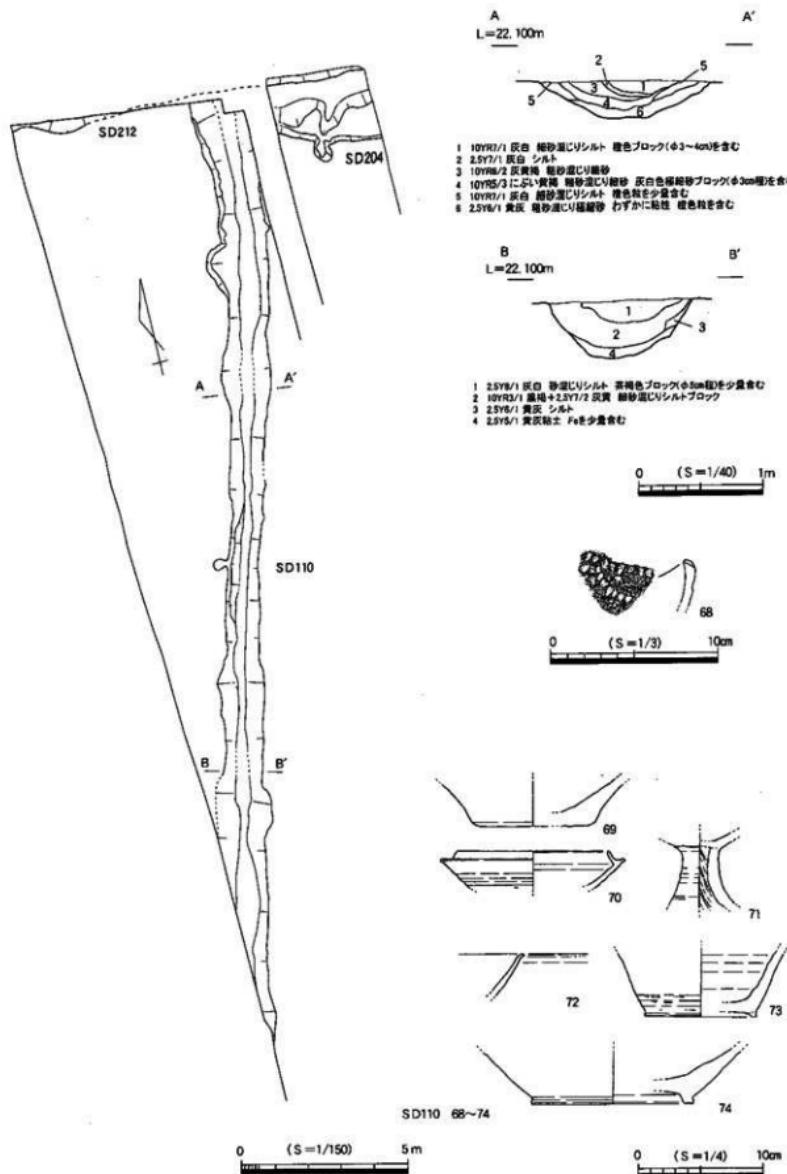


第45図 SD109・110平面図・断面図及び出土遺物実測図

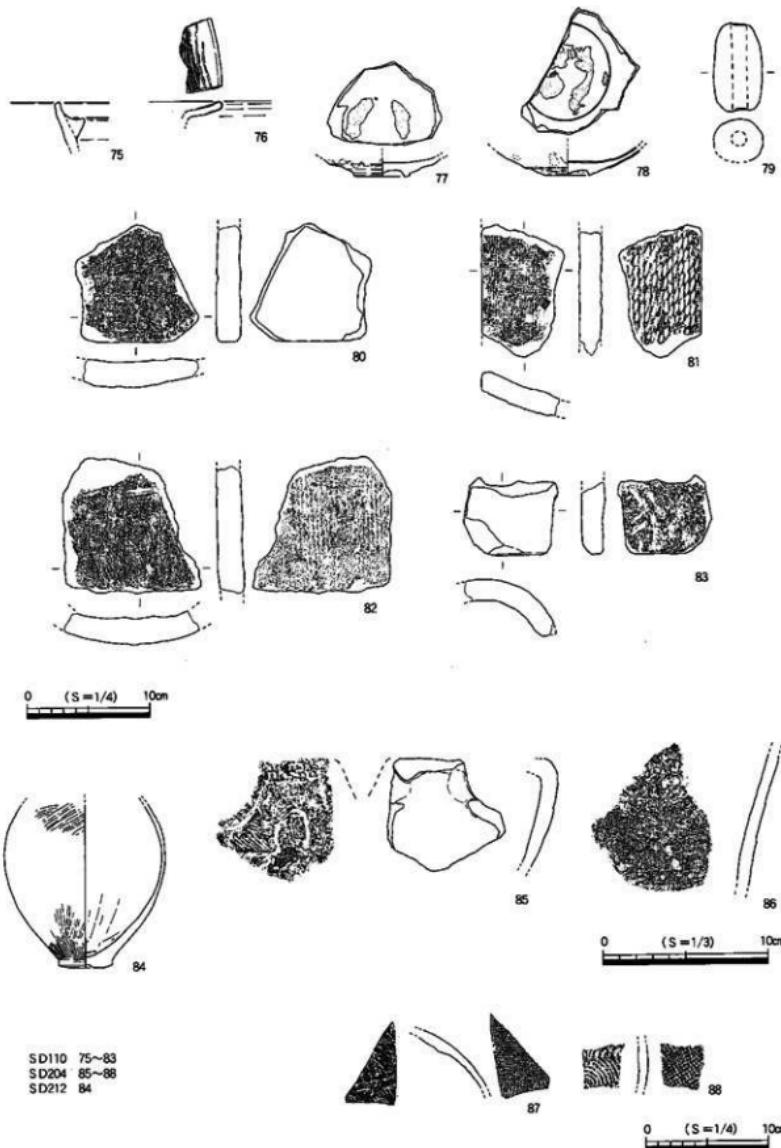
SD109・110・204・212 (第45~47図)

いわゆる条里溝である。東西溝であるSD109・212は現存する条里型地割の坪界線に一致している。一方、南北溝であるSD110は、今回の調査地より1町南で現存する南北方向の地割に一致している。ただ、当遺跡周辺では条里型地割の縦軸の復原自体が容易ではないため、SD110が条里型地割に一致するかどうかは、慎重に検討していく必要がある。

これらの先後関係については、SD109→SD110、SD204→SD212であることを切り合いから確



第46図 SD110・204・212平面図・断面図及び出土遺物実測図①



第47図 SD110・204・212出土遺物実測図②

認している。

出土遺物は、SD110出土のものを中心に21点を図示した。68・85・86は縄文時代後期の土器である。69は弥生土器壺の底部、64・84は弥生土器甕である。70は須恵器杯身、71は須恵器高杯。70が青灰色を呈する良好堅緻なものであるのに対して、71は灰白色を呈する焼成不良の軟質である。72は須恵器碗、73・74は須恵器壺の底部である。両者の断面には、赤みを帯びた胎土が、器表面側5mm程度の厚さで、層状に認められる。87・88は須恵器甕。75は土師器足釜の鉢部。76～78は陶器であり、このうち、77・78は肥前系の皿である。79は土師質の管状土錠。66・67、80～82は平瓦片、83は丸瓦片である。

これらの出土遺物のうち、77・78は17世紀前葉頃に消費された遺物であり、SD110の埋没時期を示唆しているものと考えられる。

また、SD109・110は、土層の観察より、最終的には意図的に埋められたことが確認できている。一方、掘削時期については、72～74が8世紀後半～9世紀頃に消費された遺物であり、可能性としてはこの時期に求められる。しかし、70・71などと同様、混入品である可能性も否定できない状況であり、なお慎重に検討しなければならない課題が多い。SD109・204・212についても、その存続時期を詳細に検討することは困難である。

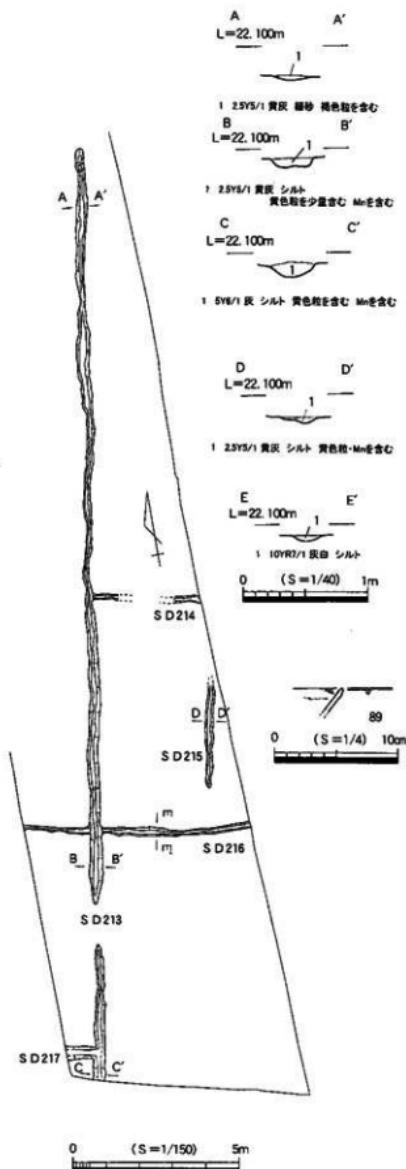
SD213～217（第48図）

前述の条里溝と同様、高松平野で通有の条里型地割とほぼ同じ主軸方位の溝跡群である。これらは現存深度が浅く、出土遺物もごく微量であるため、詳細は不明である。前述の条里溝との先後関係も明らかにできない。

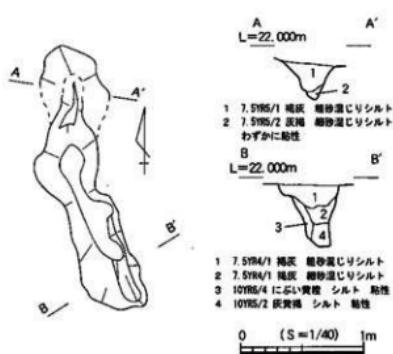
出土遺物は須恵器杯身の口縁部（89）を1点図示した。

性格不明遺構

不定形の土坑4基を性格不明遺構と位置づ



第48図 SD213～217平面図・断面図
及びSD213出土遺物実測図

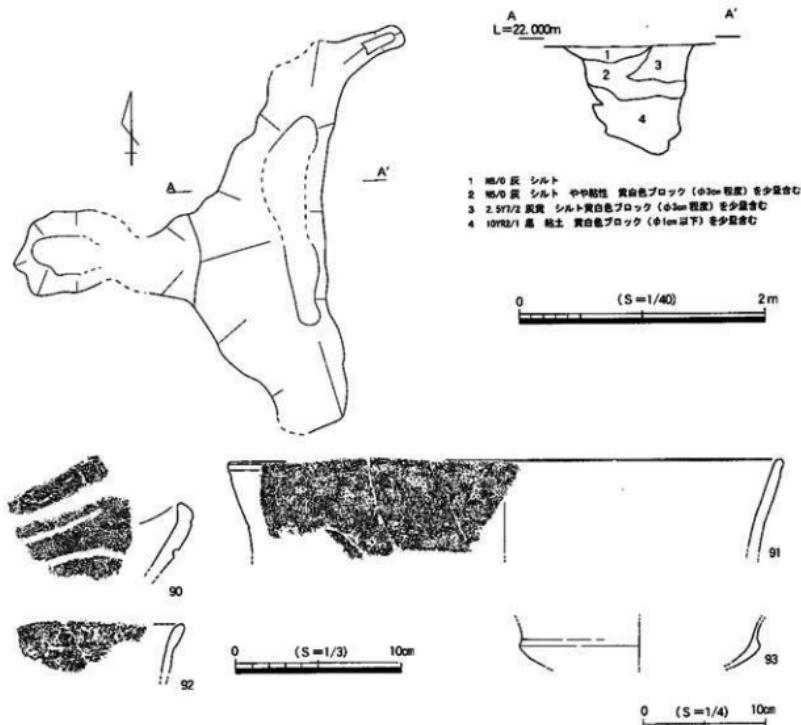


第49図 SX201平面図・断面図

けたが、その形状には人為的な意図が読み取れない。自然の營為によるもの、特に風倒木痕の可能性を想定している。これらのうち、SX202からは、縄文時代後期の土器とともに、多量の石器類が出土し、SX203からは、平縁無文深鉢が出土している(第57図)。したがって、これらは縄文時代後期頃に形成された風倒木痕であると位置づけておく。

SX202(第50～56図)

縄文時代後期の土器とともに、多量の石器が出土している。弥生時代後期前葉～中葉の高杯が1点出土しているが、これはSX202を切り込んで形成されたSD210に本来伴う遺物



第50図 SX202平面図・断面図及び出土遺物実測図

が、調査時に混入してしまったものと考えられる。ただし、縄文土器においても、90が磨消縄文土器であるのに対し、92の無文深鉢は、口縁部外面で段をなすことから、なつめの木式（津雲A式併行期）のものであり、やはり、時期差を有する。

SX202出土石器類（第54～56図）

SX202の遺構検出時及びトレレンチ掘削時に多数のサヌカイト製の剥片・碎片、器種不明石製品等が出土した。そのため剥片類が出土する1～3層までの上層部分に限り、土壤を水洗し可能な限り遺物を抽出することにした。その結果SX202からは、碎片・剥片が主であるが7,071点のサヌカイト製の石器類と器種不明石製品1点を抽出した。サヌカイト製石器類の詳細な内訳は第8表に示した。その内訳の中で約90%を占めているのが碎片・剥片類である。これらは石器製作時の石屑であり、石器製作後に不要な石屑をこの遺構に廃棄した可能性が高い。出土した剥片については、第51図に長・幅比と数量についてまとめた。なお、碎片と剥片の区分は1.0cmを基準とし、1.0cm以下を碎片、以上を剥片に分類した。剥片の傾向としては、長さでは1.0～2.0cm、幅では0.5～1.5cm位の剥片が最も多く、出土した石器類同様に小ぶりである。石器では石鏃と楔形石器に係わる資料が主体を占めている。これらの遺物は洗净後に接合関係を検討した結果、楔形石器等の資料で数点の接合関係を摺む事ができた。そのため、比較的一括りの高い資料と考えられる。なお、素材となるサヌカイトには、著しく風化したサヌカイト（サヌカイトB）が5%程度含まれる。この違いはサヌカイトの原産地の相違を示すものと考えられる。

94～113は石鏃である。石鏃は24点出土し20点を風化した。出土した石鏃は比較的小型で、形態上では平基式のものが主であるが、細分すれば数種類に分けられる。また、24点の石鏃の中で11点は、先端部等を欠く欠損品である。なお、112・113は器面調整が粗い点より未製品の可能性がある。

114は上半部を欠く打製石斧である。先端部には刻線状の使用痕、側縁部にはマメツ痕を残す。

115・116は剪断面が認められないため、楔形石器の素材に分類した。117～127は楔形石器である。楔形石器は合計13点出土し11点を風化した。形態的に

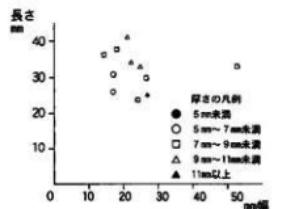
第8表 SX202出土サヌカイト製石器類組成表

器種	サヌカイトA	サヌカイトB	備考
打製石斧	1		欠損
石鏃	24	1	欠損11点
石鏃未製品		1	
楔形石器	13		接合資料あり
楔形石器の薬材	2		
楔形石器の削片	17		接合資料あり
二次加工ある剥片	7		
剥片	631	53	
碎片	6,019	302	長・幅1cm以下
計	6,714	357	7,071

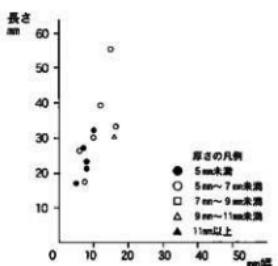
*サヌカイトBとは風化の著しいサヌカイトを指す



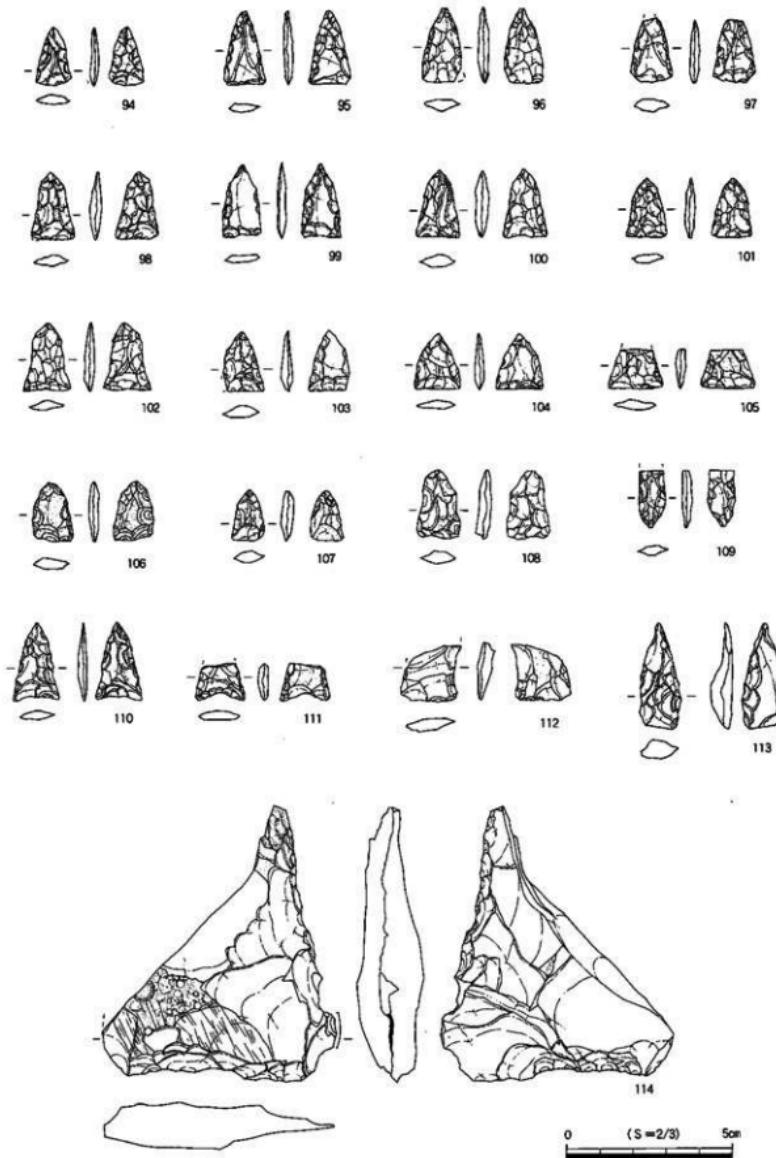
第51図 SX202出土剥片 長・幅比率



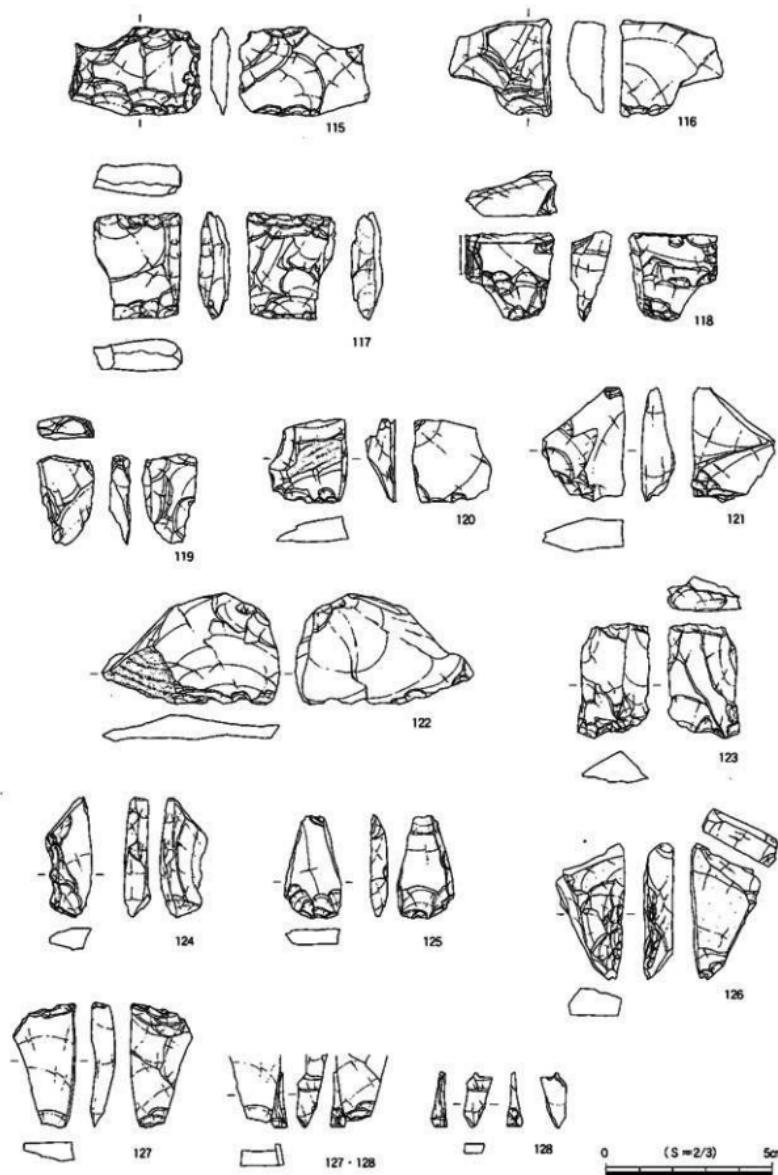
第52図 SX202出土楔形石器 長・幅比率



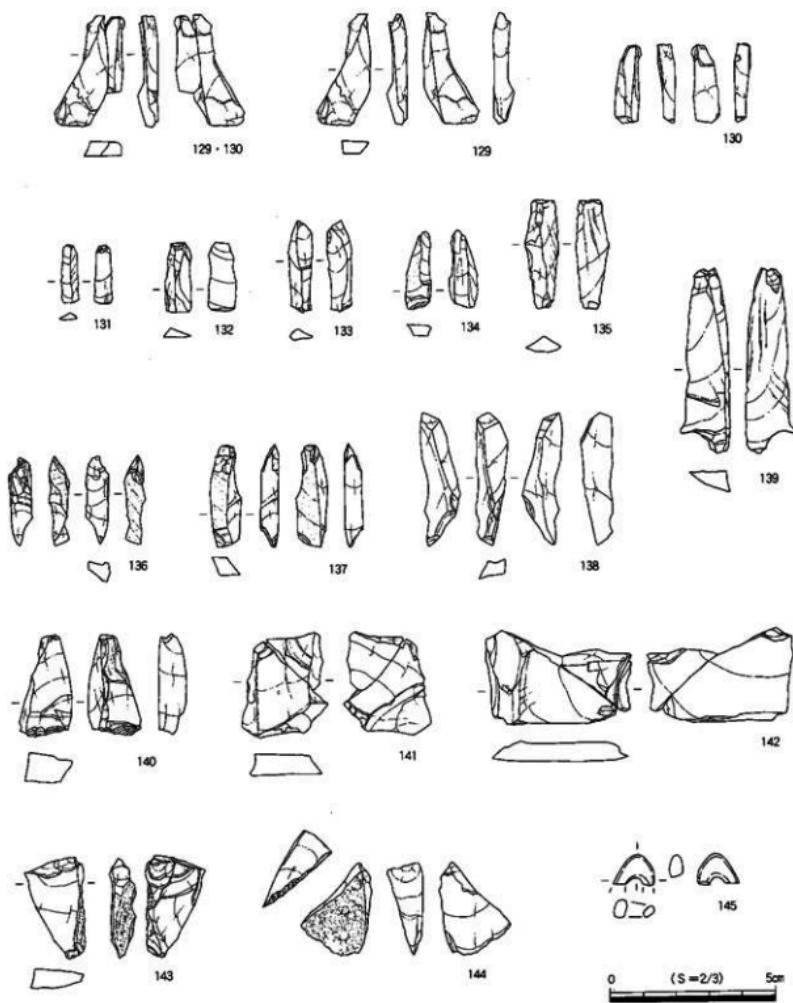
第53図 SX202出土楔形石器の削片 長・幅比率



第54図 SX202出土石器実測図①

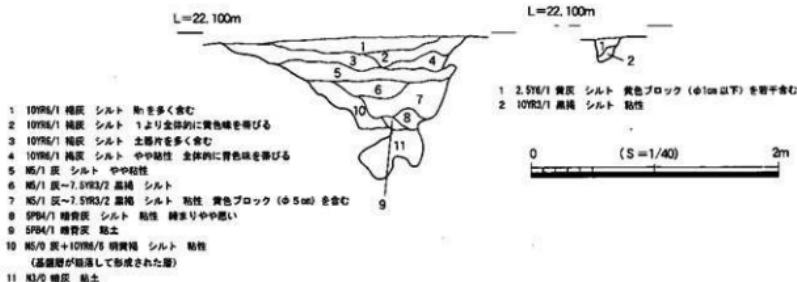
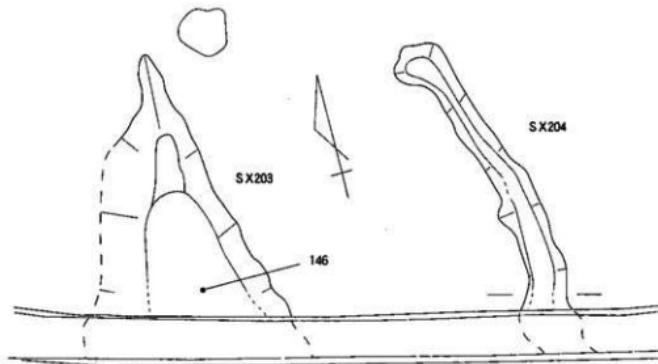


第55図 SX202出土石器実測図②



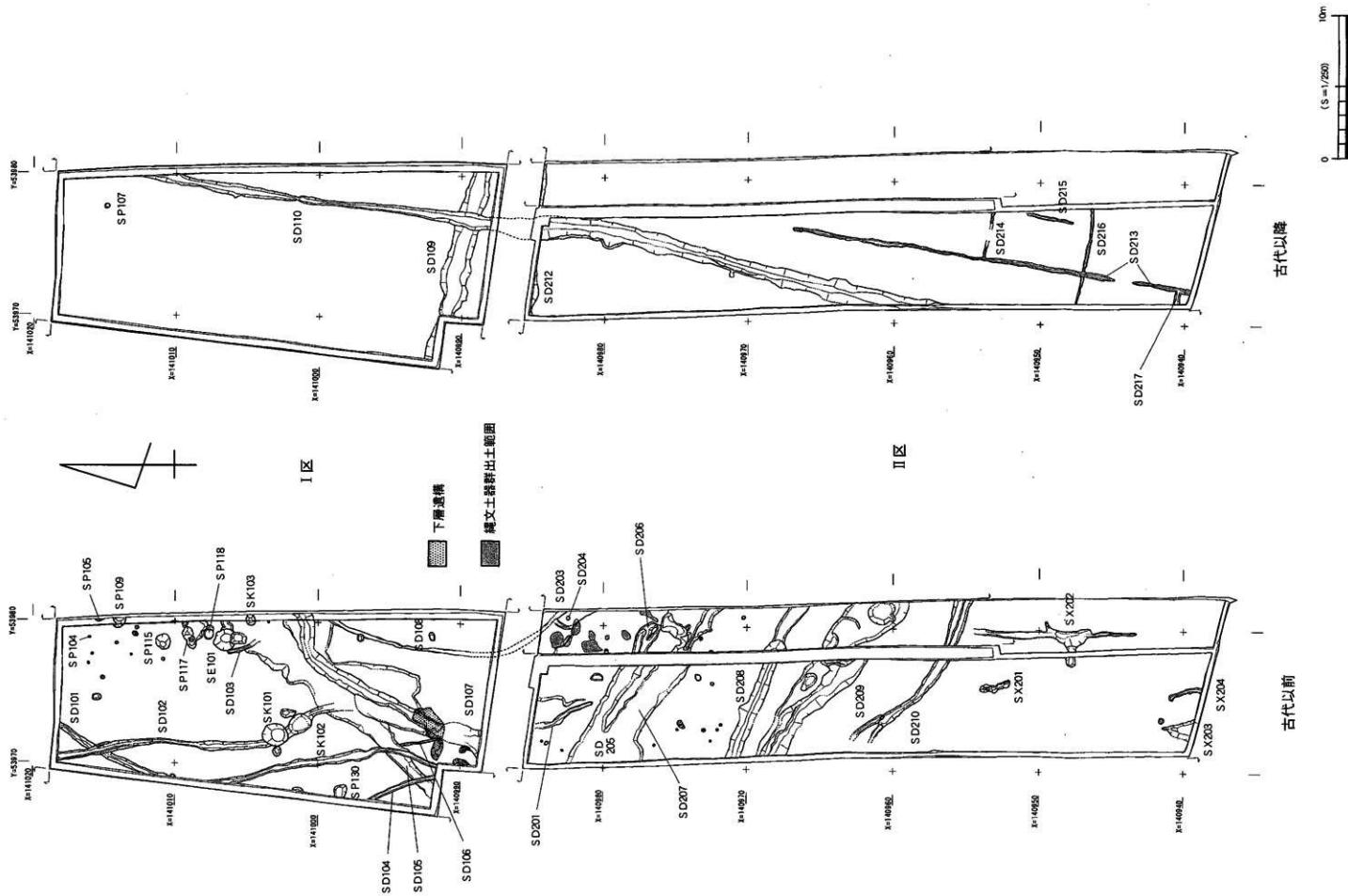
第56図 SX202出土石器実測図③

は小型のものが多く、長・幅3.0~2.5cm前後が主体を占める。117は上・下両端部に複数の階段状剥離痕が認められ、左・右両端部には上・下2方向からの剪断面が認められる。119~123・125は下端部に複数の階段状剥離痕が認められる楔形石器である。118・124は下端部と背縁部に複数の階段状剥離痕が認められる楔形石器である。126は剪断面が2つの短辺に認められる楔形石器である。127



第57図 S X203・204平面図・断面図及びS X203出土遺物実測図

第58図 川島本町遺跡遺構配置図



・128は楔形石器と楔形石器の削片の接合資料である。127は上・下両端部に複数の階段状剥離痕が認められる楔形石器である。128は上端部が欠損した楔形石器の削片である。両者を比較して剥離の順番を考えれば、127の上端からの加圧により128が剥離されるのであるが、その際に上・下2つに割れる。また127の側面部はその衝撃で、下端部からの加圧により剥離したようである。129～140は楔形石器の削片である。楔形石器の削片は合計17点出土して12点図化した。長さは1.7～3.9cm、幅は0.5～1.65cmのバラツキが認められる。129・130は楔形石器の削片どうしの接合資料である。129の下半部は肥厚し、下端部は下方からの加圧による剥離痕が認められる。130は129より先行する加圧により剥離した削片である。下半部はその際の加圧により欠損している。この接合資料は上方からの連続する加圧により剥離した事を示す良資料である。

141～143は二次加工ある剥片である。144は剥片に分類したが、分割面を見る限り端部からの長軸線にそう剪断面状の剥離痕が認められる。そのため楔形石器として分類する考え方もある。

145は装身具の一種と考えられる器種不明の石製品である。全長1.0cm前後の磨製の石製品で、穿孔を施している。穿孔部は約1/2を残し、径は0.5cmを測る。なお、穿孔は表・裏2方向から穿たれている。

包含層出土遺物

縄文土器群（第59～61図）

II区の北東部では、浅く緩やかな落ち込みが認められ、この上面より縄文時代後期の土器がまとまって出土した（第60・61図）。このうち、155の文様構成は中津式に近いが、縄文部は反転している（福田K II式）。153も、文様構成は中津式のものに近いが、沈線が交わらずに途切れ终わる部分が認められ、後出的な要素をもっている。このほか、161は福田K II式のものであり、158も沈線の間隔が狭いことから、福田K II式である可能性が高い。したがって、これらの土器群は、中津式を主体としながらも、福田K II式のものまで含まれていると考えられる。

一方、施文の有無と器形の対応関係でみると、概ね、有文の場合は波状口縁を呈し、口縁部を肥厚させるものが多いのに対して、無文の場合は、平縁のものが多い。ただし、例外も確実に存在しており、156は無文でありながら波状口縁を呈し、157は有文でありながら平縁である。また、無文深鉢の口縁部は、有文のものと同様、口縁部を肥厚させるものが一定量確認される。

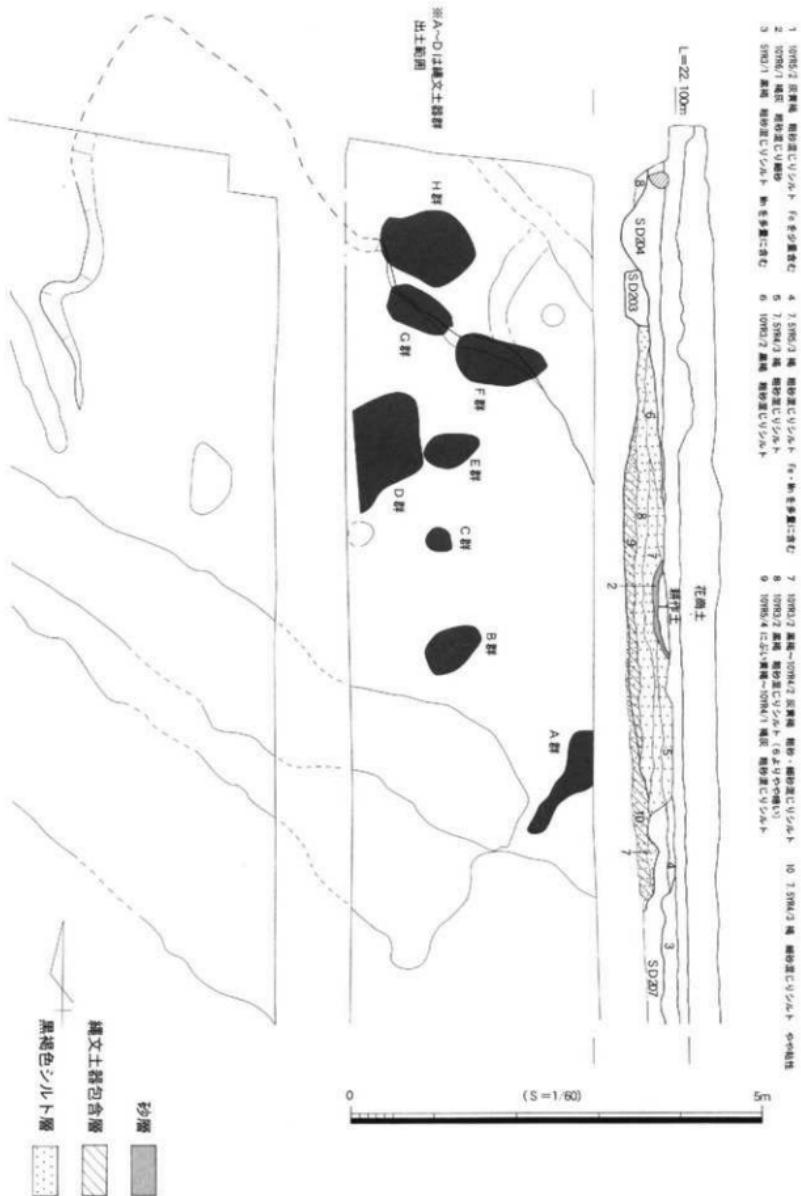
いずれも、破片であるため、文様構成は詳らかではないが、中津式あるいは福田K II式の文様構成を大きく逸脱しないものと考える。ただし、166は縦長の波状文を呈しており、異質である。磨消縄文ではあるが、沈線がやや太いことも含めて、沈線文土器との関連を想定すべきかと考える。167も、文様構成は中津式の範疇で捉えられるが、沈線の太さから同様のことが言える。

なお、これらとともに出土した底部（175～180）は、本来、上記の深鉢に伴うものと考えられるが、周辺ではわずかながらに弥生時代前期の土器も確認されており、考慮しておく必要がある。

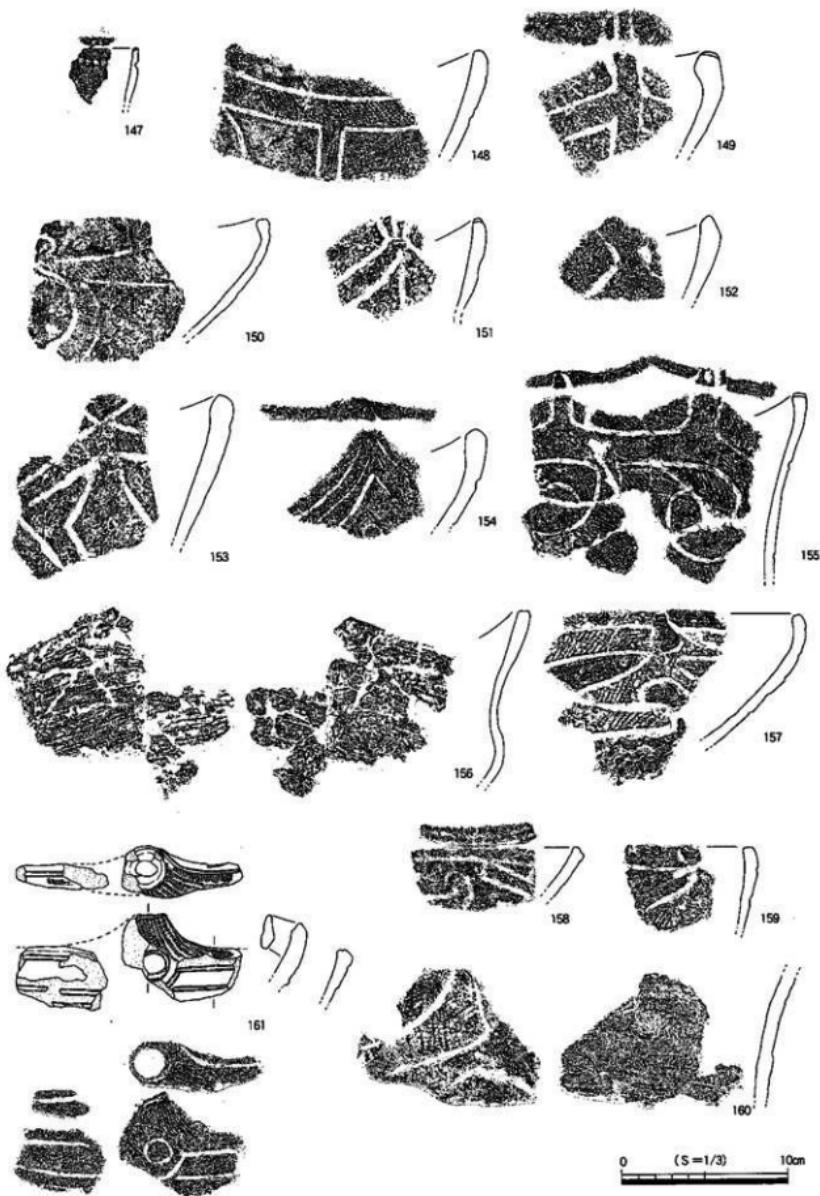
包含層より出土したその他の遺物（第62図）

前述の縄文土器群のほか、23点を図示した。いずれも、遺構より出土した遺物との大差はない。また、石器類のうち198～202は、前述の縄文土器群と同位置から出土しており、本来縄文土器群に伴うものであった可能性が高い。

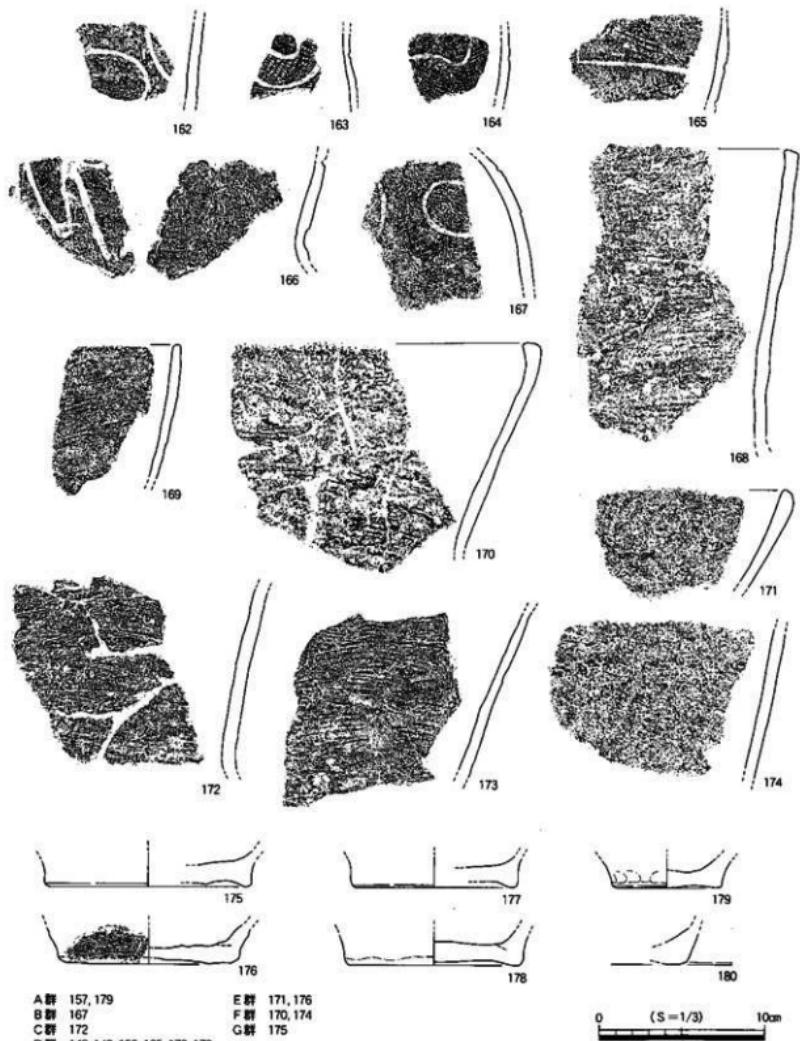
197～203はII区の包含層から出土した石器類である。197はサヌカイト製の石鏃である。縄文時代の石鏃の形状を呈する。198はサヌカイト製の石鏃未製品である。表・裏面に素材面を残してはい



第59図 縄文土器群出土位置図

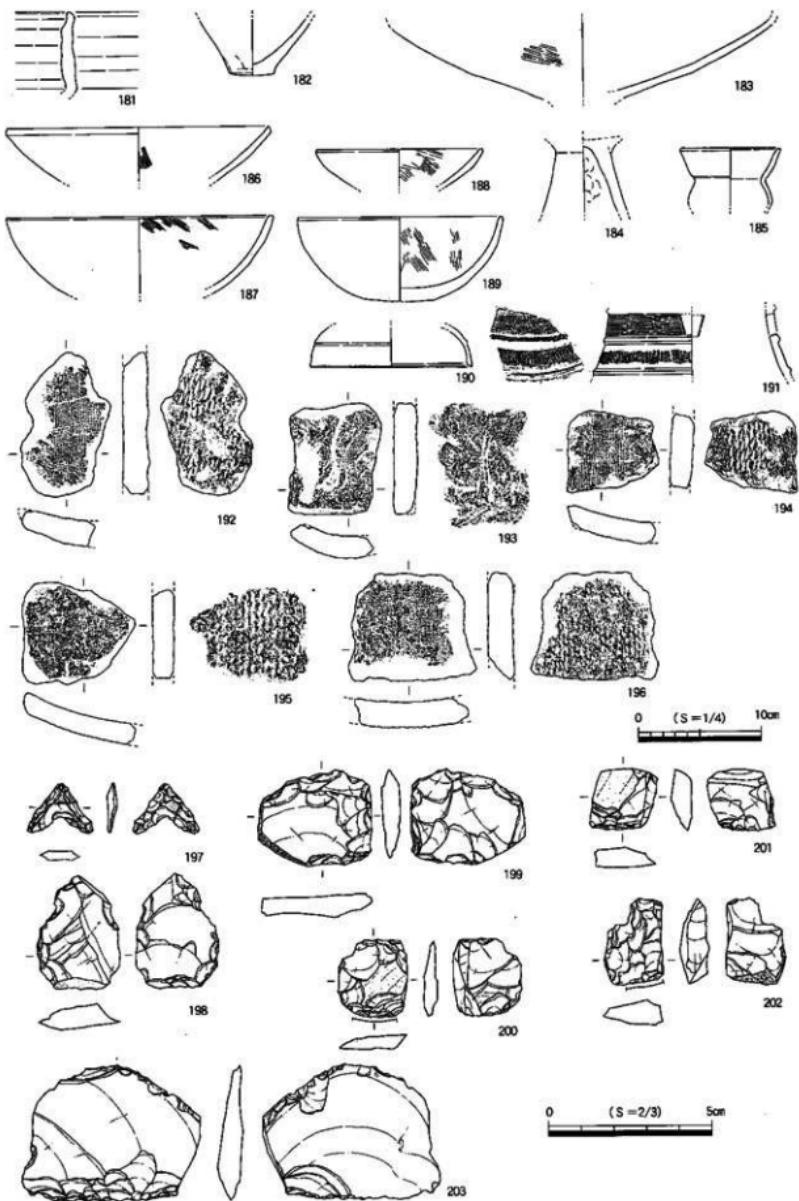


第60図 桶文土器群出土遺物実測図①



第61図 繩文土器群出土遺物実測図②

るが、両側縁部に調整を施している。199はサヌカイト製の楔形石器の素材である。側縁部3辺に階段状剥離痕が認められる。200～202はサヌカイト製の楔形石器である。側縁部に複数の階段状剥離痕、短辺に剪断面が認められる。203はサヌカイト製の削器である。上・下両側縁に調整を施し、刃部を形成している。



第62図 包含層出土遺物実測図

第IV章 川島本町南遺跡の調査成果

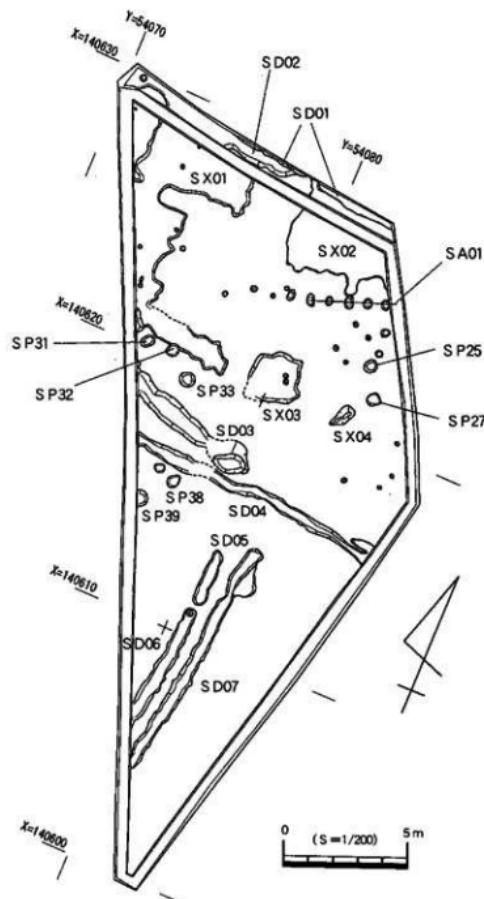
第1節 概要

耕作跡とそれに付随すると見られる溝跡を検出した。これらの時期を示す遺物は出土していないが、埋土の特徴からみて近世の所産と考えられる。ただし、これらには、高松平野の条里型地割に沿うものと、沿わないものの二者があり、時期差が存在することがうかがえる。また、黒褐色シルトを埋土とする柱穴を2基確認している。包含層中からは、弥生時代～古墳時代の遺物が出土しており、柱穴2基はこの時期の所産であると考えられる。また、メノウ製の勾玉が出土している。

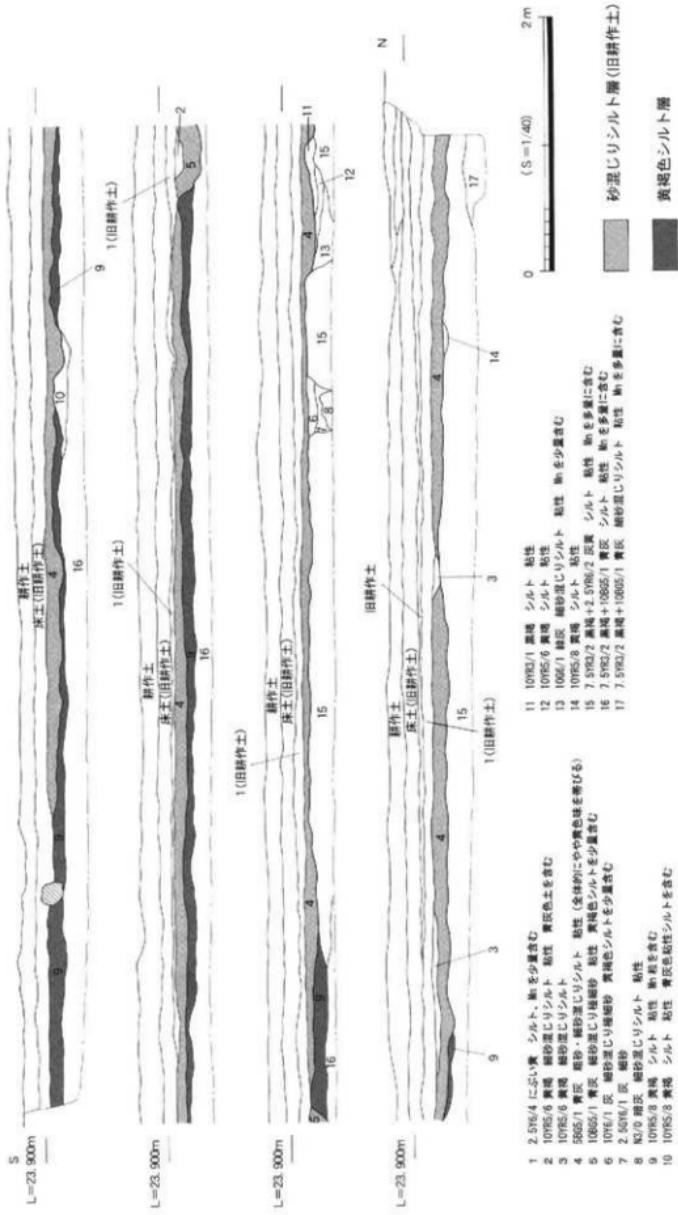
第2節 基本層序

調査前まで使用されていた耕作土および床土を除去すると、青灰～白灰色を呈する砂混じりシルト層が調査区のほぼ全体を覆って堆積する。この層も旧耕作土層であるが、今回検出したほとんどの遺構は、この層を埋土としている。ただし、遺構の埋土である場合、この層は厳密には2層に細分できる。すなわち、遺構の掘形を覆うように橙色を呈するシルトが薄く堆積し、その上層で青灰～白灰色を呈する砂層が堆積する。

この層の直下には黄褐色シルト層が堆積しており、基盤層となっている。ただこの層は決して厚くはなく、その直下には砂層が厚く広がっていることから、不安定な土地条件であろう。ただし、遺構の現存深度が極めて浅いことから、この基盤層はかなり削平を受けていることを考慮しなければならない。

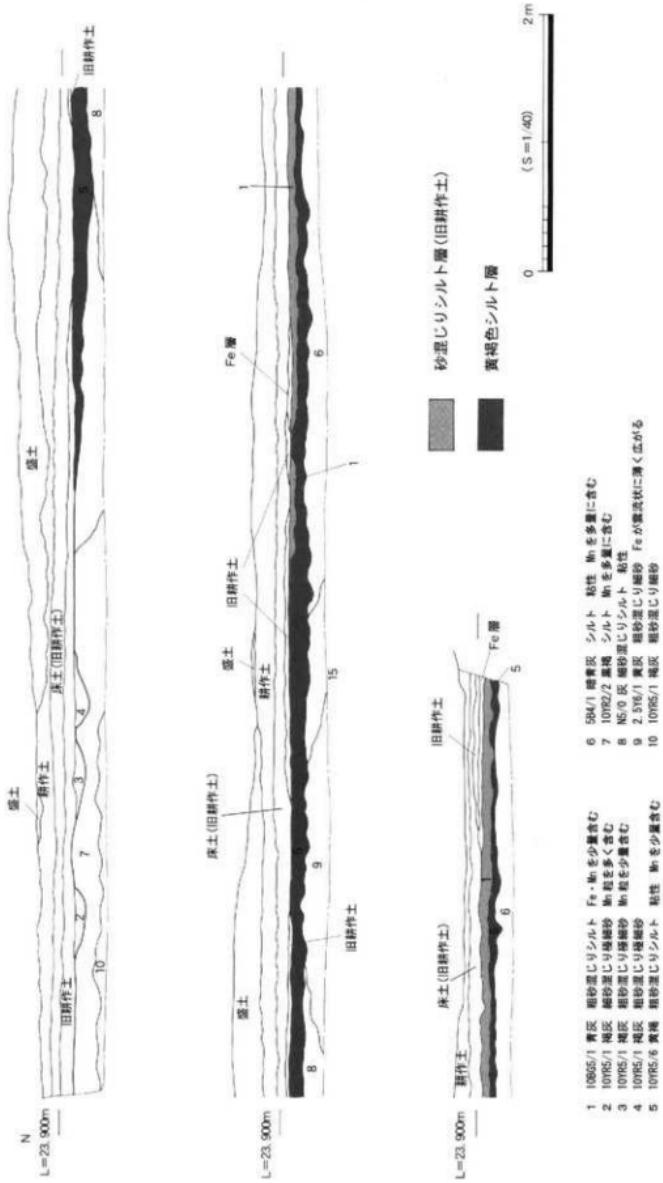


第63図 川島本町南遺跡遺構配置図



第64図 西壁土層断面図

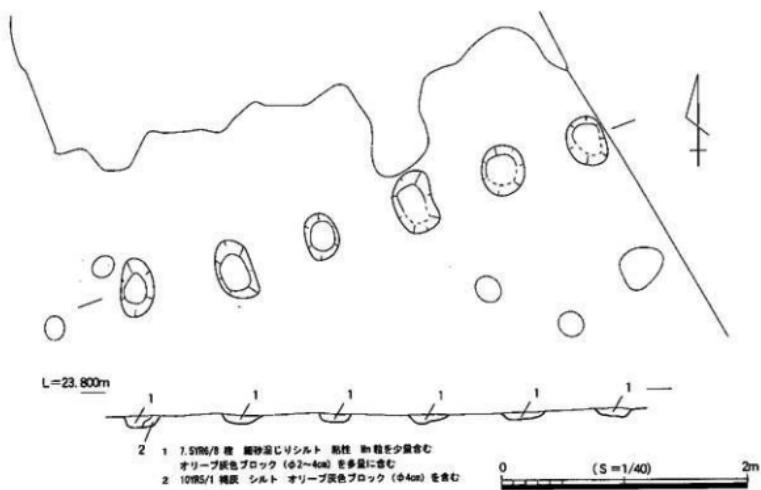
第65図 東南壁土層断面図



第3節 検出遺構・出土遺物

柵列跡（第66図）

調査区の北東側で検出された。埋土は橙色シルトの上面に砂層が薄く堆積したものであり、今回検出された遺構の埋土としては通有のものである。この柵列跡は、耕作跡と考えられるSX02・03と主軸をほぼ同じくしていることから、これらと併存して機能していたことが想定される。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から近世の所産であると仮定しておく。

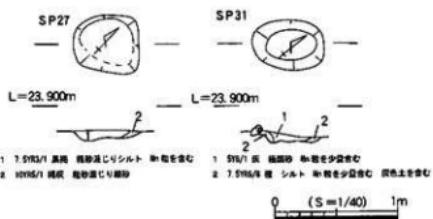


第66図 SA01平面図・断面図

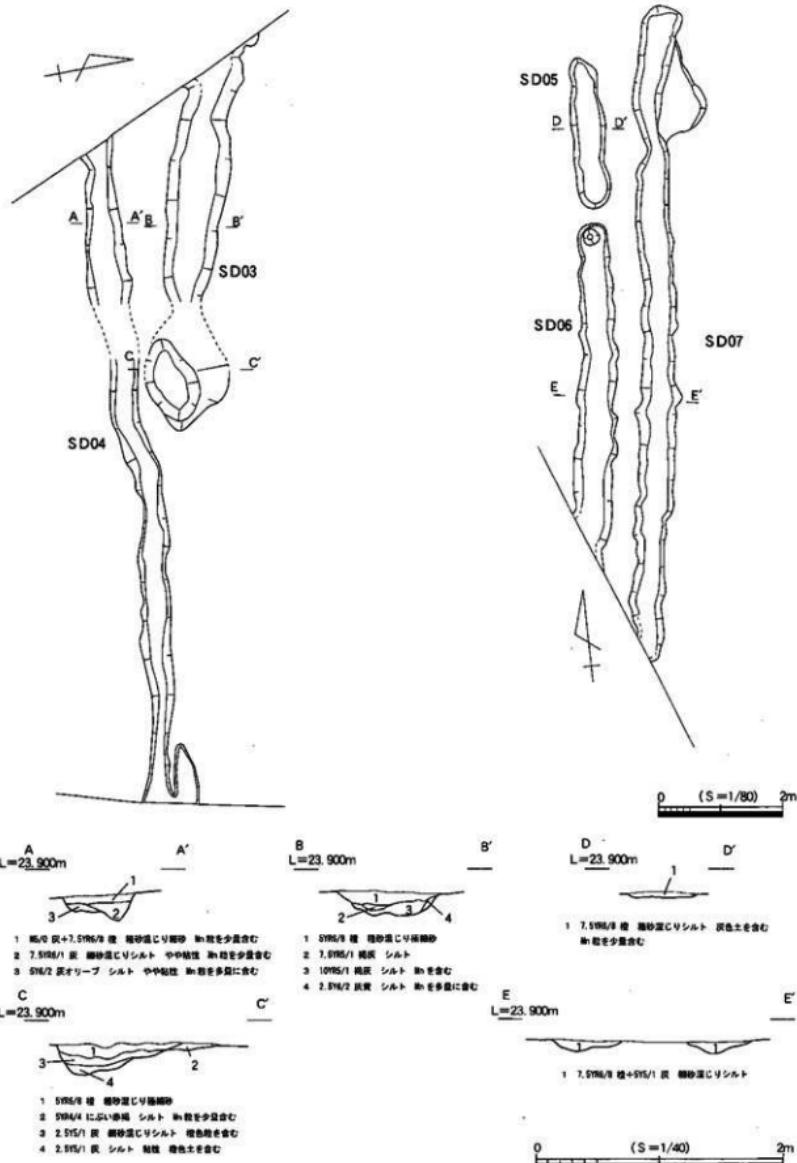
柱穴（第67・69図）

柱穴の多くは、SA01同様、橙色シルトと青灰～白灰色極細砂で構成される埋土を有しており、近世の所産であると想定できる。SP31からは、弥生土器高杯の脚部が出土しているが（第69図-5）、混入品とみるべきであろう。一方、黒褐色シルトを埋土とする柱穴も2基検出している（SP25・27）。これらは調査区東端に位置するため、これらに組み合う柱穴を調査区外に求めざるを得ない。しかし、その場合でも、掘立柱建物跡・

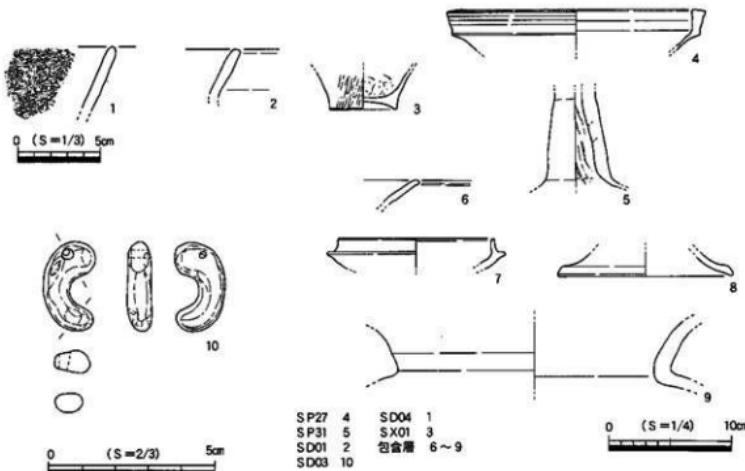
柵列跡・竪穴住居跡等に復原することは困難である。土坑と位置づける余地もあるが、現存深度が極めて浅いことから、これらに組み合う柱穴の多くは、削平を受けて消失したものと捉えておきたい。この2基のうち、SP27からは弥生時代後期前葉の高杯が出土しており（第69図-4）、この柱穴の機能していた時期を示唆しているものと考えられる。



第67図 SP27・31平面図・断面図



第68図 SD03~07平面図・断面図



第69図 川島本町南遺跡出土遺物実測図

溝跡（第68・69図）

調査地の各所で計7条を検出した。このうち、SD01・02は調査区北壁に沿って検出している（第63図参照）。調査区の北壁は、現存する条里型地割の坪界線に位置することから、これらは条里の坪界溝である。遺物はほとんど出土しておらず、時期比定が困難であるが、近世の所産であると考えられるSX01・02を切り込んで形成されていることから、近世以降に形成されたものと仮定していく。

SD03～07も条里方向に沿う溝跡である。埋土は橙色シルトと青灰～白灰色極細砂で構成されており、今回の調査では通有のものである。耕作跡かと考えられるSX01とも軸を同じくしており、これらが同時併存していた可能性が想定される。存続時期を示す遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から、近世の所産であると仮定しておく。

10は光沢のあるメノウ製の勾玉である。全長2.6cm、穿孔径は0.2～0.3cmを測り一方向から穿たれている。メノウ製勾玉は、古墳時代後期に盛行し、「コ」の字形を呈するのが特徴とされる（車崎2003・近藤1998）。今回出土した勾玉も、さほど角ばってはないが「コ」の字形を呈し、包含層中より古墳時代後期の遺物が出土していることから、この時期の所産であると考えたい。

包含層出土遺物（第69図）

包含層出土遺物で図示できたのは4点である（第69図-6～9）。6は弥生土器甕もしくは壺の口縁部である。7は須恵器杯身。8は須恵器高杯の脚部と考えられるが、焼成不良で軟質のものである。9は須恵器甕の口縁部である。

上記のように、古墳時代後期の遺物が散見される。当期の遺構は今回検出されなかったが、既に削平を受けて消失したか、隣接地に所在することが想定できよう。

第V章 調査成果の分析

(1) 弥生時代後期～古墳時代前期の土器の色調・胎土について

川島本町遺跡では、弥生時代後期～古墳時代前期の土器が、溝跡や土坑などに伴って出土している。これらの土器は色調・胎土などにおいて、ある程度の傾向が看取できる。また、そのことが、今回検出された土坑などの評価とも関わってくることが想定できた。したがって、これらの諸点について若干の検討を行なながら述べておく。

第9表 弥生時代後期～古墳時代前期における各器種と色調及び胎土

時期	器種	色調・胎土	該当遺物番号	特記事項
弥生時代後期	壺	香東川下流域産 白～にぶい橙・砂粒多い	3・11・16 13・14	
	甕	香東川下流域産 にぶい白～橙	18・19・20・21・43 17・44・182	
	高杯杯部	香東川下流域産 にぶい白～橙・砂粒多い	4・5・26・27・28・29・30 93	シャモットを含むものが多い
古墳時代前期初頭	高杯脚部	香東川下流域産	31・32・33・34・35	シャモットを含むものが多い
	小型鉢	その他	184	
	鉢	ややにぶい白～淡橙	12・22・25・37・38	
	小型丸底壺	白～橙	99・186・187・188・189	
古墳時代前期後葉	壺	にぶい白～橙・砂粒多い	2・9・36	器表面劣化・断面は橙色
	甕	白～淡橙・きめが細かい	6・10	布留式中～新相

第9表は、当該期における各器種と色調・胎土との対応を示したものである。資料数が少ないので、高杯以外の各器種は口縁部や底部などをそれぞれ1点として計上している。また、報告書不掲載資料を計上できなかったこともあるため、あくまでおおよその傾向を反映しているに過ぎない。ただし、時期の推定が可能な資料は概ね掲載しているので、不掲載資料を計上しても時期的推移に大きな変更はないものと考える。

さて、弥生時代後期～古墳時代前期初頭の状況をみると、香東川下流域産（下川津B類）の土器と、にぶい白～橙色を呈する土器とに大別できる。これは空港跡地遺跡、林・坊城遺跡、多肥松林遺跡で既に確認されている状況（乗松2004）と同様のものといえる。空港跡地遺跡、林・坊城遺跡、多肥松林遺跡は、巨視的にはひとつの遺跡群（信里2003）におさまるものと考えられる。それに対して、当遺跡は三谷三郎池遺跡や池田合子神社などとともに、別個の遺跡群が想定できるものである。したがって、色調・胎土などに基づく大別は、空港跡地遺跡などで形成される遺跡群固有の事象ではないことが確認される。

また、各器種における香東川下流域土器とにぶい白～橙色を呈する土器の割合は、資料数が少ないので正確さに欠けるが、少なくとも高杯における香東川下流域土器の占める割合の高さは読み取れる。ただし、これらの高杯はSK102もしくはSD102出土のものがほとんどであり、後述するように、これらの廃絶に際して香東川下流域の高杯を選択して投棄されていたことも想定できる。したがって、当遺跡にて香東川下流域高杯の占める割合が高いことが、そのまま当地近辺に想定される集落の状況を反映しているものとはいえない。

次に古墳時代前期後葉の土器についてみてみると、この時期には香東川下流域土器が生産されていないので、資料数が少ないとはいえる。白～橙色を呈する土器で基本的に構成されるとみることに問題はないだろう。ただし、今回出土した小形丸底壺と布留式甕は、色調・胎土において明らか

に区別されるものであり、白～橙色を呈する土器としてひと括りにしてしまうことには、大きな問題が残る。以下にその特徴を記しておく。

小形丸底壺：にぶい白色を基調とするが、それは器表面のみの特徴で、断面は全て橙色を呈する。また、劣化が著しく、器表面の剥離によって断面の橙色が露胎するものもある。1～3mm幅の砂粒を多く含む。

布留式甕：乳白色を基本とする。淡い橙色を呈する部分もあるが、器表面のごく一部に認められるに過ぎない。残存状況は極めて良好で、劣化による器表面の剥離は全く認められない。1～3mm幅の砂粒を含むが、小形丸底壺と比べれば目立たない。胎土自体、きめの細かい印象を受ける。

上記の諸特徴のうち、劣化状況に基づく差異については、出土に至るまでの土壤条件を考慮しなければならない。しかし、小形丸底壺2・9と、布留式甕6・10は同じ遺構（SE101・SK103）から出土しており、土壤条件に起因する可能性を捨象することができる。また、これらとは別の遺構（SD102）より出土した小形丸底壺36も、器表面の劣化が著しい。したがって、各遺構に起因する現象ではなく、今回出土の小形丸底壺に通有の現象とみるべきであろう。

このような器種で区別される色調・胎土の差異の原因として、まず考えられるのは製作地の違いである。今回出土の小形丸底壺と布留式甕とでは、小形丸底壺のほうが色調・胎土において、前段階（弥生時代後期～古墳時代前期初頭）で確認されるにぶい白～橙色を呈する土器群に近い。したがって、小形丸底壺を前段階から当地近辺で作られてきた土器群の延長上で捉え、布留式甕は他地域からの搬入品であると仮定することは可能である。ただし、他地域から搬入されたといって、県外で製作されたとする根拠はない。まずは、高松平野内で模索するのが妥当かと考える。

一方、今回出土した布留式甕の胎土がきめ細かいという特徴から見れば、それが水簸によるものであり、そのために小形丸底壺との外見上の違いが生じたと見ることも可能である。また、胎土中の砂粒の多寡は、器種ごとで素地にまぜる砂粒の量を変えていることが想定できる。つまり、両者の違いは製作地の違いではなく、製作時の違いであると仮定することも可能なのである。

現時点では上記の2通りの見解が提示できるが、両者の是非を検証することは困難である。しかし、当地近辺を中心としたデータの蓄積がなされれば、どちらかを示唆する傾向が、おのずとみえてくるものと考える。いずれにせよ、結果として、器種と色調・胎土が対応するという状況が、古墳時代前期後葉において存在していることが、今回の調査から確認されるのである。

（2）今回検出した井戸跡および土坑について

前項で検討した小形丸底壺および布留式甕は、そのほとんどが井戸跡SE101・土坑SK103より出土している。SK103は土坑としているが、状況からみて井戸跡である可能性が高い（第Ⅲ章参照）。また、これらより出土した土器のうち、布留式甕は、残存状況が良好でありながら、煮沸具として使用された痕跡が認められない。すなわち、未使用の状態で投棄された可能性が考えられる。やや安直ではあるが、井戸跡の廃絶に際して意図的に投棄したことが想起されよう。共伴する小形丸底壺についても、同様のことが想起される。

上記の遺構のほか、弥生時代終末期の土坑SK101・102も井戸跡である可能性が高いことを第Ⅲ章で述べた。このうち、SK101の出土遺物はわずかであるが、SK102からは少なくとも香東川下流域産（下川津B類）の高杯が底付近よりまとまって出土している。この高杯も井戸廃絶に際して

意図的に投棄されたことを想定する余地があろう。

弥生時代後期～古墳時代前期の井戸廃絶に際する土器投棄について、県内ではまだ状況が把握できていない。参考までに、対岸の岡山県の状況をみてみると（中野1988）、弥生時代後期～古墳時代初頭において、井戸跡の底部より完形の土器が出土することが多い。これは、井戸放棄に際する意図的放置と位置づけられている。このような意図的放置は、弥生時代後期後半より急増し、少なくとも古墳時代初頭までは継続するようである。また、意図的に放置される土器の器種は、弥生時代後期においては多種多量であるのに対し、古墳時代初頭においては主に甕を用い、1～数個に限られるという。

地域が異なるうえに、対象としている時期が若干異なるため、安易な援用は避けるべきであるが、今回の調査事例と岡山県の事例とに共通する現象として、井戸廃絶時に投棄（放置）する土器の器種構成に時期的な推移があることが挙げられよう。当遺跡での時期的推移をまとめると、以下のようにになる。

弥生時代終末期：井戸の廃絶に際して、少なくとも高杯をまとめて投棄する

古墳時代前期後葉：井戸の廃絶に際して、小形丸底甕と布留式甕をそれぞれ1～2個投棄する

一方、岡山県の事例と比較して決定的に異なるのは、井戸跡の底から完形で出土するとは限らないという出土状況である。SK102出土高杯は底から出土しているが、完形になるものはなかった。SE101出土の小形丸底甕9は完形であるが、布留式甕10は底部が出土していないうえに、破片の一部はSK101より出土している。また、SK101から出土した土器2・6・10は、埋土の上位より出土している。このような現象を理解するためには、今なお事例の増加とその把握を経なければならぬ。

以上、川島本町遺跡においては弥生時代終末期～古墳時代前期の井戸跡がいくつかあり、廃絶時には意図的に土器を投棄した状況を想定した。本来ならば、発掘調査時において井戸跡であることを認定し、その上で出土状況を検討すべきであるが、調査時の認識が至らなかつたため、出土状況などから井戸跡であろうという推定に至っている。このため、基礎資料としては多くの問題が残る事態を招いてしまった。反省すべき点であり、今後の調査の上での注意点としておきたい。

第VI章 まとめ

川島本町遺跡

川島本町遺跡では、縄文時代以前に形成されたと考えられる旧河道の埋没後に形成された溝跡群と、調査地の北東側を中心に、弥生時代後期～古墳時代前期の井戸跡・柱穴などの居住域を示唆する遺構が確認された。当地は地形の検討から見ても、旧河道の存在が想定できる。おそらく、居住域の中心地は当地より東側で、かつ、春日川に至るまでの間の微高地上に形成されていたものと推定できる。このように、集落跡の位置をある程度限定的に推定できるようになったのは、今回の調査成果としては大きい。

また、これらの遺構より出土した土器は、空港跡地遺跡、林・坊城遺跡、多肥松林遺跡の土器と同様、香東川下流域産（下川津B類）土器とぶい白～橙色を呈する土器（「白色系」、乗松2004）とで基本的には構成されている。香東川下流域産土器が生産されなくなる古墳時代前期後葉においては、橙色を基調とし、砂粒を多く含んだ、劣化の著しい小形丸底壺と、白色を基調とし、胎土のきめが細かく、残存状況のよい布留式壺があり、器種と色調・胎土に対応関係が認められた。

両者の土器は、井戸廃絶に際して意図的に投棄されたものと考えられる。また、これらと同様の状況であることから、香東川下流域産の高杯がまとまって出土した土坑SK102も、井戸の可能性が高く、高杯は意図的に投棄されたものであると想定できる。

上記のような、色調・胎土の傾向や、井戸とみられる遺構での出土状況などは、周辺の調査事例の増加とともに、あらためて評価していく必要がある。

一方、黄褐色シルト層中および上面や、風倒木痕の埋土からは、縄文時代後期前葉～中葉の土器と、石器類がまとまって出土した。瀬戸内地方では、当該期の資料が包含層よりもまとめて出土する事例が年々増加しており、これらの土器に対する詳細な検討がなされつつある（幸泉2001）。このような検討は、遺構出土の遺物に対する検討以上に、事例の多さによって裏づけされなければならない側面が強い。今回出土の縄文土器および石器類も、このような検討で明らかにされた事象を補強、あるいは再評価するものであり、遺構に伴わない遺物とはいえ貴重な資料である。

また、古代から近世の遺構として、条里方向に沿った溝跡が検出された。このうち、東西方向の溝SD109・212は、現存する条里的坪界線にはほぼ一致している。一方、南北方向の溝SD110は当地の一町南で確認される地割の延長線上に位置すると考えられる。当地近辺では、条里型地割の横軸は良好に現存しているが、縦軸は不明瞭である。今回検出されたSD110は当地近辺の条里型地割の縦軸の施行状況を明らかにするための基礎資料となる。

なお、SD110からは、その存続時期を示唆する遺物が少量ではあるが出土している。それに基づけば、17世紀前葉頃に埋没したものと考えられ、SD110と埋土が近似するSD109も同じ頃に埋没したと考えられる。一方、掘削時期を示唆する遺物としては、8世紀後半～9世紀前半頃の須恵器が出土しているが、これに従えばかなりの長期間機能していたことになり、なお検討していく必要がある。

川島本町南遺跡

川島本町南遺跡では、埋土の特徴から近世の所産かと思われる溝跡と、耕作跡と考えられる浅い

落ち込みが主に検出された。このうち、東西方向の溝SD01・02は現存する条里型地割の坪界線上に位置するものであり、これに方位を同じくする他の溝跡や、耕作跡も近い時期に形成されたものと考えられる。一方、同じ埋土でありながら、主軸方位が異なる柵列SA01や耕作跡SX02も検出されている。これらの主軸方位は、調査区の西壁の方向と一致する。調査区の西壁は現在も使用されている水田の畦に沿うものであり、したがって、地図上には示されていないが、当遺跡においては、現存する条里型地割の方舟とは異なる地割が存在していたことが伺える。

これらの遺構とは別に、黒褐色シルトの埋土を有する柱穴SP25・27が検出された。出土遺物から弥生時代後期のものと考えられる。これらは現存深度が極めて浅いことから、これらの他にも本来は存在し、それが削平を受けて消失してしまった状況が想定される。

また、溝SD03からは、メノウ製の勾玉が出土した。古墳時代後期のものと考えられ、包含層中より出土している同時期の遺物がこれを示唆している。今回、古墳時代後期の遺構は確認されなかつたが、上述と同様、削平を受けて消失したか、隣接地に存在する可能性が考えられる。

引用・参考文献

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

金田草裕 1992「第2章 第1節 地理的環境」『讃岐国弘福寺領の調査』高松市教育委員会

高橋 学 1992「第4章 第1節 高松平野の環境復原」『讃岐国弘福寺領の調査』高松市教育委員会

大久保徹也・森政也 1995『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 上天神遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか

川畠 晃 2001『太田第2土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第5冊 四原遺跡』高松市教育委員会

川畠 晃 2002『太田第2土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 天満・宮西遺跡～集落・水田編～』高松市教育委員会

川畠晃・末光甲正編 2000『太田第2土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊 上西原遺跡 附 清仏造跡』高松市教育委員会

藏本哲司 1999「弥生時代終末期の讃岐地域の土器様相について 一下川津B類土器の動向を中心として」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第32冊 中間西井坪遺跡II』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか

信里芳紀 2003『讃岐地域における弥生時代最終期集落の様相』『続文化財学論集』文化財学論集刊行会

信里芳紀・山元素子 2004『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第53冊 中森遺跡 林・坊城遺跡II 東山崎・水田遺跡II』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか

乗松真也編 2004『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第8号 空港跡地遺跡Ⅲ』香川県教育委員会ほか

乗松真也 2005『三谷三池遺跡出土の弥生時代資料』『調査研究報告』第1号 香川県歴史博物館

松本和彦 2000『都市計画道路町分寺綾南線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 松並・中所遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか

宮崎哲治 1993『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか

森格也・古野徳久編 1995『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊 前田東・中村遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか

山下平重 1999『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 多肥松林遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか

山元敏裕編 1994『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊 沼・長池II遺跡』高松市教育委員会ほか

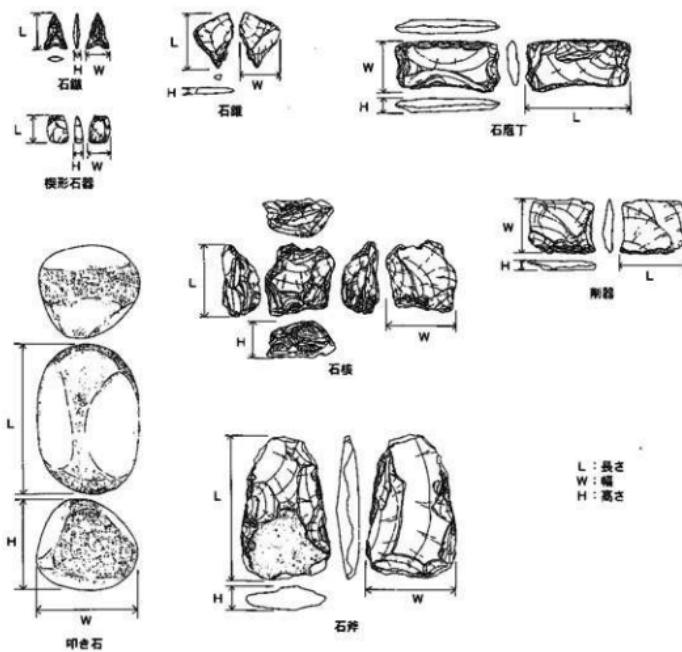
渡部明夫編 1990『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第9号 水井遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか

第Ⅲ章 川島本町遺跡の調査結果

大橋康二 1993『唐津と伊万里』『考古学の世界 第5巻 九州・沖縄』ぎょうせい

幸泉満夫 2001『西日本鏡文後期土器組成論—瀬戸内地方における枕形文系土器に関する研究—』『考古学研究』48-3 考古学研究会

- 佐賀県立九州陶磁文化館 1984「北海道から沖縄まで 国内出土の肥前陶磁」
- 佐藤良二編 1984『奈良県文化財調査報告第42集 二上山北麓土器製作遺跡の調査—清風荘第3地点遺跡・浅ヶ谷遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
- 矢野健一 1994「縄文後期における土器の器種組成の変化」「愛媛大学法文学部考古学研究報告第3番 江口貝塚II 一縄文後晚期編一」愛媛大学法文学部考古学研究室
- 渡部明夫 1980「讃岐国須恵器生産について」「鏡山猛先生古稀記念 古文化論叢」鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会
- 渡部明夫 1994「觀音寺市なつめの木貝塚出土の縄文時代後期土器（なつめの木式）について～香川県における津屋A式及び北白川上層式1期併行期の土器～」「財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 研究紀要II」財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
- 第IV章 川島本町南遺跡の調査結果**
- 車崎正彦 2003「江戸」「日本考古学事典」三省堂
- 近藤 広 1998「装身具」「滋賀県栗太郡栗東町 和田古墳群」栗東町教育委員会
- 第V章 調査結果に関する所見**
- 佐原 真 1979「土器の用途と製作」「日本考古学を学ぶ（2）」有斐閣
- 中野雅美 1988「弥生・古墳時代初頭の井戸」「鎌木義昌先生古稀記念論集 考古学と関連科学」鎌木義昌先生古稀記念論文集刊行会
- 伊里秀紀 2003「讃岐地域における弥生時代前期聚落の様相」「統文化財学論集」文化財学論集刊行会
- 乗松真也 2004「第3章第1節 分析の目的と今後の課題」「空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第8冊 空港跡地遺跡Ⅱ」香川県教育委員会ほか
- 第VI章 まとめ**
- 幸泉満夫 2001「西日本縄文後期土器組成論—瀬戸内地方における沈線文系土器に関する研究—」「考古学研究」48-3 考古学研究会
- 乗松真也 2004「第3章第1節 分析の目的と今後の課題」「空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第8冊 空港跡地遺跡Ⅱ」香川県教育委員会ほか



第70図 石器計測基準図

川島本町遺跡

川島本町南遺跡

遺物観察表

第10表 川島本町道路出土土器調査表

番号	報告送假名	調査区	器種	法面(m)	発見年	地質		外観(物)	内観(土)	測量	備考
						口縁	底縁				
1	S/P204	II区	博文土器 深林	-	-	休憩片	石英-長石(中)粒	10/9/81 反白	10/9/81/4 にぶい質地	調文、北端 ナフ、ナフ	7/9
2	S/K103	I区	土師器 小型丸底盤	-	-	圓盤片	石英-長石(中)粒、白色粘(底)少	2.5/9/82 底白	5/9/82/6 粘	ナフ、ナフ	ナフ
3	S/P109	I区	生存土器 盆	-	-	碗片	石英-長石(中)粒、角閃石(底)少、 鈍角(底)少	10/9/83 にぶい質地	10/9/83/3 にぶい質地	ナフ(後)3.5m ナフ	ナフ
4	S/K101	I区	生存土器 高杯	(16.4)	-	口縁片	石英-長石(中)少、鈍角(底)少	7.5/9/83 6 黄褐色	7.5/9/83/6 明褐色	3.2m、ナフ、ナフ、ナフ(後)3.5m ナフ	ナフ
5	S/P115	I区	生存土器 高杯	-	-(15.2)	脚部1/6	石英-長石(中)少、鈍角(底)無	7.5/9/83 4 にぶい質地	7.5/9/83/6 明褐色	ナフ	ナフ
6	S/K103	I区	土師器 壺	(15.4)	-	口縁片	石英-長石(中)少、鈍角(底)少	10/9/83 1 反白	10/9/83/2 にぶい質地	3.2m、ナフ、ナフ	ナフ
7	S/P118	I区	土師器 盆	(15.2)	-	口縁片	石英-長石(中)無	10/9/83 3 にぶい質地	10/9/83/3 にぶい質地	ナフ	ナフ
8	S/P107	I区	土師器 梗	(14.4)	-	口縁片	石英-長石(中)少、白色粘(底)少	2.5/9/82 反白	2.5/9/82 反白	ナフ	ナフ
9	S/E101	I区	土師器 小型丸底盤	(6.9)	9.0	2.0	底盤片	石英-長石(中)少、白色粘(底)少	5/9/87/2 淡黃褐色	3.2m、ナフ、ナフ	ナフ
10	S/E101	I区	土師器 壺	(15.8)	-	口縁片	石英-長石(中)少、角閃石(底)無	10/9/82 反白	10/9/82/2 にぶい質地	ナフ	ナフ
11	S/D102	I区	生存土器 盆	(17.4)	-	口縁片	石英-長石(中)少、角閃石(底)少	10/9/85 4 にぶい質地	7.5/9/85/4 にぶい質地	ナフ	ナフ
12	S/D102	I区	生存土器 鉢	(8.0)	6.4	2.1	底盤片	石英-長石(中)無	5/9/86/6 粘	3.2m、ナフ	ナフ
13	S/D102	I区	生存土器 盆	-	-(5.2)	底盤片	石英-長石(中)無	10/9/82 黑褐色	10/9/82/2 黑質地	ナフ	ナフ
14	S/D102	I区	生存土器 壺	-	4.5	底盤片	石英-長石(中)少、赤色粘(中)無	7.5/9/87 4 にぶい質地	10/9/87/4 亮黃褐色	ナフ、ナフが残る	ナフ
15	S/D102	I区	生存土器 壺	-	-(4.8)	底盤片	石英-長石(中)少、角閃石(底)少	5/3/1 オリーブ黒	5/3/1 オリーブ黒	ナフ	ナフ
16	S/D102	I区	生存土器 盆	-	7.2	底盤片	石英-長石(中)少、赤色粘(中)少、 角閃石(中)少、雲母(底)少	10/9/85/4 にぶい質地	10/9/85/4 にぶい質地	ナフ	ナフ
17	S/D102	I区	生存土器 壺	(0.5)	-	口縁片	石英-長石(中)少	10/9/83 3 淡黃褐色	10/9/83/3 淡黃褐色	ナフ	ナフ
18	S/D102	I区	生存土器 壺	(1.6)	-	口縁片	石英-長石(中)少、白色粘(中)少	7.5/9/84 にぶい質地	7.5/9/84 にぶい質地	3.2m	ナフ
19	S/D102	I区	生存土器 壺	(14.2)	-	口縁片	石英-長石(中)少、赤色粘(中)少、 角閃石(中)少	10/9/85/4 にぶい質地	10/9/85/4 にぶい質地	ナフ、3.2m	ナフ
20	S/D102	I区	生存土器 壺	(18.4)	-	口縁片	石英-長石(中)少、赤色粘(中)少、 角閃石(中)少、雲母(底)少	10/9/84 にぶい質地	10/9/84 にぶい質地	3.2m	ナフ
21	S/D102	I区	生存土器 壺	(16.6)	-	口縁片	石英-長石(中)少、雲母(底)少	10/9/85/4 にぶい質地	7.5/9/85/4 にぶい質地	ナフ、ナフ、3.2m	ナフ
22	S/D102	I区	生存土器 壺	-	4.3	底盤片	石英-長石(中)少、赤色粘(中)少	7.5/9/86 淡黃褐色	10/9/85/3 にぶい質地	ナフ、底盤(中)ナフ	ナフ
23	S/D102	I区	生存土器 壺	-	-(6.0)	底盤片	石英-長石(中)少、雲母(底)少	10/9/81 黑褐色	10/9/81/1 黑褐色	7/9	7/9
24	S/D102	I区	生存土器 小型壺	-	-(2.6)	底盤片	石英-長石(中)少、雲母(底)少	10/9/82/2 淡黃褐色	10/9/82/2 淡黃褐色	ナフ、ナフ(後)7	ナフ
25	S/D102	I区	生存土器 鉢	-	2.9	底盤片	石英-長石(中)少、赤色粘(中)少	7.5/9/85 6 明褐色	10/9/83 淡黃褐色	ナフ	ナフ
26	S/D102	I区	生存土器 高杯	(21.8)	-	口縁片	石英-長石(中)少、赤色粘(中)少、 角閃石(中)少、雲母(底)少	5/9/85/6 明褐色	5/9/85/6 淡黃褐色	ナフ、ナフ	7/9
27	S/D102	I区	生存土器 高杯	(21.8)	-	口縁片	石英-長石(中)少、赤色粘(中)少、 角閃石(中)少、雲母(底)少	7.5/9/86 淡黃褐色	5/9/85/6 淡黃褐色	ナフ、ナフ、ナフ	7/9

物語番号	報告送達名	調査区	耕種	施肥	施肥量 (kg/ha)	施肥期 (年)	外観 (地)		内面 (地上)	外観	内面 (地下)	内面 (地下)
							口歴	茎葉				
28 SD102	I 区	再生土器 高秆	(22.2)	-	-	口歴肥8 茎葉肥8 茎葉肥(中)少	石英-長石(中)少 赤鉄鉱(中)少 雲母(中)少	10YR5/4 10YR5/4	にふい葉 7.5YR5/4	33YR5/4 33YR5/4	33YR5/4 33YR5/4	33YR5/4 33YR5/4
29 SD102	I 区	再生土器 高秆	(22.2)	-	-	口歴肥8 茎葉肥8 茎葉肥(中)少	石英-長石(中)少 赤鉄鉱(中)少 雲母(中)少	7.5YR5/6 7.5YR5/6	明緑 7.5YR5/6 明緑	33YR5/6 33YR5/6	33YR5/6 33YR5/6	33YR5/6 33YR5/6
30 SD102	I 区	再生土器 高秆	-	-	-	口歴肥8 茎葉肥8 茎葉肥(中)少	石英-長石(中)少 赤鉄鉱(中)少 雲母(中)少	7.5YR5/4 7.5YR5/4	にふい葉 7.5YR5/6 明緑	33YR5/4 33YR5/6 明緑	33YR5/6 33YR5/6	33YR5/6 33YR5/6
31 SD102	I 区	再生土器 高秆	-	-	-	口歴肥8 茎葉肥8 茎葉肥(中)少	石英-長石(中)少 赤鉄鉱(中)少 雲母(中)少	7.5YR5/6 7.5YR5/6	明緑 7.5YR5/6 明緑	33YR5/6 33YR5/6	33YR5/6 33YR5/6	33YR5/6 33YR5/6
32 SD102	I 区	再生土器 高秆	-	-	-	口歴肥8 茎葉肥8 茎葉肥(中)少	石英-長石(中)少 赤鉄鉱(中)少 雲母(中)少	7.5YR5/6 7.5YR5/6	明緑 7.5YR5/6 明緑	33YR5/6 33YR5/6	33YR5/6 33YR5/6	33YR5/6 33YR5/6
33 SD102	I 区	再生土器 高秆	-	-	-	口歴肥8 茎葉肥8 茎葉肥(中)少	石英-長石(中)少 赤鉄鉱(中)少 雲母(中)少	7.5YR5/6 7.5YR5/6	明緑 7.5YR5/6 明緑	33YR5/6 33YR5/6	33YR5/6 33YR5/6	33YR5/6 33YR5/6
34 SD102	I 区	再生土器 高秆	-	-	-	口歴肥8 茎葉肥8 茎葉肥(中)少	石英-長石(中)少 赤鉄鉱(中)少 雲母(中)少	7.5YR5/6 7.5YR5/6	明緑 7.5YR5/6 明緑	33YR5/6 33YR5/6	33YR5/6 33YR5/6	33YR5/6 33YR5/6
35 SD102	I 区	再生土器 高秆	-	-	-	口歴肥8 茎葉肥8 茎葉肥(中)少	石英-長石(中)少 赤鉄鉱(中)少 雲母(中)少	7.5YR5/6 7.5YR5/6	明緑 7.5YR5/6 明緑	33YR5/6 33YR5/6	33YR5/6 33YR5/6	33YR5/6 33YR5/6
36 SD102	I 区	再生土器 小型灌叢	(8.6)	-	-	口歴肥8 茎葉肥8 茎葉肥(中)少	石英-長石(中)少	2.5YR5/3 2.5YR5/3	黄土 7.5YR5/4 にふい葉	33YR5/6 33YR5/6	33YR5/6 33YR5/6	33YR5/6 33YR5/6
37 SD102	I 区	再生土器 鮎	(11.2)	6.9	3.2	茎葉肥8 茎葉肥(中)少	石英-長石(中)少	2.5YR8/2 2.5YR8/2	灰白 灰灰	10YR8/3 10YR8/3	33YR5/3 淡黄橙	33YR5/3 淡黄橙
38 SD102	I 区	再生土器 鮎	(11.2)	7.3	0.4	茎葉肥8 茎葉肥(中)少	石英-長石(中)少	2.5YR8/2 2.5YR8/2	灰白 灰灰	10YR8/3 10YR8/3	33YR5/3 淡黄橙	33YR5/3 淡黄橙
39 SD102	I 区	再生土器 鮎	(28.6)	-	-	口歴肥8 茎葉肥8 茎葉肥(中)少	石英-長石(中)少	5YR8/6 5YR8/6	暗紅 5YR8/6 暗紅	10YR8/3 10YR8/3	33YR5/3 淡黄橙	33YR5/3 淡黄橙
43 包含層	I 区	再生土器 鮎	(13.6)	-	-	口歴肥8 茎葉肥8 茎葉肥(中)少	石英-長石(中)少 赤鉄鉱(中)少 雲母(中)少	7.5YR5/6 7.5YR5/6	極 7.5YR5/6 极	33YR5/6 33YR5/6	33YR5/6 33YR5/6	33YR5/6 33YR5/6
44 SD107	I 区	再生土器 要	-	-	-	口歴肥8 茎葉肥8 茎葉肥(中)少	石英-長石(中)少 赤鉄鉱(中)少 雲母(中)少	7.5YR7/4 7.5YR7/4	にふい葉 7.5YR7/4 にふい葉	10YR7/3 10YR7/3	33YR5/3 にふい葉	33YR5/3 にふい葉
45 SD201	II 区	調文土器 要	-	-	-	口歴肥8 茎葉肥8 茎葉肥(中)少	石英-長石(中)少 赤鉄鉱(中)少 雲母(中)少	10YR8/2 10YR8/2	黒褐色 10YR8/2 黒褐色	7.5YR7/3 7.5YR7/3	33YR5/3 黒褐色	33YR5/3 黒褐色
46 SD206	II 区	調文土器 鮎	-	-	-	口歴肥8 茎葉肥8 茎葉肥(中)少	石英-長石(中)少	10YR8/4 10YR8/4	にふい葉 10YR8/4 にふい葉	2.5YR6/3 2.5YR6/3	33YR5/3 にふい葉	33YR5/3 にふい葉
47 SD207	II 区	調文土器 深鮎	-	-	-	口歴肥8 茎葉肥8 茎葉肥(中)少	石英-長石(中)少 赤鉄鉱(中)少 雲母(中)少	2.5YR7/2 2.5YR7/2	黒褐色 2.5YR7/2 黒褐色	10YR7/3 10YR7/3	33YR5/3 にふい葉	33YR5/3 にふい葉
48 SD207	II 区	調文土器 深鮎	-	-	-	口歴肥8 茎葉肥8 茎葉肥(中)少	石英-長石(中)少 赤鉄鉱(中)少 雲母(中)少	10YR8/3 10YR8/3	にふい葉 10YR8/3 にふい葉	10YR8/3 10YR8/3	33YR5/3 にふい葉	33YR5/3 にふい葉
49 SD201	II 区	再生土器 要	-	-	-	口歴肥8 茎葉肥8 茎葉肥(中)少	石英-長石(中)少 赤鉄鉱(中)少 雲母(中)少	2.5YR7/3 2.5YR7/3	灰 2.5YR7/3 灰	10YR8/1 10YR8/1	33YR5/3 灰	33YR5/3 灰
50 SD207	II 区	再生土器 要	-	-	-	口歴肥8 茎葉肥8 茎葉肥(中)少	石英-長石(中)少 赤鉄鉱(中)少 雲母(中)少	2.5YR8/2 2.5YR8/2	灰白 2.5YR8/2 灰白	10YR8/2 10YR8/2	33YR5/3 灰	33YR5/3 灰
51 SD205	II 区	須磨土器 片道	(13.5) (3.7)	-	-	口歴肥8 茎葉肥8 茎葉肥(中)少	石英-長石(中)少 赤鉄鉱(中)少 雲母(中)少	N7 N7	灰白 灰白	10YR7/4 10YR7/4	33YR5/3 灰	33YR5/3 灰
55 SD209	II 区	再生土器 要	-	-	-	口歴肥8 茎葉肥8 茎葉肥(中)少	石英-長石(中)少	5YR8/1 5YR8/1	灰白 灰白	10YR8/1 10YR8/1	33YR5/3 灰	33YR5/3 灰
56 SD209	II 区	再生土器 要	-	-	-	口歴肥8 茎葉肥8 茎葉肥(中)少	石英-長石(中)少 赤鉄鉱(中)少 雲母(中)少	2.5YR7/3 2.5YR7/3	灰 2.5YR7/3 灰	10YR8/1 10YR8/1	33YR5/3 灰	33YR5/3 灰
57 SD209	II 区	再生土器 要	-	-	-	口歴肥8 茎葉肥8 茎葉肥(中)少	石英-長石(中)少 赤鉄鉱(中)少 雲母(中)少	2.5YR8/2 2.5YR8/2	灰白 2.5YR8/2 灰白	10YR8/1 10YR8/1	33YR5/3 灰	33YR5/3 灰
58 SD209	II 区	再生土器 要	-	-	-	口歴肥8 茎葉肥8 茎葉肥(中)少	石英-長石(中)少 赤鉄鉱(中)少 雲母(中)少	2.5YR5/1 2.5YR5/1	灰 2.5YR5/1 灰	10YR8/1 10YR8/1	33YR5/3 灰	33YR5/3 灰
59 SD209	II 区	再生土器 要	(3.4)	-	-	口歴肥8 茎葉肥8 茎葉肥(中)少	石英-長石(中)少 赤鉄鉱(中)少 雲母(中)少	2.5YR7/3 2.5YR7/3	灰 2.5YR7/3 灰	10YR8/1 10YR8/1	33YR5/3 灰	33YR5/3 灰
60 SD202	II 区	再生土器 不明	-	-	-	口歴肥8 茎葉肥8 茎葉肥(中)少	石英-長石(中)少 赤鉄鉱(中)少 雲母(中)少	2.5YR8/2 2.5YR8/2	灰 2.5YR8/2 灰	10YR8/1 10YR8/1	33YR5/3 灰	33YR5/3 灰
64 SD109	I 区	再生土器 要	-	-	-	口歴肥8 茎葉肥8 茎葉肥(中)少	石英-長石(中)少 赤鉄鉱(中)少 雲母(中)少	2.5YR4/1 2.5YR4/1	灰 2.5YR4/1 灰	10YR8A/3 10YR8A/3	33YR5/3 にふい葉	33YR5/3 にふい葉
65 SD109	I 区	須磨土器 精耕	-	-	-	穀片	石英-長石(中)少 赤鉄鉱(中)少 雲母(中)少	N5/1 N5/1	灰 灰	10YR8A/3 10YR8A/3	33YR5/3 にふい葉	33YR5/3 にふい葉

測量 番号	測定器 機器名	測量区	特徴	法線(On) 口道 直角 直線	斜界 直角 直線	斜界 直角 直線	船土		色調	内面	外観	測定	
							外観(他)	内面(他)					
68	SD110	II区 縄文土器 深鉢	-	-	-	-	口端部片 石英・長石(中)少	10YR5/4 にぶい灰褐色	口端部片 石英・長石(中)少	N7/7	7/7		
69	SD110	II区 弥生土器 罐	-	-	-	-	口端部片 石英・長石(中)少	10YR5/4 にぶい灰褐色	2.5YR5/3 黄褐色	N7/7	7/7		
70	SD110	II区 須恵器 杯舟	(12.0)	-	-	-	口端部片 石英・長石(中)少	N6/ 底	同上	N6/ 底	同上	地底良好、堅密	
71	SD110	II区 須恵器 高杯	-	-	-	-	口端部片 石英・長石(中)少	N6/ 底	同上	N6/ 底	同上	地底良好、堅密	
72	SD110	II区 須恵器 楠	-	-	-	-	口端部片 石英・長石(中)多	N6/ 底	同上	N6/ 底	同上	地底不良	
73	SD110	II区 須恵器 竜	-	-	-	-	口端部片 石英・長石(中)少	N6/ 底	同上	N6/ 底	同上	地底良好、堅密	
74	SD110	II区 須恵器 竜	-	-	-	-	口端部片 石英・長石(中)多	N6/ 底	同上	N6/ 底	同上	地底良好、堅密	
75	SD110	II区 土師質 足釜	-	-	-	-	口端部片 石英・長石(中)少	10YR6/6 明黄褐色	7.5YR6/5 橙	7/7	7/7		
76	SD110	II区 陶器 鉢?	-	-	-	-	口端部片 石英・長石(中)少	5YR6/5 Sync/3 にぶい黄褐色	5YR6/5 橙	7/7	7/7		
77	SD110	II区 肥前系陶器 団	-	-	(4.5)	底面5/6	口端部片 石英・長石(中)少	7.5YR6/3 一二に白	5YR6/5 橙	同上	同上		
78	SD110	II区 肥前系陶器 盆	-	-	(3.4)	底面5/6	口端部片 石英・長石(中)少	(8) 2.5YR7/5 黄白	10YR7/3 にぶい黄褐色	同上	同上	出だし高台	
79	SD110	II区 土師質 管状土罐	6.8	4.0	3.3	全体7/6	石英・長石(中)少	10YR6/6 明黄褐色	N6/ 底	7/7	7/7		
84	SD212	II区 弥生土器 罐	-	-	4.4	底面5/6	石英・長石(中)多、赤色(中)少	7.5YR5/6 新褐色	10YR5/4 にぶい黄褐色	5YR5/5 橙	5YR5/5 橙		
85	SD204	II区 縄文土器 深鉢	-	-	-	-	口端部片 石英・長石(中)少	10YR8/2 黄白	10YR8/3 にぶい黄褐色	7/7	7/7		
86	SD204	II区 縄文土器 深鉢	-	-	-	-	口端部片 石英・長石(中)多、角閃石(中)少、	10YR7/2 にぶい黄褐色	10YR7/3 にぶい黄褐色	7/7	7/7		
87	SD204	II区 須恵器 瓢	-	-	-	-	口端部片 石英・長石(中)少	5YR8/4 黄白	10YR8/4 にぶい黄褐色	5YR8/4 にぶい黄褐色	5YR8/4 にぶい黄褐色	青褐色、つやあて具無	
88	SD204	II区 須恵器 瓢	-	-	-	-	破片 石英(中)少	N6/ 底	N6/ 底	桔子5/9	桔子5/9	出で具無	
89	SD213	II区 須恵器 杯舟	-	-	-	-	口端部片 石英・長石(中)少	10YR8/2 黄白	同上	同上	同上	灰刀入縁7/7	
90	SD202	II区 縄文土器 深鉢	-	-	-	-	口端部片 石英・長石(中)多	10YR8/3 淡黃褐色	10YR8/1 黄白	同上	同上		
91	SD202	II区 縄文土器 深鉢	(35.4)	-	-	-	口端部片 石英・長石(中)多	10YR5/1 壤灰	10YR5/1 壤灰	7/7	7/7		
92	SD202	II区 縄文土器 深鉢	-	-	-	-	口端部片 石英・長石(中)少	10YR5/1 壤灰	2.5YR7/1 灰白	7/7	7/7		
93	SD202	II区 弥生土器 高杯	-	-	-	-	研磨片 石英・長石(中)少	10YR5/3 にぶい黄褐色	10YR7/2 にぶい黄褐色	7/7	7/7		
146	SD203	II区 縄文土器 深鉢	(33.8)	-	-	-	口端部片 石英・長石(小)少	7.5YR5/2 黄褐色	9/3 喧嘩	米倉文(5/7)、条崎文(3/2)	7/7		
M7	包含層	II区 縄文土器 深鉢	-	-	-	-	口端部片 石英・長石(中)少	10YR6/2 黄褐色	10YR6/2 反黃褐色	7/7	7/7	行、明文文	
148	包含層	II区 縄文土器 深鉢	-	-	-	-	口端部片 石英・長石(中)多、雲母(中)少	2.5YR6/1 黄白	同上	同上	同上	D 断	
149	包含層	II区 縄文土器 深鉢	-	-	-	-	口端部片 石英・長石(中)少	10YR8/2 黄白	10YR8/2 黄白	同上	同上	D 断	
150	包含層	II区 縄文土器 深鉢	-	-	-	-	口端部片 石英・長石(中)少、雲母(中)少	2.5YR4/1 黄白	2.5YR5/1 黑褐色	7/7	7/7	三井	
151	包含層	II区 縄文土器 深鉢	-	-	-	-	口端部片 石英・長石(中)少、雲母(中)少	2.5YR5/2 壤灰	2.5YR5/1 壽灰	7/7	7/7		
152	包含層	II区 縄文土器 深鉢	-	-	-	-	口端部片 石英・長石(中)多、赤色(中)少	7.5YR7/2 鮮綠色	10YR8/1 黄白	同上	同上		
153	包含層	II区 縄文土器 深鉢	-	-	-	-	口端部片 石英・長石(中)少、赤色(中)少	7.5YR8/2 淡黃褐色	10YR8/2 黄白	北端、7/7	7/7		

剖面番号	報告書番号	調査区	岩層	岩相		粒度率	地質	外観(地)		内観(出土)		岩相		備考
				口溶存	漂砾			2.5YR7/2 底質	10YR5/4 にぶい質粘	周文、沈積	7/7	2.5YR7/2 底質	10YR5/4 にぶい質粘	周文、沈積
154	包含層	II区	褐土岩 深鉄	-	-	-	口溶存(底質・漂石(中)多) 雷鉄(中)少	10YR6/2 底質	周文、沈積	7/7	2.5YR7/2 底質	10YR5/4 にぶい質粘	周文、沈積	D鉄
155	包含層	II区	褐土岩 深鉄	-	-	-	口溶存(底質・漂石(中)多) 雷鉄(中)少	2.5YR5/2 底質	周文、沈積	7/7	2.5YR6/2 底質	2.5YR5/4 オリーブ緑	周文、沈積	A鉄
156	包含層	II区	褐土岩 深鉄	-	-	-	口溶存(底質・漂石(中)多) 雷鉄(中)少	2.5YR6/2 底質	周文、沈積	7/7	2.5YR6/2 底質	2.5YR5/4 オリーブ緑	周文、沈積	
157	包含層	I区	褐土岩 深鉄	-	-	-	口溶存(底質・漂石(中)多) 雷鉄(中)少	5YR5/6 明赤緑	周文、沈積	7/7	5YR5/6 明赤緑	5YR5/6 明赤緑	周文、沈積	
158	包含層	II区	褐土岩 深鉄	-	-	-	口溶存(底質・漂石(中)多) 雷鉄(中)少	10YR6/1 錫灰	周文、沈積	7/7	10YR6/1 錫灰	10YR6/1 錫灰	周文、沈積	
159	包含層	II区	褐土岩 深鉄	-	-	-	漂片 石英・漂石(中少) 鉄色(中)少	10YR7/2 底質	周文、沈積	7/7	10YR7/2 底質	10YR7/2 底質	周文、沈積	
160	包含層	II区	褐土岩 深鉄	-	-	-	漂片 石英・漂石(中少) 鉄色(中)少	2.5YR7/3 漂質	周文、沈積	7/7	2.5YR7/3 漂質	10YR7/2 別質	周文、沈積	
161	包含層	II区	褐土岩 深鉄	-	-	-	漂片 石英・漂石(中)多	10YR5/2 底質	周文、沈積	7/7	10YR5/2 底質	10YR5/2 底質	周文、沈積	
162	包含層	II区	褐土岩 深鉄	-	-	-	漂片 石英・漂石(中)少	2.5YR7/2 底質	周文、沈積	7/7	2.5YR7/2 底質	2.5YR7/2 底質	周文、沈積	
163	包含層	II区	褐土岩 深鉄	-	-	-	漂片 石英・漂石(中)少	10YR7/2 にぶい質粘	周文、沈積	7/7	10YR7/2 にぶい質粘	2.5YR7/2 にぶい質粘	周文、沈積	
164	包含層	II区	褐土岩 深鉄	-	-	-	漂片 石英・漂石(中少) 鉄色(中)少	10YR3/2 黒褐色	周文、沈積	7/7	10YR3/2 黒褐色	10YR3/2 黒褐色	周文、沈積	
165	包含層	II区	褐土岩 深鉄	-	-	-	口溶存(底質・漂石(中)多) 鉄色(中)少	2.5YR7/2 底質	周文、沈積	7/7	2.5YR7/2 底質	2.5YR7/2 底質	周文、沈積	D鉄
166	包含層	II区	褐土岩 深鉄	-	-	-	漂片 石英・漂石(中)少	10YR7/3 にぶい質粘	周文、沈積	7/7	10YR6/2 底質	10YR6/2 底質	周文、沈積	
167	包含層	II区	褐土岩 深鉄	-	-	-	漂片 石英・漂石(中)少	2.5YR7/2 底質	周文、沈積	7/7	2.5YR7/2 底質	2.5YR7/2 底質	周文、沈積	
168	包含層	II区	褐土岩 深鉄	-	-	-	口溶存(底質・漂石(中)多) 鉄色(中)少	10YR7/2 底質	周文、沈積	7/7	10YR7/2 底質	10YR7/2 底質	周文、沈積	
169	包含層	II区	褐土岩 深鉄	-	-	-	口溶存(底質・漂石(中)多) 鉄色(中)少	10YR7/3 にぶい質粘	周文、沈積	7/7	10YR7/3 にぶい質粘	10YR7/3 にぶい質粘	周文、沈積	
170	包含層	II区	褐土岩 深鉄	-	-	-	口溶存(底質・漂石(中)少)	2.5YR7/3 漂質	周文、沈積	7/7	2.5YR7/3 漂質	2.5YR7/3 漂質	周文、沈積	
171	包含層	II区	褐土岩 深鉄	-	-	-	口溶存(底質・漂石(中)少)	10YR7/2 にぶい質粘	周文、沈積	7/7	10YR7/2 にぶい質粘	10YR7/2 にぶい質粘	周文、沈積	E鉄
172	包含層	II区	褐土岩 深鉄	-	-	-	漂片 石英・漂石(中)少	2.5YR4/1 黄灰	周文、沈積	7/7	2.5YR4/1 黄灰	2.5YR4/1 黄灰	周文、沈積	C鉄
173	包含層	I区	褐土岩 深鉄	-	-	-	漂片 石英・漂石(中)少	10YR5/2 黒褐色	周文、沈積	7/7	10YR5/2 黒褐色	10YR5/2 黒褐色	周文、沈積	D鉄
174	包含層	II区	褐土岩 深鉄	-	-	-	漂片 石英・漂石(中)少	10YR5/1 錫灰	周文、沈積	7/7	2.5YR7/2 底質	2.5YR7/2 底質	周文、沈積	F鉄
175	包含層	II区	褐土岩 深鉄	-	-	-	(12) 雷鉄?	2.5YR5/3 漂質	周文、沈積	7/7	2.5YR5/3 漂質	2.5YR5/3 漂質	周文、沈積	G鉄
176	包含層	II区	褐土岩 深鉄	-	-	-	(11) 雷鉄?	2.5YR6/2 黄灰	周文、沈積	7/7	2.5YR6/2 黄灰	2.5YR6/2 黄灰	周文、沈積	E鉄
177	包含層	I区	褐土岩 深鉄	-	-	-	(8) 雷鉄?	10YR8/1 黄灰	周文、沈積	7/7	10YR8/1 黄灰	10YR7/4 にぶい質粘	周文、沈積	
178	包含層	I区	褐土岩 深鉄	-	-	-	(10, 12) 雷鉄?	10YR8/2 黄灰	周文、沈積	7/7	2.5YR8/1 黄灰	2.5YR8/1 黄灰	周文、沈積	O鉄
179	包含層	II区	褐土岩 深鉄	-	-	-	5YR8/3 黄灰	10YR8/3 黄灰	周文、沈積	7/7	5YR8/3 黄灰	5YR8/3 黄灰	周文、沈積	A鉄
180	包含層	II区	褐土岩 深鉄	-	-	-	5YR8/3 黄灰	10YR7/3 にぶい質粘	周文、沈積	7/7	10YR7/3 にぶい質粘	10YR7/3 にぶい質粘	周文、沈積	
181	包含層	II区	生土岩 二重口溶存	-	-	-	口溶存(底質・漂石(中)少)	5YR5/4 にぶい質粘	周文、沈積	7/7	5YR5/4 にぶい質粘	3.0YR7/2 にぶい質粘	周文、沈積	
182	包含層	I区	生土岩 墓	-	-	-	3.7 厚泥質?	10YR8/3 黄灰	周文、沈積	7/7	5YR7/6 錫灰	5YR7/6 錫灰	周文、沈積	
183	包含層	II区	生土岩 高杯	-	-	-	軽粘性片 石英・漂石(中)少	7.5YR5/4 にぶい質粘	周文、沈積	7/7	10YR5/4 にぶい質粘	10YR5/4 にぶい質粘	周文、沈積	
184	包含層	I区	生土岩 高杯	-	-	-	薄粘性片 石英・漂石(中)少	10YR7/3 漂質	周文、沈積	7/7	10YR7/4 にぶい質粘	10YR7/4 にぶい質粘	周文、沈積	
185	包含層	I区	土暗斜 小型丸足墳	(8.0)	-	-	口溶存(底質・漂石(中)少)	7.5YR7/6 錫灰	周文、沈積	7/7	5YR7/6 錫灰	5YR7/6 錫灰	周文、沈積	
186	包含層	II区	生土岩 鋸	(7.2)	-	-	口溶存(底質・漂石(中)少)	5YR8/6 錫	周文、沈積	7/7	5YR8/6 錫	5YR8/6 錫	周文、沈積	

番号	報告者名	調査区	断面	口径 (m)	高さ	断面形	地土	外観 (地)		内面 (地)	外面	内面	備考	
								現存長	最大幅	層				
13	包含層	I 区	劣生土器 鉢	(2.4)	-	口縁部(?)/ 石英-長石(中)集,赤色粒(?)少	[10YRA/1] 布灰	10YR/6 明顯黒	7.5	N/FR/7.5				
14	包含層	II 区	劣生土器 鉢	-	-	口縁部(?)/ 石英-長石(中)少,赤色粒(?)少	[10YRA/2] 灰白	2.5YR/8/3 淡黄	7.5	N/FR/				
15	包含層	II 区	劣生土器 鉢	(6.2)	-	口縁部(?)/ 石英-長石(?)少,赤色粒(?)少	[10YRA/4] にぶい赤	10YR/6/3 淡黄	7.5	N/FR/7.5				
16	包含層	I 区	須恵器 杯盤	(13.2)	-	口縁部(?)/ 赤色粒(?)少	2.5YR/2 灰白	2.5YR/2 灰白	回転計	輪形				
17	包含層	I 区	須恵器 不明	-	-	輪形輪片 石英-長石(?)少	5YR/5/3 にぶい赤	7.5YR/1 灰灰	輪形文, 連續斜文	回転計	透かし7.5			

第11表 川島本町遺跡出土瓦類解説

番号	報告者名	調査区	断面	口径 (cm)	現存長	最大幅	層	地土		凹面	凸面	調整	備考
								層	層				
66	SD108	I 区	平瓦	(5.4)	(5.5)	2.1 白色粒(?)少	N/	灰	N/	灰	布目压痕	板行	
67	SD110	I 区	平瓦	(5.2)	(5.3)	1.3 白色粒(?)少	N/	灰	N/	灰	布目压痕	板行	
80	SD110	II 区	平瓦	(9.3)	(9.3)	2.0 白色粒(?)少,灰色砂粒(?)少	2.5YR/3 灰	2.5YR/2 灰白	2.5YR/3 灰	2.5YR/2 灰白	布目压痕	7.5	
81	SD110	II 区	平瓦	(9.1)	(5.8)	1.9 白色粒(?)少	2.5YR/1 灰白	2.5YR/1 灰白	2.5YR/1 灰白	2.5YR/1 灰白	布目压痕	7.5YR/1	
82	SD110	II 区	平瓦	(9.2)	(8.4)	2.1 白色粒(?)少	7.5YR/1 灰白	N/	灰白	N/	灰白	布目压痕	輪目ササ
83	SD110	II 区	丸瓦	(6.2)	(7.6)	1.9 白色粒(?)少	N/	灰	5YR/1 灰	7.5	N/FR/7.5		
18	包含層	I 区	平瓦	(11.6)	(7.3)	2.0 白色粒(?)少,灰色砂粒(?)少	N/	灰	N/	灰	布目压痕	輪目ササ	
19	包含層	I 区	平瓦	(8.9)	(7.7)	1.9 白色粒(?)少	N/	灰	N/	灰	布目压痕	輪目ササ, 小カワ	
19	包含層	II 区	平瓦	(6.6)	(7.4)	1.8 白色粒(?)少	10YR/3 淡黄	10YR/3 淡黄	布目压痕	輪目ササ, 小カワ			
16	包含層	I 区	平瓦	(8.0)	(9.2)	1.8 白色粒(?)多	N/	灰	5YR/1 灰	布目压痕	輪目ササ, 小カワ		
16	包含層	I 区	平瓦	(8.7)	(10.4)	2.0 灰色砂粒(?)少,黑色砂粒(?)少	N/	灰	N/	灰	輪目ササ		

第12表 川島本町遺跡出土石器調査表

番号	報告遺構名	調査区	層位	種類	材質	平行長 (cm)	最大幅 (cm)	重量 (g)	備考
40	SD101	I区		石器未確認	サヌカイト	3.00	1.90	0.70	4.23
41	SD101	I区		楔形石器	サヌカイト	5.40	2.10	1.30	16.66
42	SD102	I区	下層	楔形石器の断片	サヌカイト	3.40	1.10	0.70	2.87
52	SD203	II区		石器	サヌカイト	1.80	1.30	0.20	0.29
53	SD207	II区		楔形石器の断片	サヌカイト	3.90	2.10	1.60	6.84
54	SD207	II区		石核	サヌカイト	6.50	2.80	1.70	22.00
61	SD210	II区		石器	サヌカイト	2.70	1.50	0.40	1.32
62	SD209	II区	上層	削器	サヌカイト	8.50	2.90	0.70	26.04
63	SD208	II区	上層	削器	サヌカイト	10.00	4.90	1.20	63.48
94	SX202	II区	上層	石器	サヌカイト	1.70	1.10	0.25	0.36
95	SX202	II区	上層	石器	サヌカイト	2.20	1.20	0.30	0.56
96	SX202	II区	上層	石器	サヌカイト	2.20	1.20	0.30	0.84
97	SX202	II区	上層	石器	サヌカイト	1.90	1.30	0.30	0.67
98	SX202	II区	上層	石器	サヌカイト	2.00	1.30	0.30	0.76
99	SX202	II区	上層	石器	サヌカイト	2.20	1.20	0.30	0.55
100	SX202	II区	上層	石器	サヌカイト	2.00	1.30	0.40	0.84
101	SX202	II区	上層	石器	サヌカイト	1.70	1.30	0.30	0.51
102	SX202	II区	上層	石器	サヌカイト	2.00	1.40	0.30	0.58
103	SX202	II区	上層	石器	サヌカイト	1.80	1.20	0.35	0.67
104	SX202	II区	上層	石器	サヌカイト	1.60	1.40	0.30	0.55
105	SX202	II区	上層	石器	サヌカイト	1.20	1.70	0.30	0.55
106	SX202	II区	上層	石器	サヌカイト	1.80	1.30	0.30	0.62
107	SX202	II区	上層	石器	サヌカイト	1.50	1.00	0.40	0.46
108	SX202	II区	上層	石器	サヌカイト	2.00	1.35	0.40	1.12
109	SX202	II区	上層	石器	サヌカイト	1.70	0.80	0.30	0.38
110	SX202	II区	上層	石器	サヌカイト	2.40	1.40	0.30	0.70
111	SX202	II区	上層	石器	サヌカイト	1.10	1.50	0.30	0.46
112	SX202	II区	上層	石器	サヌカイト	1.70	1.90	0.50	0.95
113	SX202	II区	上層	石器	サヌカイト	3.20	1.30	0.60	1.85
114	SX202	II区	上層	打撲石斧	サヌカイト	8.30	7.10	2.00	72.49
115	SX202	II区	上層	梅花石器の素材	サヌカイト	2.60	4.00	0.50	5.80
116	SX202	II区	上層	楔形石器の素材	サヌカイト	2.90	3.10	1.10	9.06
117	SX202	II区	上層	楔形石器	サヌカイト	3.00	2.65	0.85	9.56

番号	報告通報名	調査区	位置	器種	材質	測定長 法線(cm)	幅大さ 法線(cm)	重量(g)	備考
18	SX-202	II区	上層	楔形石器	サヌカイト	2.60	2.70	1.30	7.48
19	SX-202	II区	上層	楔形石器	サヌカイト	2.60	1.70	0.60	2.97
20	SX-202	II区	上層	楔形石器	サヌカイト	2.40	2.40	0.70	4.42
21	SX-202	II区	上層	楔形石器	サヌカイト	3.30	2.50	1.00	8.61
22	SX-202	II区	上層	楔形石器	サヌカイト	3.30	5.30	0.80	14.68
23	SX-202	II区	上層	楔形石器	サヌカイト	3.40	2.20	0.90	7.15
24	SX-202	II区	上層	楔形石器	サヌカイト	3.60	1.40	0.70	4.16
25	SX-202	II区	上層	楔形石器	サヌカイト	3.10	1.70	0.50	3.44
26	SX-202	II区	上層	楔形石器	サヌカイト	4.10	2.10	0.90	8.05
27	SX-202	II区	上層	楔形石器	サヌカイト	3.80	1.80	0.70	6.63
28	SX-202	II区	上層	楔形石器の削片	サヌカイト	1.70	0.70	0.50	0.48
29	SX-202	II区	上層	楔形石器の削片	サヌカイト	3.30	1.65	0.55	2.04
30	SX-202	II区	上層	楔形石器の削片	サヌカイト	2.30	0.80	0.50	1.00
31	SX-202	II区	上層	楔形石器の削片	サヌカイト	1.70	0.50	0.20	0.18
32	SX-202	II区	上層	楔形石器の削片	サヌカイト	2.10	0.80	0.30	0.53
33	SX-202	II区	上層	楔形石器の削片	サヌカイト	2.70	0.70	0.30	0.60
34	SX-202	II区	上層	楔形石器の削片	サヌカイト	2.30	0.80	0.30	0.64
35	SX-202	II区	上層	楔形石器の削片	サヌカイト	3.20	1.00	0.45	1.12
36	SX-202	II区	上層	楔形石器の削片	サヌカイト	2.60	0.60	0.60	0.86
37	SX-202	II区	上層	楔形石器の削片	サヌカイト	3.00	1.00	0.50	1.64
38	SX-202	II区	上層	楔形石器の削片	サヌカイト	3.90	1.20	0.50	2.27
39	SX-202	II区	上層	楔形石器の削片	サヌカイト	5.50	1.50	0.65	4.69
40	SX-202	II区	上層	楔形石器の削片	サヌカイト	3.00	1.60	1.00	5.00
41	SX-202	II区	上層	一次加工ある削片	サヌカイト	3.15	2.60	0.65	6.50
42	SX-202	II区	上層	一次加工ある削片	サヌカイト	2.80	4.40	0.80	10.57
43	SX-202	II区	上層	一次加工ある削片	サヌカイト	3.10	1.80	0.70	3.26
44	SX-202	II区	上層	剥片	サヌカイト	2.80	2.15	1.10	4.00
45	包含層	II区	上層	鍛身具		0.96±	1.20±	0.65±	0.58
46	包含層	II区	上層	石器	サヌカイト	1.50	2.00	0.30	0.54
47	包含層	II区	上層	石器未製品	サヌカイト	3.40	2.50	0.70	5.79
48	包含層	II区	上層	楔形石器の素材	サヌカイト	2.90	3.50	0.70	7.99
49	包含層	II区	上層	楔形石器	サヌカイト	2.30	2.10	0.45	2.61
50	包含層	II区	上層	楔形石器	サヌカイト	1.90	2.10	6.50	3.22
51	包含層	II区	上層	楔形石器	サヌカイト	2.50	1.80	0.75	3.77
52	包含層	II区	上層	角器	サヌカイト	5.40	4.10	0.70	17.32

第13表 川島本町南遺跡出土土器觀察表

番号	報告遺構名	調査区	器種	測量(cm)		施土	外觀(地)		色調		測量	備考
				口径	底径		底面	内面(埴土)	外壁			
1	褐色遺構	深林	縹文土器 深林	口徑6.8	底径5.8	高さ7.5	口縁細繊片 石灰・長石(中)多 砂岩(少)	10YR5/1 塗灰	7Y/	7A/	-	
2	汚生土器 梗	-	口縁細繊片 石灰・長石(中)多	2.5YR5/6 有余量	-	-	-	10YR4/4 有余量	7Y/	7A/	-	
3	汚生土器 親	-	(6.2) 長石(少) 砂	10YR4/2 塗灰	-	-	-	10YR4/2 塗灰	7A/	7A/	-	
4	汚生土器 高杯	(23.8)	軒型1/8	石灰・長石(中)少 砂岩(少)	7.5YR8/2 底白	-	-	10YR4/2 底白	7A/	7A/	口縁上に鉛板(塗付)	
5	汚生土器 高杯	-	輪型1/8	石灰・長石(中)少 砂岩(少)	10YR4/4 有余量	-	-	10YR4/4 有余量	7A/	7A/	-	
6	包含層	汚生土器 親	-	輪型細片 石灰・長石(中)少	7.5YR6/6 有余量	-	-	7.5YR6/6 有余量	7A/	7A/	-	
7	包含層	須恵器 环身	(12.4)	口縁細片(少) 砂岩(少)	N/ 底白	-	-	N/ 底白	7A/	7A/	口縁下	
8	包含層	須恵器 高杯	(18.0) 須恵器1/8	砂岩(中)少	5Y/1 底白	-	-	2.0YR7/3 有餘	7A/	7A/	燒成不良	
9	包含層	須恵器 親	(22.0)	須恵器(少)	N/ 底白	-	-	N/ 底白	7A/	7A/	須恵器7.5Y/	

第14表 川島本町南遺跡出土土石器觀察表

番号	報告遺構名	調査区	層位	器種		材質	測量(cm)		重量(g)	備考
				長	幅		厚	最大幅		
10	S.DG3	-	上層	勾玉	メノウ	2.60	0.70	0.70	3.51	-

田村遺跡Ⅱ
川島本町遺跡
川島本町南遺跡

写真図版

田村遺跡

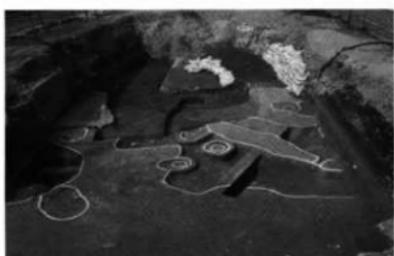
図版1



(1) I - 2 区全景(北から)



(2) II - 1 区全景(北から)



(3) II - 2 区全景(南から)



(4) SP106完掘(西から)



(5) SB002-SP133土層断面(北から)



(6) SB009-SP250土層断面(東から)



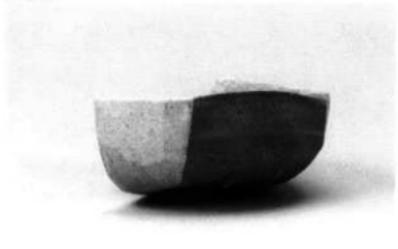
(7) II - 1 区東壁土層断面(西から)



(8) SB003-SP138 12

図版2

田村遺跡



(9) 包含層出土土器 33



(10) SK303出土土器 40

川島本町遺跡



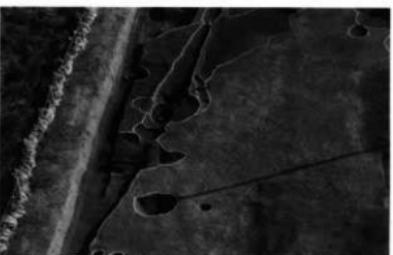
(11) I 区全景(北から)



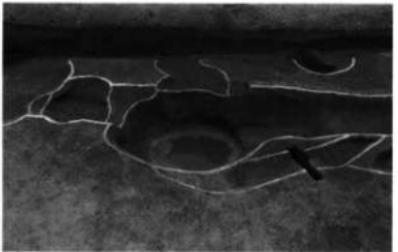
(12) II 区下層遺構面全景(北から)



(13) II 区上層遺構面全景(北から)



(14) SE101周辺(北から)



(15) SE101全景(西から)



(16) SD102遺物出土状況(北から)

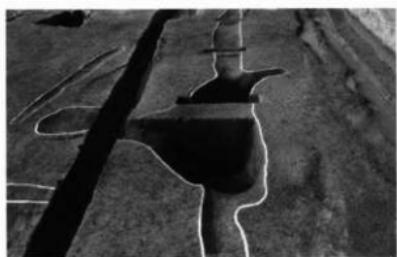
川島本町遺跡



(17) SD208・209全景(南西から)



(18) SK103遺物出土状況(南から)



(19) SX202検出状況(南から)



(20) SX202サヌカイト碎片・剥片類出土状況(南から)



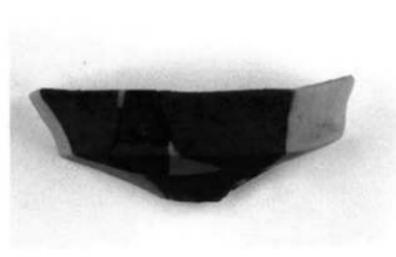
(21) II区包含層出土縄文土器群(西から)



(22) SE101出土土器 9



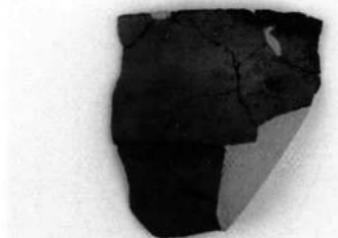
(23) SE101出土土器 10



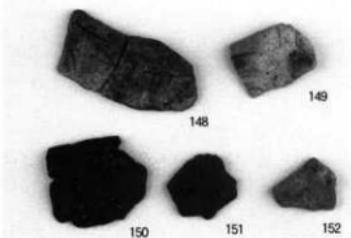
(24) SD102出土土器 28

図版4

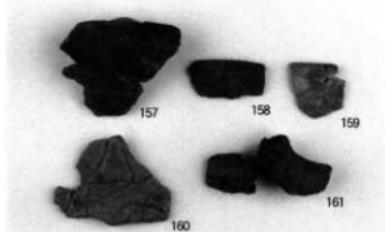
川島本町遺跡



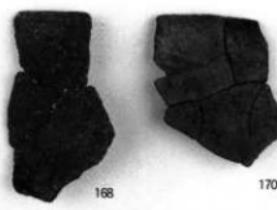
(25) SX203出土土器 146



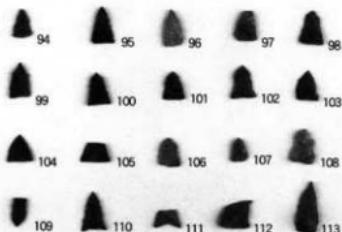
(26) 包含層出土土器 148~152



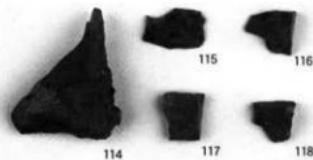
(27) 包含層出土土器 157~161



(28) 包含層出土土器 168~170



(29) SX202出土土器 94~113



(30) SX202出土土器 114~118

川島本町南遺跡



(31) 全景(北から)



(32) SD03出土勾玉 10

報告書抄録

ふりがな	たむらいせきに	かわしまほんまちいせき	かわしまほんまちみみないせき
書名	田村遺跡 II 川島本町遺跡 川島本町南遺跡		
副書名	県道高松普通寺線道路改修事業及び県道西植田高松線道路改良事業 に伴う埋蔵文化財発掘調査報告		
巻次			
編著者名	西村尋文、中里伸明		
編集機関	香川県埋蔵文化財センター		
所在地	〒762-0024 香川県坂出市府中町字南谷5001-4 TEL 0877-48-2191 FAX 0877-48-3249		
発行機関名	香川県教育委員会		
発行年月日	2007年1月31日		

総頁数	目次等	本文	観察表	図版	挿図枚数	写真枚数	付図枚数
134	27	92	11頁	4頁、CD1枚	70枚	33	0枚

ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町					
田村遺跡 II	香川県丸亀市 田村町	37202	34° 16' 10"	133° 47' 50"	2005.4.1 ~2005.6.30	790m ²	県道高松普通寺線道路改修
川島本町遺跡	香川県高松市 川島本町	37201	34° 11' 09"	134° 5' 11"	2005.7.1 ~2005.9.30	1,275m ²	県道西植田高松線道路改良
川島本町南遺跡	香川県高松市 池田町	37201	34° 11' 00"	134° 5' 16"	2005.10.1 ~2005.11.30	448m ²	県道西植田高松線道路改良

所収遺跡名	種別	主な時代	主な造構	主な遺物	特記事項
田村遺跡 II	集落	飛鳥時代 ~白鳳時代	据立柱建物跡・ 櫛列跡	土師器・須恵器	
川島本町遺跡	集落	縄文時代後期	遺物包含層	縄文土器・石器	
		弥生時代後期 ~古墳時代前期	溝跡・井戸跡・ 土坑・柱穴	弥生土器・土師器	
		古代~近世	溝跡・柱穴	土師器・須恵器・陶器	
川島本町南遺跡	集落	弥生時代後期	柱穴	弥生土器・土師器	
		古墳時代後期	遺物包含層	須恵器・瑪瑙製勾玉	
		近世?	溝跡		

県道高松善通寺線道路改修事業 及び
県道西植田高松線道路改良事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

田村遺跡Ⅱ
川島本町遺跡
川島本町南遺跡

2007年1月31日

編集 香川県埋蔵文化財センター

〒762-0024 香川県坂出市府中町字南谷5001番地の4
電話 (0877) 48-2191

発行 香川県教育委員会
印刷 平和写真印刷株式会社

